旭川のアイヌ語地名研究

あさひかわ新聞 WEEKLY ASAHIKAWA
毎週火曜日発行 月1,260円 ONLINE
(株)北のまち新聞社 北海道旭川市8条通6丁目 TEL0166-27-1577 FAX0166-27-1617

掲載店募集中！ ashika.jp 旭川を知る・楽しむポータルサイト
話題の twitter を使った新コンテンツがオープン！
詳しくはこちらで！http://ashika.jp/

購読のお申込み
購読のお申込はこちらから
暮らしの隅を彫る
好評連載中

旭川のアイヌ語地名研究

旭川のアイヌ語地名研究について

あさひかわ新聞では毎週、多種多様な連載コラムを掲載しています。その分野は、歴史、美術、健康、文化、家庭の医学、社会派など、多岐に及びます。

この「旭川のアイヌ語地名研究」も本紙連載コラムの一つです。毎月第1週に連載しています。筆者の高橋基さん(アイヌ語地名研究会幹事、旭川市アイヌ語地名表記推進懇談会委員、旭川市文化財審議会委員)は、在住の地・旭川を拠点として、古書や資料に基づく研究、またアイヌ語地名の研究に欠かせないフィールドワークを重ねています。

アイヌ語地名を通して、往時の地形や、豊かなアイヌの人々の生活や文化を推察することができます。

本紙でこれまで掲載した「旭川のアイヌ語地名研究断章」をここに公開します。
なお、紙幅の関係で、出典文献詳細は、高橋基「"旭川"の地名起源考(1)～(3)」(『アイヌ語地名研究』4号～6号)、及び、「旭川の"神楽岡"のアイヌ語名について―上―」(同12号)をご参照下さい。

同コラムは現在も好評連載中です。アイヌ語地名にご興味のある方は、ぜひ本紙を定期購読の上、お楽しみ下さい。

バックナンバーにつきましては、過去の本紙を有料(1部350円)で販売しておりますので、あさひかわ新聞(電話0166－27－1577)までお問い合わせ下さい。

このHPから連載コラムをキュプチャしてPDFに集約させて載きました。

08/01/08 (1)「旭川」の地名起源

新連載

断章

旭川のアイヌ語地名研究 ①

明治二十三年九月二十日、北海道庁令六十一号により、石狩国上川郡に、神居村、旭川村、永山村の三村が初めて設置された。これが旭川の初出で、「旭川」は、忠別川のアイヌ語名チュッペッ（cup-pet 太陽、日・川）を意訳して名づけられた。

この説は、初代北海道庁長官・岩村通俊等の命で、アイヌ語地名を調査した永田方正の『北海道蝦夷語地名解』（明治二十四年刊行）の忠別川のアイヌ語地名解によったもの（他の根拠は割愛）。

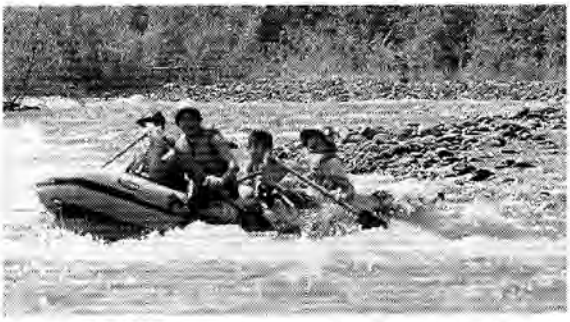
「Chup pet チュプペッ　東川—『チュプカペッ』二同ジ。此川ノ水源ハ東ニアリテ日月ノ出ル処故ニ名ヅク。明治廿三年旭川村ヲ置ク。」

これに対し、明治三十八年、ジョン・バチェラーは、忠別川はチウペッ（Chiu-pet 急なる河日・川）となり、意訳して旭川という地名が生れ、また、「チュプ」（chup 日）と「チュプカ」（chupka東）とを混同して東川などという地名も生まれた」とし、爾来、旭川では知里説が定着していた。

―「旭川」の地名起源―

Current river）であるとし、「チウペッは日本人により、チュプペッ、即ち"太陽の河"の如く誤られたる為め旭川（昇る日の川）なる誤名を得たり」と、永田方正説を誤りと指摘した。

昭和三十五年に旭川市史第四巻の「上川郡アイヌ語地名解」で知里真志保が、「忠別川―「チウペッ」（Chiu-pet 波・川）は「波だつ川」の義。それが後に民間語原解によって「チュッペッ」（Chup-pet



激流の忠別川を下る（船上右端が筆者）
＝1988年夏

昭和五十九年に山田秀三は、『北海道の地名』で、チウペッは旧記・旧図には出てこず、忠別川は旧記・旧図では、チュク・ペッであるとし、「忠別太は鮭場所であった。チュク・チェプ（chuk-chep 秋の・魚→鮭）が秋になると盛んに上る川だったので、チュク・ペッ（chuk-pet 秋・川）だったかも知れない」と書いた。私の調査でも同意見で、次回で触れたい。

右にみたように、忠別川のアイヌ語表記は三つあるが、「旭川」は、チュッペッ＝チュプ・ペッ（cup-pet 太陽、日・川）の意訳から誕生した。近年、「チュプ・ペッ創作説」が出されたが、明治二十年内務省地理局発行の『改正北海道全図』が、忠別川を「チュッペツ川」と表記、これがその後、北海道庁刊行物で採用されたことを、永田方正の名誉のためにも明記しておきたい。（ローマ字表記は原文によった）

高橋基・アイヌ語地名研究会幹事

（次回は2月5日付に掲載します）

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ②

―忠別川のアイヌ語名―

文化四年（一八〇七年）、近藤重蔵は、幕吏として宗谷までの巡検の帰途、天塩川を遡り、塩狩峠から比布の棚瀬山へ出て、ここから石狩川を丸木舟で下り、比布の番屋で一泊、翌日は更に石狩川を下り、忠別川との合流点下流左岸にあった番屋で宿泊する。**写真①**は、その時の近藤重蔵直筆の野帳で、現存する旭川最古の記録である。

日本語にないアイヌ語の発音トゥ（tu）をトゥやツと表記した最上徳内の薫陶を受けた近藤は、天塩川でツンベツボなどこの野帳でも正確なアイヌ語地名の表記をしている。今から二百年前のことである。

近藤の記録で先ず驚かされたのが、比布川口に番屋一棟、蔵三棟、番人一人という記述があったことである。また、掲載の**写真①**の部分では、忠別川を「チユクベツ」と明記、「此川上遠シ　番ヤ三ケ所アリ　此川上枝川ヨリトカチヘ越ヘシ」と、忠別川上流にも番屋が三ケ所あると記述。番屋とは、松前藩主または知行主が、アイヌの人たちとの獣皮・干鮭等の交易のために設置した建物。伝・間宮林蔵作成図にも、石狩川に二カ所、忠別川筋に二カ所の番屋が記載されている。上川が天産の宝庫の地であった証でもある。

近藤の踏査から五十年後の安政四年（一八五七年）に松浦武四郎が旭川を調査する。その時の調査基地も上川で唯一の番屋で、近藤の時と違い、忠別川を少し溯った左岸（忠和三条七丁目付近）にあった。わずか五十年後であるが、近藤が宿泊した比布の番屋や忠別川上流の番屋の記述は全くない。

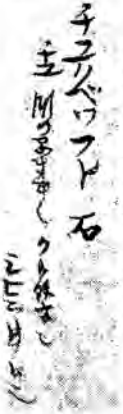
さて、アイヌ語が分かり、実際に旭川を踏査した、近藤、間宮、松浦の三人の忠別川のアイヌ語表記は、チュクベツである。すなわち、チュク・ペッ（cuk-pet 秋・川）、秋になると、チュク・チェプ（cuk-cep 秋の・魚→鮭）が盛んに上る川だったので命名されたのである。

ところが、松浦武四郎が、「チユクは汐早き川と云ふ事のよし也」と書いたばかりに、松浦武四郎研究の権威・秋葉實氏が、『松浦武四郎上川紀行』で、忠別川「チュウベツ―河流早い川」＝松浦説＝（知里説）と書かれた。チュクには、「河流早い」の意味はないし、**写真②**の松浦の野帳のように、情報提供者のシヒラ（シイピラサ）は、「チユ　瀬の早き事也。クは餘字也。」と言ったのであって、「チユクは汐早き川」は松浦武四郎の誤記で、「忠別川＝チュウベツ＝河流早い川＝松浦説」は、将来に禍根を残すので、誤りであることを明記させていただく。

高橋基・アイヌ語地名研究会幹事

（毎月第1週に掲載します）

写真①　近藤重蔵「石狩川川筋図」
川筋上の「未申」などの干支は、石狩川の川筋の方角、楕円の墨跡は距離を表わす。幅約16センチの巻紙に記載する上での工夫である。



写真②　松浦武四郎「巳第二番」

断章
旭川のアイヌ語地名研究
③

―間宮林蔵図の忠別川―

松浦武四郎の記録でも、間宮林蔵は、文化七年に愛別町の石垣山の麓まで来たと書き、野帳には、案内人も記載している。**写真**の間宮林蔵作成の地図（以下、間宮図と略称）は、秋葉實氏の研究で、文化十四年（一八一七年）に作成されたものという。写真の地図は、間宮林蔵の直筆ではなく、その写しで、写図と言われる地図であるが、忠別川を描いた最古の地図である。松浦は、この地図が作成された頃は、上川にはアイヌの人たちが、「凡千余人も有しと聞り」と書いている。

地図上の■印は「番屋」、●印は、朱色で、「コタン（集落）」を表している。忠別川は、「チユクベツ川」の表記。図中の「巛」は「川」を意味する表記で、この「巛」の表記は、幕府天文方の表記法で朱色で表記。この「川＝巛」の表記が間宮林蔵の作図である根拠の一つでもある。

さて、前号で間宮図に交易のための番屋が、忠別川に二カ所あると紹介した。その番屋（■印）が、忠別川の左岸支流に、二カ所記載されている。しかし、支流名が書かれていない。その支流の水源方向に、シベナイがある。松浦武四郎の記録にも、シベナイとあり、現在の東神楽町の志比内川である。そうすると、この支流は、現在の東神楽町を流れる現称・ポン川である。松浦武四郎は、この川をフシコチユクベツと記録、すなわち、フシコ・チュク・ペッ（husko-cuk-pet 古い・秋・川→古い・忠別川）である。地質時代の極く最近に、忠別川はこのポン川の流路を流れていたという（『旭川市史』）。その旧川口は、緑東大橋たもとの旭川市旭神町で、ここと上流の東神楽町に、番屋とコタンの印が記載されている。旭神町のコタンは明治時代まで存続し、明治二十年代で七戸二十人の記録がある。

なお、松浦武四郎が安政四年（一八五七年）に訪ねた時は、イソテク夫妻の一軒のみであったが、「昔は多く有りし由なり。今は只一軒也」と書いている。余談になるが、松浦の忠別川のここから上流の記事と、美瑛川・辺別川の記事は、全て聞き書きで、野帳によると、実際にはここまでしか踏査していない。

忠別川右岸の●印のコタンのあるコタンウンベツのアイヌ語地名は、間宮図が初見で、しかも松浦武四郎の記録にも、その後の史資料にもない川名である。コタンウンベツは、文字通り、（kotan-un-pet 村・ある・川）。現称・アイヌ川と推定され、松浦武四郎の記録は、キンクシベツ（kim-kus-pet 山側を・通る・川）で、水源まで五、六里で、水源の山は岐登牛山と書いている。

忠別川は鮭の豊漁川で、このようにコタンや番屋があったことと、間宮図の美瑛川の●印の三つのコタンについても、次号で触れたい。

高橋基・アイヌ語地名研究会幹事

（毎月第1週に掲載します）

《間宮林蔵作成図―忠別川》

断章
旭川のアイヌ語地名研究
④

―忠別川は鮭の豊漁川―

忠別川は、特に鮭の遡上が多い川で、元来のアイヌ語名はそれに由来している。まず、忠別川の鮭に関連するアイヌ語地名を見ると、東川町の江卸発電所とフカナンの間の小さな川が、カムイチェポッナイ（kamuycep-ot-nay 鮭・乱入する・川）。東神楽町志比内川は、永田地名解は、シペナイ（sipe-nay 鮭・川）で、間宮林蔵、松浦武四郎も同じ表記で、明治二十年代にもコタンがあり、地元での聞き取りでも鮭がとれたことが確認できた。

右記は忠別川上流の支流だが、中流では、地図の①現・南六条川のアイヌ語名は、チェポッメム（cep-o-ｍｅｍ 鮭・多く入る・泉池）。鮭の付くアイヌ語地名はこれだけだが、前号で紹介した、②現・アイヌ川のキムクシペッ、③現・ポン川のフシコチュクペッなどにも、鮭が盛んにのぼったという。

明治二十一年生まれで、大正・昭和と旭川の郷土研究のリーダーであった斎藤譲三は、③の旭川市旭神町在住だった石川タカラコレからの貴重な記録を残してくれた。タカラコレは、文政十二年（一八二九年）生まれで、旭神町のコタンに明治二十年代まで居住しており、かつて、安政五年の松浦武四郎の十勝越えの時に、旭川までの案内人の一人でもあった。タカラコレの話では、地図周辺の支流河川は、「晩秋になると、鮭群の遡上で川水は生臭くて飲めなかった」という。また、「春から鹿の群れを神楽岡山裾に追い込んで捕らえ」る好猟場でもあったという。それ故、間宮図のように忠別川の両岸にコタンと左岸の③フシコチュクペッに番屋（交易所）が設置されたのである。

斎藤はまた、「忠別川清流は魚族が豊かで、殊に鮭の遡上が多かった。忠別太から東川村西部までが、一連して好個の漁場で大忠別をなしていた。『旭川』という地名を考えると、漁利によって名付けられた。チユプ（旭）ペッ（川）、またはチエツプ（魚）ペッ（川）だとも上川古老アイヌは語っているが、いずれにせよ、その一致するのはともに豊漁を語っていることである」と書いたが、忠別川の本来のアイヌ語名のチュクペッは、既に忘れ去られていたのであった。

実証的アイヌ語地名研究を確立した山田秀三は、羽幌町の築別川、浦幌町と音別町境界の直別川のアイヌ語名の類推から、忠別川のアイヌ語名をチュク・ペッ（cuk-pet 秋・川）、すなわち、チュク・チェプ（cuk-cep 秋の・魚→鮭）が、秋になると盛んに上る川だったので、命名されたと指摘した。山田が見ることがなかった近藤重蔵、間宮林蔵等の踏査者の記録等でもそれが検証された。

山田秀三は、後年、筆者に私信で、チュクペッ（ci-i-uk-pet 我ら・それ＝鮭を・捕る・川）という試案を提示されたので、ここで紹介させていただく。

高橋基・アイヌ語地名研究会幹事

（毎月第1週に掲載します）

08/05/06 (5) 美瑛川の地名解と景観

断章 旭川のアイヌ語地名研究 ⑤

高橋 基

―美瑛川の地名解と景観―

明治二十三年に旭川を調査した永田方正は、美瑛川は、「ピイェ(piye 油)―水源ニ硫黄山アリテ**水濁リ脂ノ如シ**、故ニ名ヅク。古ヘハ単流シテ石狩川ニ注グ。今、東川(註・チュプペッ=忠別川)ニ合流ス」と地名解し、往古、美瑛川は忠別川と合流しないで、直接、石狩川へ流入していたという貴重な伝承を附記した。

松浦武四郎が安政四年(一八五七年)と五年に旭川調査の基地にした忠別太の大番屋は、美瑛川の古川の側に建っていたと永田方正は書き、その古川を、「フシュコピイェメム(古い・美瑛川の・池)」と記録した。

しかし、松浦武四郎は、忠別川のマクンベツ(川が左右に分かれている流れ)の右の流れに入り、大番屋に到着している。明治六年のワッソン、同七年のライマン、同九年の松本十郎たちは、いずれも、忠別川の古川を溯ってこの大番屋の最後の姿を目撃している。この大番屋は、旭川大橋の下流左岸、現在の忠和三ノ七付近にあったと推定される。

永田と同じ明治二十三年の「上川離宮建設地調査復命書」では、「魚類ハチユプペツ川ニ最モ多ク、ピイエ川ニ稍々少シ、**鮭魚ノ如キハ絶ヘテ栖息セズ**」と報告。他方、明治二十年、殖民地撰定に当たった福原鉄之輔は、その調査復命書に、「(美瑛川ハ)其深平均四尺許、水質汚濁**其色淡乳白**、而シテ水中ノ石礫皆帯青褐色ノ沈滓ヲ着ス。(中略)現ニ盛夏涸水ノ候ニ当リ魚族往々硫毒ノ脳ス所トナリ為メニ死スル者夥シトニヲ」と当時の状況を書いた。福原の復命書では、西ヲプタテシケの噴火山は黒煙を吐いていると明記している。史資料や聞き取り調査から、美瑛川は、鮭は全く遡上しないのではなく、水源の山々の噴火に左右されたようである。

さて、安政四年に松浦武四郎は、美瑛川を遡り、辺別川との合流点で一泊して、帰途についたと報告書に書いた。しかし、彼の野帳からも美瑛川は踏査せず、聞き書きであったことが判明する。**写真①**のウエンシリは、「ウエンシリ(wen-sir 険しい・崖)―川岸の断崖」を意味する。西神楽の新開橋下流、競馬場の裏手上流にある約一キロメートルにわたる川岸の断崖絶壁である。この景観を松浦は全く記述していない。

写真②は、深川市との境界の内大部川川口の石狩川下流の断崖である。この絶壁の所でチョウザメを捕って、内大部川に運んだと、永田方正が書いた絶壁の景観である。松浦武四郎は、この鳥瞰図を野帳と稿本にも描いている。その松浦武四郎が約一キロに及ぶ美瑛川のウエンシリの絶景を描かなかったのは、実際に踏査していない証左でもある。

いずれも、ゴムボートで川を下り、松浦武四郎の踏査の追跡調査をして発見した真実の姿である。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

①ウエンシリ

②野帳と実景

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑥

高橋 基

―辺別川と十勝の人々―

前回の美瑛川に比較して、旭川市民には、辺別川の知名度は、低いようである。知里地名解では、「ペペッ（pe-pet水・川）―水量豊かで流れの早い川の義だという」と書いている。不思議なことに、歴史的に重要な河川でありながら、永田地名解には採録されていない。

往古、辺別川は知名度の高い川であった。即ち、寛政五年（一七九三年）の『西蝦夷地分間』では、知行主・南條安右衛門の「下サツホロ場所」（正しくは、上サツホロ場所か）の地名として「ベベツ」があり、寛政初期迄の作と言われる『松前随商録』では、「上サツポロ―南條安右衛門支配―産物同断運上金古十六両但トカチクロ熊胆鷲羽上々所也」とあり、トカチに関わる権益場所を示唆。その番屋が、「ベベツ」にあったようである。

写真①は、文化四年（一八〇七年）に、近藤重蔵が旭川の番屋で宿泊し、江戸に帰着後、時の将軍・徳川家斉に拝謁、その後、幕府に求められて蝦夷地経営の意見書―「総蝦夷地御要害之儀二付心得候趣申上候書付」を呈上、それに付した「総蝦夷地略図」の写図で、現存する唯一の『蝦夷地図』の「ベ、ツ」である。ご覧のように、石狩川の一次支流が、「チユクベツ（忠別川）」で、二次支流が、「ベ、ツ（辺別川）」となっている。辺別川の初出の地図である。とすると、第三回の間宮図の美瑛川のコタンは、ベベツのコタンの可能性もある。なお、美瑛川の初出図は、間宮図で、「ビーエー川」である。

①近藤重蔵『蝦夷地図』

前回紹介したように、松浦武四郎は、安政四年（一八五七年）に、辺別川と美瑛川との合流点で宿泊したと書いたが、実際には踏査せず、聞き書きであった。しかし、アイヌ語地名を始め、貴重な記録を残してくれた。その主なものを要約すると、①忠別川との合流点から上流は、近藤図のように、二次支流が、辺別川であること。②この辺別川筋、美瑛川筋にも、昔は余程アイヌの人たちがいたが、今は一人もいない。③ここのアイヌの人たちの祖先は、十勝の人で、その子孫であること。④この地の居住者四十九人中、二十九人は、石狩浜に強制移住、強制労働をさせられている。二十人は、十勝に逃げ帰ったが、妥当な措置で、十勝で人口増を図るべきであると、場所請負制度の非道さを告発。

②モチャルックの像

松浦の記録のように、十勝川上流のアイヌの人たちは、ペペツから移動した系統で占められているという。また、ペペツウンケルを祖にするという家系も多いという。

写真②は、中札内村の、「サツナイ・ウン・クルの祖―モチャルックの像」である。碑文に、「一五〇〇年ころイシカリペペツ（美瑛川辺別）の人モチャルックがサツナイに住まいしサツナイ族の祖となれりという（後略）」。十勝とペペツの交流の歴史の深さに思い馳せるのであった。**（アイヌ語地名研究会幹事）**

※毎月第1週号に掲載します

08/07/01 (7) 神楽と神楽岡の名称（中）

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑦

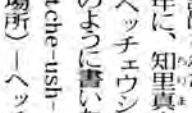
高橋 基

―神楽と神楽岡の名称(上)―

昭和四十三年に、旭川市に編入合併した神楽町の前身「神楽村」は、明治二十五年二月四日に北海道庁令第五号により設置された。

昭和三十五年に、知里真志保は、「神楽」は、「ヘッチェウシ」の意訳と地名解を次のように書いた。「ヘッチェウシ（het-che-ush-i 囃し・つけている・場所）―ヘッチェは歌舞に合わせてヘイッ！ヘイッ！と囃すこと。この場所でいつも歌舞したのでこういう名がついた。昔の祭場だったと思われる。意訳して神楽（かぐら）という地名が生まれた」

明治二十一年六月十五日、永山武四郎は、屯田兵本部長兼職で第二代北海道庁長官となる。永山武四郎は、その年の九月二十三日に近文山、半面山に登り、上川盆地を望見。翌、二十四日には、忠別川と美瑛川に挟まれた現・神楽二条十丁目から十二丁目附近の知里地名解のヘツチエウシと言われる高台から半面山や忠別平野を眺めた。その後、進んで丘山に登る。この丘山こそが、後述する「離宮」造営予定地の「ナヱオサニ」であった。現在の神楽岡である。永山は、この丘山を後述のように、「忠英山」と表現する。



①永山武四郎「忠英山」

明治二十二年十月になって、永山が巡検した右の地域を含めて、忠別川と美瑛川に挟まれた地域、一万〇五五二町歩余が、皇室の財産である御料地とされた。官有地第一種「皇宮地附属地」となったのである。全域が、後の神楽村域である。

永山武四郎は、明治二十二年十一月十四日、三条実美内閣総理大臣に、「北海道石狩国上川郡二北京ヲ設定セラレ度ノ件」を上申する。これは、北海道の拓殖移民を進展させるには、北海道に「北京」（北の皇居のある地）を設定するのが最善で、御料地で「忠英山」のある上川の地が最適である―と、千八百字におよぶ熱烈なる建議であった。写真①は、永山の建議書の「御料地内忠英山」の記述部分である。

②明治26年『上川市街村落図』

永山武四郎の北京建議は、「北京」を「離宮」と改めた上、「上川離宮設定」につき計画施行の旨、明治二十二年十二月二十八日付で、山県有朋内閣総理大臣から永山武四郎北海道庁長官に通達した。

道庁では明治二十三年から調査の結果、翌二十四年に、「上川離宮」造営予定地は、忠別川と美瑛川に挟まれた上川郡字「ナヱオサニ」と、復命書にアイヌ語地名が明記された。「ナヱオサニ」は、現在の「神楽岡」である。

写真②は、明治二十六年に発行された『離宮地 北海道石狩国 上川市街村落図』である。明治二十三年に誕生した旭川村の在住者によって発行された最古の旭川の地図である。現在の「神楽岡」は、永山武四郎の建議書にある「忠英山」と書かれている。明治二十五年に誕生した「神楽村」には、明治二十六年時点では、「神楽岡」の地名はなく、「忠英山」であったことを記憶に留めておいていただきたい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

08/08/05 (8) 神楽と神楽岡の名称（上）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑧

高橋 基

今号の地図は、明治三十三年に第七師団司令部の作成した『上川地方迅速図』で、地図上に初めて「**神楽丘**」が掲載された地図である。第四回で紹介した、明治三十一年製版『仮製五万分図』と比較すると、いかに詳細な地図かが歴然としている。また、この『仮製五万分図』では、「**神楽丘**」とほぼ同位置に、後述する「**ナヱオサニ**」と同義の「**ナヨサニ**」のアイヌ語地名が記されていたことも再記しておきたい。今号では、アイヌ語地名の「**ナヱオサニ**」と「**ヘツチエウシ**」の位置を特定したい。

まず、「**上川離宮**」（離宮―皇居とは別の所に建てる宮殿。桂離宮、赤坂離宮などがある）設定計画施行の通達に対する、明治二十四年の北海道庁の「上川離宮調査復命書」の十三の調査項目の第一項目の冒頭部分のみを紹介する。

『上川離宮造営予定地ハ、上川郡字「**ナヱオサニ**」ヲ以テ適当トナス。「**ナヱオサニ**」ノ地タル「チユプペツ」（註・忠別川）「ピイエ」（註・美瑛川）ノ両川ニ挟マレタル**一小丘**ニシテ高サ凡ソ**百十尺**（註・約三十三㍍）老樹鬱葱、其東北ハ絶壁ニシテ「チユプペツ」川其前ニ横ハル水最モ清冽ナリ。西南ハ傾斜緩慢ニシテ眺望開濶、東南ハ山巒漸ク高キヲ加ヘ遂ニ御料地ノ域ヲ踰ヘ「ペペツ」岳ニ達シテ止ム。其広サ南北六里東西二里、（後略）』。

「上川離宮（宮殿）造営予定地」が、上川郡字「**ナヱオサニ**」で、その「**ナヱオサニ**」の地は、高さ約**百十尺**（標高約百五十㍍）の**一小丘**で、東北は眼下に忠別川が流れる**絶壁**、西南は傾斜緩慢で、眺望開濶であるという。掲載地図の「**神楽丘**」の部分が該当する。ここが、「**ナヱオサニ**」＝「**ナヨサニ**」で、この場所に、大正十三年に上川神社が遷宮する。現在の上川神社境内が「**ナヱオサニ**」に該当する。

―神楽と神楽岡の名称(中)―

他方、「**神楽村**」の起源となった「**ヘツチエウシ**」の初出は、明治二十一年九月二十四日の永山武四郎の巡検時の記事である。すなわち、同年十月十七日付の野中搦泉による『北海道毎日新聞』の記事である。

「（前略）美英河畔に至りて馬を捨て、刳舟に乗して前岸に渡り徒歩して行く。河岸蝗虫（註―トノサマバッタ）夥多し。行くこと数町**高台**（註―現在の神楽二条十丁目から十二丁目付近の高台。掲載地図の★印）あり。此処即ち**ヘツチエウシ**なり。聞く、**ヘツチエウシ**とは囃子と云ふの義なり。伝へ云ふ、古昔神あり。此処に於て音楽を奏したりと。是れ此名ある所以なりと。此地忠鼈事務所を距る一里余、**台上**樹木なく茅蔌の類生長す。遠く半面山を眺め、又、忠鼈平野をも望むべし。（中略）進んで**丘山**（註―この丘山が、離宮造営予定地の「**ナヱオサニ**」＝「**神楽丘**」である）に登る。林木皆槲なり。（中略）暫く丘上の林間を徘徊し地形を視了りて、美英河畔に戻り舟に乗して河を下る。」

このように、アイヌ語地名の「**ナヱオサニ**」と「**ヘツチエウシ**」は、それぞれ異なる地点であることを明記しておきたい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

明治33年『上川地方迅速図』

08/09/02 (9) 神楽と神楽岡の名称（下）

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑨

高橋 基

―神楽と神楽岡の名称(下)―

前回まで、明治二十五年二月四日に設置された「神楽村」の村名の由来は、アイヌ語地名の「ヘッチェウシ」の意訳で、村名が誕生してから、神楽村にある岡（丘）の意味で、「神楽岡（丘）」の名称となったこと。その神楽岡は、明治二十四年時点では、離宮造営予定地で、アイヌ語地名の「ナヱオサニ」の名称があり、高さ約百十尺（標高約百五十㍍）の地で、東北は眼下に忠別川が流れる絶壁…という条件から、大正十三年に遷宮した上川神社境内であることを明らかにした。写真①は、上川神社境内の史跡上川離宮予定地標柱である。

他方、「ヘッチェウシ」は、第二代北海道庁長官の永山武四郎が、明治二十一年九月二十四日にこの地を巡検し、丘山（ナヱオサニ＝神楽岡）に登る前に、通過した高台（標高約百十五㍍～百二十㍍の現・神楽二条十一丁目～十三丁目周辺）である。

写真①上川神社境内の史跡上川離宮予定地標柱

元来、アイヌ語地名の「ナヱオサニ」と「ヘッチェウシ」は、異なる地点であったが、「ヘッチェウシ」が、「ナヱオサニ」の地に取って代わって、「神楽岡」の地名起源とされるようになった。その先駆となったのが、明治三十年から三十三年まで、初代上川支庁長を務めた林顕三の著書『北海誌料』（明治三十五年刊）の記事で、その後は、これが踏襲されたのであった。

写真②標高121㍍で離には吉田神社がある

「旭川村開村の謎」で、松井恒幸氏は、嵐山同様に、京都にある神楽岡に因んで、神楽岡と命名したのは、岩村通俊としている。確かに、京都には、一般的には吉田山と言われている所に、旭川同様に、写真②のように、神楽岡がある。しかし、林顕三は『北海誌料』で、「明治三十四年六月、御料局長岩村男爵当地巡回ニ際シ、旭川町有志集合全局長ヲ神楽ケ岡ニ迎ヘタル時、神楽ケ岡ヲ『旭ケ岡』ト改称スル旨伝ヘラル。爾来『旭ケ岡』ト称ス」と書いた。岩村通俊は、『大日本地名辞書』（続編序）で、「近文」の命名は明言しているが、「神楽岡」については全く言及していなし、林顕三の記述から、岩村が神楽岡と命名したのであれば、自ら旭ケ岡と改称の提案はしなかったであろう。

また、『旭川市史』や『永山町史』で、永山武四郎の短歌…「上川の清き流れに身をそそぎ　神楽の岡にみゆき仰がん」…これは、明治二十一年九月の上川入りの時の「即詠」とある。しかし、これまで見てきたように、この時点で神楽岡の名称はなかったし、もし、永山武四郎が意識をしていたとしたら、「北京建議」に「忠英山」ではなく、当然、「神楽岡」が使用されていたであろう。明治二十四年六月の侍従片岡利和の巡視の際も、北海道毎日新聞の記事では、「御料地の見込みなる字ナイヲオサニ」というアイヌ語地名をそのまま表記しているのであった。

なお、本稿の詳細については、本年末刊行の『アイヌ語地名研究十一号』に掲載予定ですので、参照いただければ幸いです。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑩

高橋 基

―近文と鷹栖の名称由来―

昭和三十五年に知里真志保が、「近文」の由来を次のように書いた。『チカプニ（Chikap-un-i 鳥・来る・所）近文山の川に臨んだ山面に大きな岩があり、いつも鷹が来て止まっていたのでこの名がついたという。意訳してちかぶみ（近文）という地名が生まれ、意訳してたかす（鷹栖）という地名が生まれた。』

写真①が、「近文」の起源となった大岩で、石狩川右岸にあり、オサラッペ川口と江丹別川口との中間にある近文山の斜面にある。

前号で、「近文」の命名者は、初代北海道庁長官の岩村通俊と書いたように、岩村通俊は、『大日本地名辞書（六巻序）』（明治四十二年刊）で、「（前略）上川盆地の眺望について）皆云ふ、何ぞ其た西京（註・京都）に類するやと。余窃かに案志を遂くるの遠からざるを喜べり。後碑を此山に建つるに当り、アイヌ語のチカプニを雅訳して近文と云ふ。是れ余が地名を命せし大略なり」と記し、他に、創成川、月寒、花畔、鹿の湯、定山渓を命名したと明記している。

写真① チカプニの大岩

右は司法大輔（現在の次官）だった岩村通俊が、明治十八年八月に初めて近文山に登り、所謂「国見」をし、翌年、**写真②**の「近文山国見の碑」（旭川市指定文化財）を建立した時の命名由来記でもある。

この時同行した札幌県地形測量主任の福士成豊に描かせた『上川原野見取図』、帰途、函館で三条実美太政大臣に郵送した「褒北京於北海道上川再議」に、それぞれ早くも近文山が使用されている。

明治十九年に初代北海道庁長官となった岩村通俊は、翌二十年十月十三日に、再度近文山に登り、紀行文に次のように書いた。「（前略）石狩本川二出デ紆余曲折シテ下リ、十時四分近文山下二達ス。舟ヲ捨テ上陸ス。近文ハアイヌ語「チユッカプミ」ニシテ、鳥ノ住ス所ト云フ義ナリ。此川魚多クアイヌ之ヲ漁スル時、其ノ魚腸等ヲ抛ツラ以テ鳥之ヲ啄ンカ為メニ、常ニ此山上ニ集ル二因ル云（後略）」（明治二十年十月 上川紀行案）

おわかりいただけますか。「チカプニ」と「ちかぶみ」の音が合わなかったのは、岩村通俊は、「チユッカプミ→近文」と漢字を当てたためと判明するのです。岩村が「アイヌ語のチカプニを雅訳して近文と云ふ」と書いた「チカプニ」は、岩村が明治二十一年三月に編纂を命じた、永田方正の『北海道蝦夷語地名辞』（明治二十四年刊）で得た知識だったのである。

明治二十三年に旭川を調査した永田方正は、「近文」の起源の地名解を次のように書いた。「Chikapuni. = Chikap-un-i **チカプニ**＝鳥居ル処 此ノ山ノ川二臨ミタル処ノ山面ニ大岩アリ。鷹常ニ来テ此岩上ニ止ル。故ニ名ヅク。」

写真② 近文山国見の碑

永田は、**チカプニ**（Chikapuni.）は、個々の発音は、チカ（Chikap鳥）・ウン（un 住む、いる）・イ（i 所）で、続けて発音すると（連声の法則―リエゾン liaison）、**チカプニ**（Chikapuni.）となることを冒頭に記し、次にその由来を述べた。岩村は永田のこの説を受けて、「チユッカプミ」を「チカプニ」に改めたのであるが、「近文」の漢字表記は、既に定着していたのであった。

永田方正は、アイヌの人たちは、当然、「チカプニ」と呼んでいるが、個々の単語に分解して、そこから、「チカプニ」は、「鳥居る処」と訳し、その上で、アイヌの人たちから聞いた由来を記したのであった。当時としては、画期的な地名解であった。冒頭の言語学者の知里真志保も、永田の説を踏襲したのは明白である。

他方、前回も紹介した、明治三十年から三十三年まで、初代上川支庁長を務めた林顕三は、大著『北海誌料』（明治三十五年刊）で、「鷹栖村」の起源をアイヌ語の「チカプニ」とするのであるが、「チカプ（鳥）ニ（ni ―木）」と解釈して、次のように書いたのであった。

「鷹栖村ハ原名チカプニ（今、意訳シテ近文ト書ク）ヲ意訳センモノナリ。即チ「チカプニ」ハ大鳥ノ棲ム樹ト云フ意ニシテ、原野ノ中央ニ横ハル丘陵（今、称シテ高台ト云フ）ノ石狩川ニ臨ム処ニ老樹アリ。鷹来リテ常ニ此ノ樹上ニ栖メリ上云フ。故ニ里方村名トセリ。」

これを受けてか、大正三年発行の『鷹栖村史』では、「ちかつぷにトハ、大ナル鳥ノ棲ム巣ノアル所トイフ意味ナリ、即チ近文台地ノ樹林中、大ナル鳥ノ巣ヲ構ヘタルヲ視テ、此台地付近二命名シタルモノナリ」とある。また、鷹栖町のホームページの「町名の由来」を見ると、「大きな鳥（鷹）の棲むところ（巣）や「チカップニ」とあるので、これらの史書の誤りの影響が、まだ続いているように思われるのである。

明治二十五年二月四日、道庁令第五号で鷹栖村が設置された。村域は、上川郡の石狩川右岸の全域―すなわち、現在の鷹栖町は勿論、比布町、愛別町、上川町、旭川市江丹別、そして、現在は旭川市域の近文町から東鷹栖までの石狩川右岸の全域が、鷹栖村であった。

現在の旭川市域の近文から東鷹栖までの石狩川右岸は、明治二十年に道庁殖民課の福原鉄之輔による殖民地撰定で、「チカプニ原野」として区画測設がされていた。それ故、村名として「近文」は使用できず、「チカプニ」を意訳して「**鷹が栖む所**」→「**鷹栖村**」と道庁の担当者によって命名されたと推測される。

『旭川市史』で、「鷹栖」の命名者も岩村通俊としているのは、前述の「序」からも誤りといえる。なお、近文第一小学校、近文第二小学校が、東鷹栖に現存するのは、右の歴史を物語っている。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第一週号に掲載します

08/11/04 (11) 近文とアイヌ語地名履歴

断章

旭川のアイヌ語地名研究 ⑪

高橋 基

―近文とアイヌ語地名履歴―

前回は、近文山のアイヌ語名「チカプニ(cikapuni)」は、チカプ(cikap鳥=ここでは鷹)ウン(unいる=栖む)イ(i所)を続けて呼んだ形で、この近文山のアイヌ語名から、音訳して「近文」、意訳して「鷹栖」という漢字表記がなされ、村名、字名、地域名、町名と天地名になった由来を歴史的背景を述べながら紹介した。今回は、近文山のアイヌ語名「チカプニ」の履歴を見ていきたい。

これまで見てきた文化期の近藤重蔵、間宮林蔵の地図にはチカプニの記載がない。最古の記録は、天保五年(一八三四年)の『松前嶋郷帳』(天保郷帳)の「チカワウニ」で、写真①は天保九年(一八三八年)の『蝦夷地図』で、天保御国絵図『松前蝦夷図』の写しかと言われる図。稚拙な地図ではあるが、今井八九郎が調査に関わった地図と言われ、地名は、『松前嶋郷帳』と同じであるが、郷帳では左岸と右岸の記載がないが、地図では右岸に「チカワウニ」と明記されている。「チユクヘツ」は忠別川。

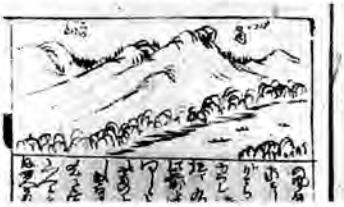
写真① 蝦夷地図

写真②は、安政四年(一八五七年)の松浦武四郎の上川調査時に携行した野帳(フィールドノート)の『巳第二番』で、幅八cm、長さ十七cmの和綴じメモ帳である。神居古潭の脊志内でシヒラサからの聞き書きである。「チカプニ 山の名也。左 古人家二軒、今はなし(シヒラサ申口也)」チカプニは、左にある山の名と明確に記録している。なお、刊行の翻刻、また「川筋図」にチカプニとあるのは誤りである。

写真③は、神居古潭から石狩川を丸木舟で上流に遡り、近文山での野帳の記述で、「チカフニ 左山に大岩見ゆ(以下略)」とあり、これが、前回の写真①の「チカプニの大岩」である。

写真 野帳②、③

松浦武四郎は、この野帳をもとに、報文日誌「再篙石狩日誌」を記し、幕府に呈上した。写真④は、松浦の自筆草稿の添え画で、「チカフニの図」。本文の表記は、「チカプニ」で、「凡 頂上まで五丁斗、上に岩有。転び落べきかとも思ふ形也。」が、近文の由来となった大岩の形容。他の本文は割愛するが、松浦がこの近文山に登り、その眺望を記述しているのは、野帳からみて明らかにフィクションである。


写真④ チカフニの図

明治六年、ワッソンの測量に助手として同行した、開拓少主典の平林通悟の『北海紀行』では、「チカプニ―六戸二十九人」、「上チカプニ―六戸十八人」と、「チカプニ」はコタン名として記されているが、位置の特定は出来ない。明治八年のワッソンの『石狩川踏査図』では、石狩川と忠別川の合流点の現在の亀吉、曙、西地区の位置に、「チカプ子Tskabuni」と記載されている。

明治二十年内務省発行の『改正北海道全図』では、山名に「チカフニ山」、現在の川端町周辺に地名として「チカフニ」と別々に記載している。前回の近文(原野の原典となった地図である。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します

09/06/02 (18) オサラッペ川余談

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑱

高橋 基

―オサラッペ川余談―

今年も五月十日の「母の日」には、室蘭本線の無人駅「母恋駅」の切符が、発送依頼を含めて沢山売れたという。「母恋」はアイヌ語地名起源で、諸説あるが、永田地名解は、「ポコイ（pok-o-i 陰・の処）」、知里地名解は、「ポコイ（pok-o-i ホッキ貝・群生する・所）」。アイヌ語地名に好い漢字が当てられ、現在も使用されている室蘭市の町名と駅名である。母の日が近付くと、毎年話題になる。

さて、オサラッペ川は、元来はオサルペッで、伊達市を流れる長流川も同音で、諸説あるが、こちらは、オサルペッ（o-sar-pet 川口・葭原・川）が有力な説。支笏湖の西山から流れ噴火湾に流入する長い川で、「オサルペッ」が漢字表記の「長流川」となり、この川名から、伊達市の字名、学校名、駅名に、「長流」が使用されてきた。しかし、「長流」の音が、「お猿」に通じるので嫌われ、昭和三十四年にこれらは全部「長和」と改称された。

このように、アイヌ語地名も、漢字表記化の段階で、漢字の持つ「音」と「意味」に地名の印象が左右された。明治二十四年に永田地名解で、「o-saratpe オサラッペ―女神玉門ヲ出シタル処。」と書かれたオサラッペ川ではあったが、地名解だったために、あまり多くの人に知られず、排除もされず、知里地名解で「奇怪な伝説」と批判されるぐらいで、川名もカナ書きのまま残ったのではなかろうか。

現在の旭川市西神楽は、かつては神楽村西御料地で、明治三十二年に十勝線（現・JR富良野線）辺別駅が設置され、駅周辺は辺別市街と呼称されていた。当シリーズの第六回の辺別川によった名称である。昭和三年には西神楽と字名改称されたが、「辺別」は語呂が悪いと、漸く昭和十七年に西神楽駅と改称された。

西神楽より明瞭な意図で改称したのが、室蘭本線の豊浦町と豊浦駅。元はベンベ川に由来し、明治初年には弁辺村、明治三十五年には二級町村弁辺村となり、昭和三年長輪線（後に室蘭本線）開通で弁辺駅が開駅。昭和十年、語呂が悪いので、村名を豊浦と改称、同時に駅名も改称した。辺別も弁辺も、漢字名の「音」が、北海道方言で女陰をさす言葉と音が似ているので、改称したと言われている。

近年、嬉しいことに旭川に関わるアイヌ語辞典が、三冊公刊された（出版年順）。①編者・魚井一由『旭川採集アイヌ語動詞集』②井筒勝信編『アイヌ語旭川方言辞典草案』③監修・川村兼一、執筆・校閲・太田満『旭川アイヌ語辞典』。それぞれオサラッペ川に触れているが、紙幅の関係で、ここでは①の関係分のみ略記する。

・osar＜o（陰部が）sar（出ている）オサル。陰部が露出している。第Ⅱ類動詞。（例文略）

・sar. サル。①出ている。第Ⅱ類動詞。o-sar-pet. 河口が出ている川。冬でも河口が凍らない川。オサラッペ川。門野トサ談。②（省略）

ここでは、永田地名解の「o-saratpe オサラッペ―女神玉門ヲ出シタル処。」という伝説の根拠も明確になっている。

オサラッペ川は、地名起源の多様さを物語るアイヌ語地名の典型である。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

―アイヌ語地名表示板―

オサラ ペッ オサラッペ川
O-sara-pet
川尻 開いている 川

石狩川との合流点の河口が開いている（冬でも凍らないという意味？）とも理解できますが、一方で オ・サラ・ペッ O-sar-pet（川尻・ヨシ原・川）という説もあります。

旭川市教育委員会

チノミシリルイカ橋に設置されたアイヌ語地名表示板

09/01/06 (13) 近文…流布文と原点

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑬

高橋 基

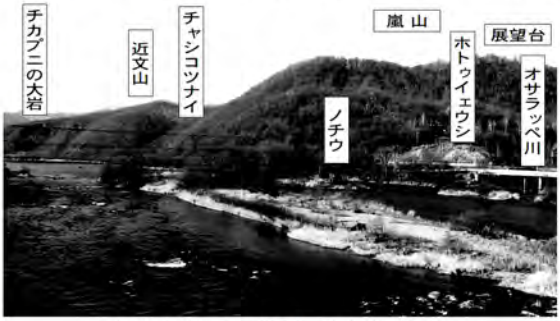
― 近文…流布本と原典 ―

北海道のアイヌ伝説を幅広く収録し、最も流布したのは、更科源蔵の『アイヌ伝説集』であろう。アイヌ伝説が地方別に編纂され、詩人の文章で読みやすく書かれている。

これには、「近文の伝説」として二話が掲載されている。二話とも、近文の語源を、「旭川郊外の近文は元の名をチカップニというのであって、**鳥のいる木**という意味の地名」と、これまで指摘した**誤訳**が書かれている。二話ともその出典を、近江正一著『伝説の旭川及其附近』としている。近江のこの書は、昭和六年に旭川郷土研究会から発行され、昭和二十九年には、『郷土の地名と伝説』として、加筆され出版された。ここでは、前著の「孔雀伝説」を紹介する。

「近文はアイヌ語チカップニ(孔雀(くじゃく))の棲んだ山の意)より生まれた地名であるが、太古非常に美しい夫婦の孔雀が今の近文山に住んで居た。附近に居住してゐたアイヌ達は、これを神として毎年祀って居たが、何時の頃からか居なくなった。アイヌは此美しい孔雀を忘れる事が出来ず、此附近にチカップニといふ名をつけた。だから単に近文といふのでなしに近文山と呼ぶ事が本当であるといふ。」

ここには、更科源蔵が書いた「チカップニ＝**鳥のいる木**」の訳はない。また、更科は、「この**孔雀**はもちろん現在の孔雀ではなくて、伝説的な巨鳥**フリーカムイ**のことであるという」と、原文にない文章で、この伝説を結んでいる。しかし、知里真志保によると、孔雀は、「ケソラプ(kesorap <kes-o-rap 斑紋・ある・翼) ―説話や伝説にでてくる美しい鳥の名。今の古老は孔雀のようなものを想像している」。他方、更科のいうフリーカムイについては、「フリ(huri) ―神話および伝説の中に現れる巨大な怪鳥」(『地名アイヌ語小辞典』)…と、伝説の中でも、それぞれ別な伝説上の鳥としている。したがって、更科のように憶測で原文を歪曲するのは問題がある。



近文大橋から石狩川下流右岸の展望

近江正一は、大正九年に旭川新聞の記者として、篤彦生のペンネームで、村山ヨモサク翁からの聞き書きを「アイヌ種族の伝説」として二十六回にわたり連載した。孔雀伝説は第二回の記事。ヨモサク翁は、明治二十一年に第二代の北海道庁長官・永山武四郎が近文山に登り、神楽岡を視察した時、「副酋長ヨモサク」として、和語に通じ大活躍した人物。

新聞記事では、近文山に「チツカプミといふ名をつけた」であったのが、昭和六年版では「チカップニ(孔雀の棲んだ山の意)」となり、ここまでは良かったのであるが、昭和二十九年版では、「此の所を**チカップウニ**(孔雀の**巣のある処**)という名をつけました」と**誤訳**が書かれ、昭和三十四年発行の『旭川市史』の「アイヌ伝説」でもこれを踏襲した。

この他、良く知られている、更科源蔵の『アイヌ語地名解』、旧国鉄の『駅名の起源』の「近文」も、同様な問題点が見られるので、史資料は原典に当たるのが鉄則と、改めて認識させられるのである。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

09/02/03 (14) ノチウとオサラッペ川（上）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑭

高橋 基

ノチウとオサラッペ川（上）

知里真志保は、オサラッペ川の原名は、「オサルペツ（o-sar-pet 川尻・葦原・川）。川尻に葦原のある川の義」―と書いたが、明治二十三年に調査した永田方正は、「サラは出すの義、此処茅なし」と、わざわざ注記している。オサラッペ川の川尻、すなわち石狩川に流入する所、石狩川との合流点の状況が、川名になったもので、地名解では、川尻（川口）の状態が重要なポイントとなる。

さて、写真①は、昨年の十一月に近文大橋から、オサラッペ川の川口を撮影したもの。オサラッペ川は、JR函館本線の鉄橋の下を通り、その手前のサイクリングロードの草苗橋の下を通って、そのすぐ先で石狩川に流入している。星が落ちて来て、岩になったという伝説の岩「ノチウ（nociw 星）」は、石狩川の中にある。これが現在のオサラッペ川の川尻（川口）の状況である。

写真①

ところが、今から百五十二年前の安政四年（一八五七年）六月、丸木舟に乗った松浦武四郎は、神居古潭から石狩川を遡り、オサラッペ川の川口の状況を写真②のように描いた。この絵は幕府に提出した「再巡石狩日誌」の稿本の自筆のもの。本文には、「サルプ川口巾十五六間、前に一ツの岩有り、其風景よろし」と書いた。「一ツの岩」が、添画の「ノチウ」である。すなわち、この「ノチウ」は陸続きの地にあり、ここがオサラッペ川の川口だったことを物語っている。

写真②

明治二十一年九月、第二代北海道庁長官の永山武四郎の上川巡検に同行した『北海道毎日新聞』記者・野中掬泉は、一行の近文山および半面山登頂の帰途、わざわざ丸木舟からおりて、このノチウを観察し、次のように記述した。

「（近文）山を下り、舟に乗じて川を上り、嵐山の麓を過ぎ字オシヤラッペに至る。此処河畔密林の中、一大巌石あり。アイヌ之れを隕星石と称して尊崇すと。余之れを聞き、舟を止め、直に（阿部宇之八）社長と共に岸に上り、舟子アイヌを嚮導とし、荊棘を排して林中に入る。巨巌あり。林樹深き所に直立す。其高さ大約丈（約三・〇三㍍）余、就て之を見る。赤色にして白斑あり。其質近傍山岳及び河中にあるものと異ならず、唯砂州樹林の中に孤立し、其形状大に風致あるのみ。アイヌに隕石の由来を問ふも、唯口碑に伝ふると答ふるのみ。是れ亦た神居古潭の類なるか。再び船を棹して上る。夕陽、面に映ずるや、又忽ち背を照す。以て石狩河流の曲折するを知るべし。」…と、このノチウが陸続きにあり、「高さ大約丈余」の「一大巌石」「巨巌」だったこと、また、当時の石狩川の蛇行の様子が簡潔に記されている。

明治三十三年生まれの荒井源次郎翁も、「ノチウまでは陸続きで、ここによくフキを取りに行った。オサラッペ川はこの岩の先で石狩川に合流していて、ここでよく泳いだものだ」と教えて下さった。

次回に「巨巌」ノチウと、それを踏まえたオサラッペ川の地名解を述べたい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

09/03/03 (15) ノチウとオサラッペ川（中）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑮

高橋 基

―ノチウとオサラッペ川(中)―

オサラッペ川の川口には、伝説の岩「ノチウ（nociw 星）」があり、明治三十年生まれの砂沢クラさんは、この伝説の岩について、次のように回想している。

「オサラッペ（ヨシ原の間を流れる川）の出口のところには天まで届くような背の高い岩があったそうです。ある時、星が落ちたので、みなで走って見に行くと、この岩が立っていたので、村の人はこの岩をノチウ(星)と呼んでいました。母（ムイサシマット）が小さい時には、天にまで届くか、と思うほど大きかったそうですが、私が見た時にはずいぶん小さくなっていました。」（『私の一代の話』）。

砂沢クラさんが記憶していたオサラッペ川の意味と、ノチウの伝承と、ノチウの大きさに対する母と娘の印象の相違が率直に述べられている。

かつては陸続きにあったこのノチウは、現在は石狩川の中にあるため、前回写真で紹介したように、上流にある近文大橋、または、サイクリングロードからしか見ることが出来ない。どちらから見ても、砂沢クラさんが書いたように、「ずいぶん小さく」見える。

昭和六十三年七月、ゴムボートで石狩川を下った時に、前回紹介した明治二十一年の野中掬泉の新聞記事の「高さ大約一丈（約三㍍）余」の「一大巌石」「巨巌」の確認のために、このノチウを調査した。写真がその時のもので、手前にあるのが四人乗りのゴムボート、ノチウの中段に三名の高校生が立っている。これから推定すると、ノチウは、基底部から約八㍍余もある巨大な岩である。遠くからでは、砂沢クラさんの印象のように小さく見えるが、「一大巌石」「巨巌」にふさわしいものであった。

さて、先の野中掬泉の新聞記事で、和語に堪能な「副酋長ヨモサク」と紹介された、天保十三年（一八四三年）生まれの村山与茂作翁は、オサラッペ川の「永田地名解」に対して、「そんな神話も伝説も別にない。別して深い意味はないのである。サラといふのは湿った葦の生へてゐる土地の事、ペは所の意であるから、アイヌは葦の生へてゐる湿地の沢山ある所といふ意味でオサラッペと云ったものである」（『伝説の旭川及其附近』）と解説している。

先月の二十四日が、生誕百周年（明治四十二年生まれ）であった知里真志保は、登別生まれであるが、姉の知里幸恵が『アイヌ神謡集』を執筆中の大正十年四月から、幸恵が上京して金田一京助宅で亡くなるまでの一年半余を、旭川の北門尋常高等小学校（附属小学校の前身）に在籍していた。後年、言語学者として北海道大学教授となり、「上川郡アイヌ語地名解」を残してくれた。その中で、「オサラッペ川―原名オサルペツ（o-sar-pet 川尻・葦原・川）。川尻に葦原のある川の義」と、村山与茂作翁や砂沢クラさんが触れなかった、オサラッペ川の「オ（o―川尻―川口）」が、葦原である川と、アイヌ語文法に則り地名解をした。現今、これが通説となっているが、次号で他の説と新説も紹介したい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第一週号に掲載します

09/04/07 (16) ノチウとオサラッペ川（下）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑯

高橋 基

ノチウとオサラッペ川（下）

旭川のアイヌ語地名で、最も物議を醸しているのが、オサラッペ川である。それは、明治二十三年に旭川を調査した永田方正が、『北海道蝦夷語地名解』で、次のように地名解を書いたからである。

「o-saratpe オ サラッペ 女神玉門ヲ出シタル処。『サラ』ハ出スノ義。此処茅ナシ」

永田方正は、オサラッペ川の川口（＝川尻）には、「サラ sar 葦原（永田は茅と表記）」がないことをわざわざ明記し、「サラ sara」は「出す」の意味であると注記している。永田方正は、『北海道蝦夷語地名解』で、六千余のアイヌ語地名解を書いているので、オサラッペ川は、単に、「オサラペッ o-sar-pet 川口・葦原・川」でないことを暗示した上で、「女神が、玉門（陰部）を出した処」と伝説を書いたのであった。

既に紹介したところであるが、昭和三十五年に、知里真志保は、永田地名解に次のように真っ向から異論を唱えた。爾来、旭川では知里地名解が支持されてきた。

「おさらっぺ川―原名オサルペツ（o-sar-pet 川尻・葦原・川）。川尻に葦原のある川の義。それが転訛して、オサラッペとなり、オ・サラ・ペ（陰部・あらわれている・者）などの意に俗解され、『女神玉門ヲ出シタル処』（永田氏『地名解』）などの奇怪な伝説を生むに至った。」

昭和五十九年に、山田秀三は、『北海道の地名』の中で、右の永田地名解、知里地名解を紹介した上で、「ただ、土地の音が昔からオサラッペな点が気にかかる。近文の古老は、足を開いて陰所を出すことをオサラという。この川尻が開いているので、オ・サラ・ペッ（o-sara-pet 陰所を・出している・川）と呼んだのかも知れないと語った」と追記した。

写真①

写真② ノチウのスケッチ

さて、これまでも何回か紹介した、松浦武四郎が、安政四年（一八五七年）に旭川の調査時に携行した野帳（フィールドノート）『日 第二番』には、文化三年（一八〇六年）生まれのシイピラサからのオサラッペ川の貴重な聞き書きが記録されている。

写真①がその部分で、「ヲサラベツ 左 物をわける事を云。差開し故云り」とある。ハルシナイから丸木舟で石狩川を遡ると、ヲサラベツは左岸にあり、その川口が開けているので、「物を分ける」意味で名付けられた―というもの。また、武四郎は、丸木舟の中から、野帳の余白に、**写真②**のように伝説の岩「ノチウ（nociw 星）」をスケッチしている。

松浦武四郎は、この野帳を元に、公式日誌報文の「再篙石狩日誌」を著わした。前々回の写真②のノチウの添画の部分で、本文は、「サルブツ―川口凡十五六間（註・約三十㍍）、前に一ツの岩有、其風景よろし。本名オサラベと云よし。訳して物の終りと云事のよし」と地名解には、野帳と異同がある。

本来はオサラペッという川名が、なぜ公式名称のオサラッペ川になったのかの履歴を含めて、次回はオサラッペ川のまとめとしたい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

09/05/05 (17) オサラッペ川の表記履歴

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑰

高橋 基

今回は、旭川を実際に踏査・調査した人物によるオサラッペ川の表記の主なものを一覧する。

文化四年（一八〇七年）の近藤重蔵の川筋図、蝦夷図には、オサラッペ川の記録はない。第三回で紹介した伝・文化十四年（一八一七年）、間宮林蔵作成の蝦夷地図では「ヲサツベ川」、支流に「トイヲサラベ川」がある。間宮の資料を元に編集され、高橋景保がシーボルトに贈り、その後幕府に没収されたという、『蝦夷図』では「ヲサラッペ川」で、「ヲサラッペ」の初出。

安政四年（一八五七年）、大雪山連峰を踏査した箱館奉行イシカリ詰の松田市太郎の『イシカリ川水源見分書』（松浦武四郎の書写）では、「ヲサラベツ」。同年に調査の松浦武四郎は、前回紹介したシイピラサからの聞きが、「ヲサラベツ—物を分ける事を云。差開けし故云り」。同じ野帳で、上川の大首長であった文化十三年（一八一七）生まれのクウチンコロからの聞き書きでは「オサラベ」である。写真①は、その野帳のオサラベの部分で、支流名が十一個記載され、その最後の支流名が、「イフンハウシヲサラッペ」。これらが、写真②の『川々取調帳』に描かれ、『東西蝦夷山川地理取調図』に転写され、また、報文日誌「再」石狩日誌」に、「サルブツ—本名オサラベと云よし。訳して物の終りと云事のよし。」と記された。

以下、紙幅の関係で資料名を割愛して、調査年と氏名、オサラッペ川の表記を列挙する。明治五年、高畑利宜「ヲシャラベツ」。明治六年、ワッソン「ヲサルベ川」「Osarape R」（地図は明治八年）。明治七年、ライマン「ヲサラッペ」「ヲサラベツ」。明治九年、松本十郎「ヲサラベツ」。明治十五年、福士成豊「雄猿辺」。明治十七年、高橋不二雄（紀行文には記載なく、明治二十年の『改正北海道全図』では）「ヲサルヘツ川」と続く。

― オサラッペ川の表記履歴 ―

写真① 野帳

写真② 『川々取調帳』

他方、明治二十年、上川原野の殖民地撰定を担当した福原鉄之輔の復命書では、「ヲサラッ別川」「ヲサラッペツ地方」「ヲサラッペツ原野」「ヲサラッペ川」「ヲサラッペポロニタイ」等の種々の表記が見られる。明治二十四年に近文原野の区画測設がなされ、同年、永田方正『北海道蝦夷語地名解』の発刊、明治二十五年には鷹栖村が設置される。明治二十六年には北海道庁が発行した『石狩国上川郡鷹栖村区画図』に「オサラッペ川」が記載され、以後、公式名称となったと推定される。

永田方正は、川名を「オサラッペ」としながらも、支流名では、「オサラペッ川筋」とし、支流に「イフンパウシュ オサラペッ（i-hunpa-ush-osara-pet 太茸ブ切ル処）」と記述している。また、永田方正が「此処茅なし」とわざわざ明記した事、今号の川名表記履歴、川口付近の状況等々を勘案すると、オサラッペ川の地名解は、松浦武四郎がシイピラサから聞いた「オサラペッ（o-sara-pet 川口・開いている・川）」が、最も妥当と思われる。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

09/06/02 (18) オサラッペ川余談

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑱

高橋 基

―オサラッペ川余談―

今年も五月十日の「母の日」には、室蘭本線の無人駅「母恋駅」の切符が、発送依頼を含めて沢山売れたという。「母恋」はアイヌ語地名起源で、諸説あるが、永田地名解は、「ポコイ（pok-o-i 陰・の処）」、知里地名解は、「ポコイ（pok-o-i ホッキ貝・群生する・所）」。アイヌ語地名に好い漢字が当てられ、現在も使用されている室蘭市の町名と駅名である。母の日が近付くと、毎年話題になる。

さて、オサラッペ川は、元来はオサルペッで、伊達市を流れる長流川も同音で、諸説あるが、こちらは、オサルペッ（o-sar-pet 川口・葭原・川）が有力な説。支笏湖の西山から流れ噴火湾に流入する長い川で、「オサルペッ」が漢字表記の「長流川」となり、この川名から、伊達市の字名、学校名、駅名に、「長流」が使用されてきた。しかし、「長流」の音が、「お猿」に通じるので嫌われ、昭和三十四年にこれらは全部「長和」と改称された。

このように、アイヌ語地名も、漢字表記化の段階で、漢字の持つ「音」と「意味」に地名の印象が左右された。明治二十四年に永田地名解で、「o-saratpe オサラッペ―女神玉門ヲ出シタル処。」と書かれたオサラッペ川ではあったが、地名解だったために、あまり多くの人に知られず、排除もされず、知里地名解で「奇怪な伝説」と批判されるぐらいで、川名もカナ書きのまま残ったのではなかろうか。

現在の旭川市西神楽は、かつては神楽村西御料地で、明治三十二年に十勝線（現・JR富良野線）辺別駅が設置され、駅周辺は辺別市街と呼称されていた。当シリーズの第六回の辺別川によった名称である。昭和三年には西神楽と字名改称されたが、「辺別」は語呂が悪いと、漸く昭和十七年に西神楽駅と改称された。

西神楽より明瞭な意図で改称したのが、室蘭本線の豊浦町と豊浦駅。元はベンベ川に由来し、明治初年には弁辺村、明治三十五年には二級町村弁辺村となり、昭和三年長輪線（後に室蘭本線）開通で弁辺駅が開駅。昭和十年、語呂が悪いので、村名を豊浦と改称、同時に駅名も改称した。辺別も弁辺も、漢字名の「音」が、北海道方言で女陰をさす言葉と音が似ているので、改称したと言われている。

近年、嬉しいことに旭川に関わるアイヌ語辞典が、三冊公刊された（出版年順）。①編者・魚井一由『旭川採集アイヌ語動詞集』②井筒勝信編『アイヌ語旭川方言辞典草案』③監修・川村兼一、執筆・校閲・太田満『旭川アイヌ語辞典』。それぞれオサラッペ川に触れているが、紙幅の関係で、ここでは①の関係分のみ略記する。

・osar＜o（陰部が）sar（出ている）オサル。陰部が露出している。第Ⅱ類動詞。（例文略）

・sar. サル。①出ている。第Ⅱ類動詞。o-sar-pet. 河口が出ている川。冬でも河口が凍らない川。オサラッペ川。門野トサ談。②（省略）

ここでは、永田地名解の「o-saratpe オサラッペ―女神玉門ヲ出シタル処。」という伝説の根拠も明確になっている。

オサラッペ川は、地名起源の多様さを物語るアイヌ語地名の典型である。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

―― アイヌ語地名表示板 ――

オ サラ ペッ オサラッペ川
O-sara-pet
川尻 開いている 川

石狩川との合流点の河口が開いている（冬でも凍らないという意味？）とも理解できますが、一方で オ・サラ・ペッ O-sar-pet（川尻・ヨシ原・川）という説もあります。

旭川市教育委員会

チノミシリルイカ橋に設置されたアイヌ語地名表示板

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑲

高橋 基

―ウッペツ川とウッナイ(上)―

現行の河川調書によると、ウッペツ川の流路総延長は、十一・七キロメートルで、元来は突哨山に発して、現在は道央自動車道沿いに流れ、東鷹栖四線十三号から、春光台下の末広八条、春光七条、緑町二十丁目等を通り、近文駅とオサラッペ川の間で、オホーツナイ川を入れて、近文大橋の下で石狩川に流入している。

この川は、上川原野の殖民地調査までは、地図上に記載されることが殆どなかった。明治二十年に上川原野の殖民地調査をした福原鉄之輔の復命書では、上川原野の三大樹林、すなわち、ポロニタイ(poro-nitay大きい・林)として、牛朱別川と忠別川の間の「ウシ、ベツポロニタイ」(「丸木船材ハ常ニ之ヲ此地ニ得ルト」と記録)、ウッペツ川沿いに突哨山の麓までが、「ウツペチポロニタイ」、これに接し、オサラッペ川上流で鬼斗牛山の麓に横たわる「ヲサラツペポロニタイ」である。これらは、上川の十三原野の殖民地に組み込まれ、「ウツペチポロニタイ」は、「ウツペチ原野」と名称を変えた。

福原の復命書では、「ウツペチポロニタイはウツペチ川(註・ウッペツ川)に跨り、東北・突所山麓に達する平林にして、其面積四百万坪、桷、楡、赤楊、及びその他の雑木にして概測に拠れば、壱百拾四万石許の材あり。此地は石狩川を去る纔に五丁乃至十丁にして、且つ本川(註・石狩川)と平行すれば、運輸至便と云ふも不可なかるべしと信ず」と、原始の姿を伝えている。これがウッペツ川の現存する最も古い記録である。

地図――明治三十一年製版「北海道仮製五万分一図」

明治二十三年に旭川を調査した永田方正は、「ウツナイ(ut-nai 脇川)―オサラペッノ脇ヨリ大川ニ入ル」と記録した。すなわち、ウッペツ川は、「ウツナイ」と言い、「脇川」と訳し、オサラッペ川の脇から石狩川に流入していると書いている。

掲載の地図は、アイヌ語地名研究では必携の明治三十一年製版の五万分の一図である。この地図では、「ウッペツ」は、直接石狩川に入らずに、オサラッペ川に注いでから石狩川に流入している。実は、「ウッペツ=ウッナイ」は、その川がどの川に合流するかが、川名の由来として問題となる川なのである。

昭和三十五年に知里真志保は、上記の地図の二つの川名について次のように解説している。

①ポン・ウツペツ〔pon-utpet小さい・やち川―ウツペツ(ut-pet肋・川)については次項参照。〕

②オホウツナイ〔oho-utnai深い・やち川―急言してオホツナイ(ohotnai)ともよぶ。ウツナイ(ut-nai肋・川)は、湿原を流れて来て直接本川に入らずに他の川の横腹に肋骨がくっつくかのように横から注いでいるもの。よく横川、脇川などと訳される。〕

右の知里のウツナイの説を、地図のウッペツに当てはめると、「湿原を流れて来て直接本川(註・石狩川)に入らずに他の川(註・オサラッペ川)の横腹に肋骨がくっつくかのように横から注いでいるもの」となって、典型的な「ウッペツ=ウッナイ」といえるのである。しかし、これが真実かは次回に検証する。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

09/08/04 (20) ウッペツ川とウッナイ（下）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑳

高橋 基

―ウッペツ川とウッナイ(下)―

実証的アイヌ語地名研究法を確立した山田秀三は、『北海道の地名』の中で、旭川のウッペツ川について、「ウッ・ペッ（肋骨・川）の意」と書いた上で、「ウッナイやウッペッの類は諸地にあるが、意味がはっきりしない。沼や大川と肋骨のような形で繋がっている川というが、具体的にはどうも見当がつかない。ここの名もアイヌ古老に聞いたこともあったが、わかりにくい名である。この川曲がりの辺に昔沼でもあったのであろうか。」と、帯広市のウツペツ川と共に難解なアイヌ語地名としてあげている。

山田秀三が右のアイヌ古老に聞いたというメモが残されている。川村カ子トエカシからの聞き書きであった。

(1)、ウッペッに付き―このウツは肋骨のウッではない。「鉄分を含んで濁っている」のをウッという。

(2)、オホウツナイ―このウッはぐるぐる廻っている川の意味である。

前号の知里真志保のウッペッの地名解も、「やち川」であった。右の川村カ子トエカシのウッの意識も、「ウッ（ut）」の意味よりも、現実の川に対する実感が述べられたものと言えよう。この点は次回のオホーツナイ川でも検討したい。

さて、永田方正は、『北海道蝦夷語地名解』で、ウツナイ系の川は、十三例を採録し、基本的には「脇川」と地名解をしている。右の知里地名解のように、吓坭川、谷地川が、それぞれ一例ずつある。また、ウッペッはわずか一例で、現在の比布ウツペツ川と思われるが、石狩川左岸と誤記されている。

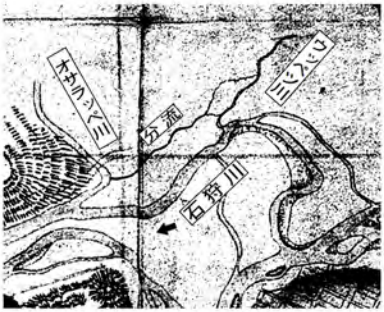
前回も紹介したように、永田方正は、旭川のウッペツ川は、「ウツナイ（ut-nai 脇川）―オサラペツノ脇ヨリ大川ニ入ル」と記録した。しかし、前号で提示したように、明治三十一年製版の「仮製五万分一図」では、ウッペッは、オサラッペに直接流入していた。写真①の明治二十三年「上川市街之図」は、石狩川にも注いでいるが、分流がオサラッペ川に流入している（残念ながら、右の二図の原図は所在不明）。明治二十六年「石狩国上川郡鷹栖村区画図」とその原図では、オサラッペ川への分流が切れた状況で描写されている。ただし、明治三十四年製版「上川地方迅速測図」では、オサラッペ川に流入しているのは、ウッペツ川の分流とは別の細流が描かれている。

他方、写真②の明治五年の高畑利宜の「石狩川検分図」では、ウツペツは直接石狩川に流入している。ウッペツ川の初出図で、この後明治二十年までウッペツ川は知られないままであった。また、第十七回に紹介した松浦武四郎のクーチンコロからの聞き書きでは、オサラッペ川の支流名にウッペツ川は記載されていない。

これらの状況から、ヤチ川のウッペツ川が、オサラッペ川に流入していたと断定するには、原図の発見等、まだ探索が必要である。いずれにしても、全道の「ウッ（ut）地名と共に、今後も研究を要する川である。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します



写真①

写真②

09/09/01 (21) オホーツナイ川

断章

旭川のアイヌ語地名研究

㉑

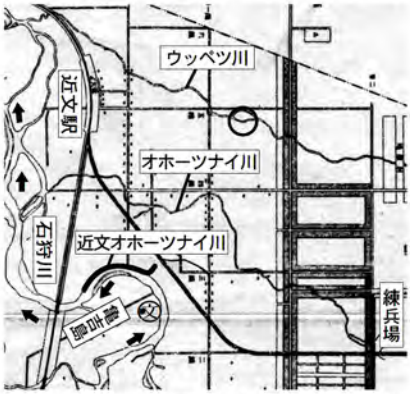
高橋 基

― オホーツナイ川 ―

この川名が地図上に最初に描かれたのは、管見では前々回に図示した明治三十一年製版の「北海道仮製五万分一図」で、「オオホウッーナイ」と書かれている。今回掲載の地図は、「大正五年旭川市街図」で、これに現在の川名等を記入したもの。近文オホーツナイ川は、ご覧のように、本来は、石狩川の旧流跡部分で、昔はなかった川名。⊗印は現在の旭川西高で、往時の亀吉島の北東端にあたる。

この地図では、オホーツナイ川は、当時の第七師団の練兵場を水源として、図のような流れであったが、現在は上流部を近文オホーツナイ川の普通河川として切り替えている。

ところが、明治二十四年に測設された、「石狩国上川郡鷹栖村区画図」を見ると、後の第七師団の二号から六号までの用地内に、八つの大きな沼状の水溜りが描かれ、湿地帯の様相を呈している。しかも、これらの水を集めて、オホーツナイ川が、石狩川ではなく、掲載図のウッペツ川の○印の所に流入しているのである。



この状況であれば、前々回紹介した知里地名解の**ウツナイ**の解説にぴたりと合致する。すなわち、「オホウツナイ〔oho-utnai 深い・やち川―急言してオホツナイ(ohotnai)ともよぶ。**ウツナイ**(ut-nai 肋(あばら)・川)は、湿原を流れて来て直接本川(註・石狩川)に入らずに他の川(註・ウッペツ川)の横腹に肋骨(あばら)がくっつくかのように横から注いでいるもの。よく横川、脇川などと訳される。」

知里地名解に協力したのは、門野ナンケアイヌエカシ、石山アツムヤシクエカシ、そして、荒井源次郎エカシである。ウツナイの訳に、「やち川」が当てられたのは、三人のエカシの共通の認識が込められたものと思われる。

前回紹介した、山田秀三の川村カ子(ネ)トエカシからの聞き書きを再度記載したい。

①ウッペッに付き―このウツは肋骨のウッでではない。鉄分を含んで濁っているのをウッという。

②オホウツナイ―このウツはぐるぐる廻っている川の意味である。

前回も書いたが、これは、「ウッ(ut)」の語意よりも、現実の川への実感がこの表現になったものと推察できる。

明治二十一年に札幌で生まれ、明治二十六年に、「近文原野オオフツナイ(現・大町二条八丁目付近)」に移住した旭川の郷土史家のリーダーだった斎藤譲三氏は、「オオフツナイ(崖を曲流する川)は、むかし石狩川の支流といわれている。水源もとまり、いまは水も流れていないが、その跡は大町近文神社横に川水に洗れたわずかな崖岸は、東西にわたって見られ、今は廃川となり跡地の湿地をなしていた」と記述している。

また、「ウッペツ(瀬の川)左右の山ろくにかけ湿地が多く、大木の密林であって、南に近く水質は鉄分を含んで赤く、マンガン鉱石が見られる」(郷土のむかし)と、川村カ子(ネ)トエカシの見解の裏付けをなしている。

なお、『旭川アイヌ語辞典』に、「ウッ(ut)―名詞―川の淀み―(比布、尾沢カンシャトク)と採録されており、「比布ウッペツ川」もあるので、今後のウッペッ―ウッナイ研究の検討資料とさせていただく。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

09/10/06 (22) 亀吉川＝ポロメム（上）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
㉒

高橋 基

―亀吉川＝ポロメム（上）―

今号の掲載図は、大正五年測図、大正八年発行の五万分一の地形図「旭川」である。牛朱別川の切り替え前の地図で、現・ロータリーから現・五条一丁目～四条西六丁目にかけて牛朱別川が流れていた頃の地形図である。

ご覧のように、ここに「亀吉島」と「亀吉川」が記載されている（亀は旧字体の「龜」使用）。亀吉島の由来は、旭川初の和人定住者の鈴木亀蔵の旧居が、X印の所にあったことによる。現在は亀吉公園に旧居碑がある。鈴木亀蔵は明治十年頃からアイヌの人たちとの交易のためにここに居住したと言われる。アイヌの人たちが、亀蔵と発音しにくいため、通称・亀吉と呼んだところから、亀吉島と呼称されたというのが、定説となっている。その亀吉島を作っている**石狩川の旧流**が、**亀吉川**であった。その亀吉川は埋め立てられて、幻の川となったのであった。

さて、松浦武四郎が安政四年（一八五七年）に旭川を調査した時は、亀吉川を「**ポロメン**」（表記はポロメン）と記録した。すなわち、ポロメン＝ポロ・メム（poro-mem 大きい・泉池）と、一般的には訳されている。メム（mem）は、一般的には、「清水が湧いて出来ている池、または沼」の意味であるが、旭川の場合は、その他に、亀吉川がそうであるように、「**古川＝旧流**」も意味していた。

また、ポロメンの対語として、ポンメン＝ポン・メム（pon-mem 小さい・泉池）があり、松浦武四郎は、石狩川左岸のポロメンから、少し上流に上った同じく左岸にポンメン（表記はポンメン）があり、ここに八軒のアイヌの人たちの住居があり、その全住人の名前と年齢を記録している。

たまたま、明治三十一年製版の北海道仮製五万分一図に、掲載図の右上に記載したポロメム・ポンメムが書かれたため、松浦の採録したポロメン・ポンメンと混同し、同一と誤解されるようになった。決定的な違いは、石狩川の右岸にあるか、左岸にあるかである。

松浦武四郎の「再窩石狩日誌」で右の点を確認しておこう。武四郎は、丸木舟に乗り石狩川を上り、忠別川との合流点（Ⓐ地点）から忠別川左岸の★印の**大番屋**を目指した。合流点から五・六丁にて、「メムブト（Ⓑ地点）―左の方川巾凡十間計、遅流にてふかし。此上はシヘツ（シ・ペッsi-pet 本当の・川→本流、すなわち、石狩川のこと）に通るよし也。」と、左にポロメン（亀吉川）があり、流れは遅く、深い川で、上流はⒸ地点の石狩川に通じていると書いている。

他方、Ⓐ地点から、石狩川の上流調査では、Ⓒ地点で、「ポロメン―右なるプト（putー川口）はチクベツの方相応なる川に成るなり。この下番屋（★印）の下え出るよし也。」と、**ポロメン（亀吉川）**は、石狩川本流のⒸ地点から、忠別川の番屋の下流のⒷ地点に流れている相応の川であると書いている。Ⓑ地点とⒸ地点との記述が一致しており、これが**ポロメン（亀吉川）**であった。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

09/11/03 (23) 亀吉川＝ポロメム（下）

断章

旭川のアイヌ語地名研究

㉓

高橋 基

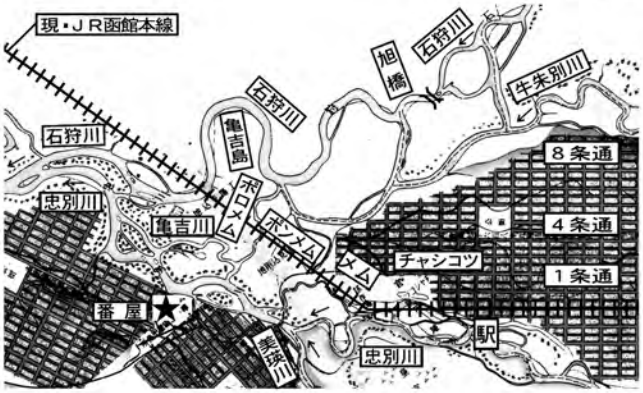
―亀吉川＝ポロメム（下）―

今号の掲載図は、原図が明治二十二、三年頃と言われる『上川市街地区画図』（『旭川市史第一巻』掲載図）である。現在の市内中心部に流れていた川が描かれた唯一の地図である。これに、現在地が分かる手助けとして、ＪＲ函館本線と川名等を記入し、不用文字などを削除してある。

右の原図が作られた頃、明治二十三年に旭川を調査した永田方正は、『北海道蝦夷語地名解』の中で、前回確認した松浦武四郎の記録した**ポロメム＝亀吉川**と、ポンメムを石狩川の**左岸**とした上で、次のように書いた。

＊ポロメム（poro-mem 大池―「メムハ石狩川ノ旧流滙シテ池トナリタルモノナリ）

＊ポンメム（pon-mem 小池―同上）



「滙」は、「水がめぐり集まる意味」である。永田方正は、メム（mem）を通例通り、「池」と訳したが、ポロメムとポンメムを「石狩川ノ旧流」と明記したのは、さすがの感がある。

また、永田方正は、石狩川と忠別川の合流点から牛朱別川までの石狩川**左岸**の川名を次の順で記載している。①チュプペッ（忠別川）、②ピイエ（美瑛川）、③メム、④チポッメム、⑤ポロメム（亀吉川）、⑥ポンメム、⑦ウシシュペッ（牛朱別川）」

永田は、③メムについては、「メム（mem 池―『チャシコッ』ノ上ニアリ）」と書いた。**チャシコッ**は、掲載図の現在地・宮下通四丁目～六丁目にあったもの。明治三十一年の鉄道敷設で崩されてしまった。掲載図の現・二条西二丁目から四条西六丁目あたりにあった**古川**が**ポンメム**、そこに流れていたのが**メム**と言われた川と推察される。明治三十一年開業の旭川駅の遠景写真にもこの川の川崖の様子が見られる。

さて、前号で紹介したように、安政四年（一八五七年）の松浦武四郎の「再石狩日誌」で、**ホロメン（ポロメム）**は、掲載図の**亀吉川**であることを確認した。武四郎はホロメンに続き次のように記録している。

「また少し上り、**ホンメン（＝ポンメム）―右**の方小川、浅し。底小石川なり。その間に人家多し。（略）アイヌ小屋八軒有。（以下三家記載）。扨此処より少し平地を山の中に分行に、小川あり。此川を**メム**と云よし。鮭魚至りて多きよし。依てむかしより此処に多く家居するもの有とかや（以下四家記載。以下省略）。」

武四郎の記述は、ポロメンに続き、掲載図上でも合致する。ただし、ホンメン以下は、次回に紹介する松浦武四郎の絵図類で、メムが石狩川左岸にあること、また、山田秀三氏が荒井源次郎氏を訪ねた時の記録で、「旭川の**メム（旭川駅付近）**の人たちが、雨竜や天塩の方に熊を、北見の方に鹿をとりに出掛けていった。」（『地名調査同行記』―萩中美枝）という一文からの仮説・試案である。次号では松浦武四郎の絵図を中心に、右の**メム**が石狩川**左岸**にあったことを確認したい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

09/12/01 (24) ポンメムのメム（上）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
㉔
高橋 基

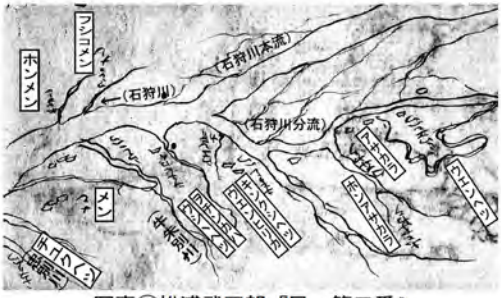
―ポンメムのメム（上）―

松浦武四郎は、安政五年（一八五八年）に、美瑛経由で十勝越えするために、旭川を訪れた。そこで、前回も紹介したポンメムのメムについて、重要な記録を残している。

すなわち、上川のアイヌの人たちは、一軒の家に七、八匹の犬を飼っていて、秋に鮭が上ってくると、小川の浅瀬に上ってくる鮭を、犬がくわえて捕まえ、一軒の家で五、七匹の犬を飼っていると、干鮭を百束（註・二千尾―一束は二十尾）も取り、一人暮らしの老婆でさえ三十束、四十束（六百尾～八百尾）位ずつ取るという。

武四郎は続けて、「其の魚の多きこと筆紙の及ぶ処に有らず」と書き、それ故、天塩、十勝、湧別、渚滑辺の人たちが、飢饉の時は、山越えしてこの上川に来て糊口し、立ち直って帰郷する者が多かったと記している。そのため、比布川口周辺には、天塩出身者の子孫、忠別川川口には、湧別・渚滑出身の子孫、美瑛川・辺別川周辺には十勝出身の子孫が多いと記録している。

さて、松浦武四郎は、「再篙石狩日誌」のダイジェスト版の『石狩日誌』では、右の飼い犬による鮭を捕獲した場所を、前回も紹介したホンメン（ポンメム）のメムとし、犬が浅瀬に飛び込み、鱒を捕獲する様子を述べた上で、「依りて此辺の老婆は犬を大切にし、我が喰する毎に喰を分かち与へ飼置たり。秋味の比は一日に四、五束（註・八十尾～百尾）ヅゝも取獲とかや」と記述している。



写真①松浦武四郎『巳　第二番』

写真②「石狩川川筋図」

この『石狩日誌』のメムの位置に最初に言及したのは、大正三年刊の『鷹栖村史』で、「めむ（今ノ蛇ノ湯温泉付近）」としている。蛇の湯温泉は、当時の近文一線一号区画外で、現在の旭町二条一丁目にあった。続いて大正五年の『神楽村神居村村史』以下に、「メム＝蛇の湯温泉附近説」は孫引きされていく。近年では、『開基一〇〇年記念誌・目で見る旭川の歩み』の「上川アイヌコタン分布図」が、第二十二回に掲載した石狩川右岸のポンメムを松浦武四郎が採録したホンメンのメムとしている。

写真①は、松浦武四郎が、安政四年（一八五七年）の旭川調査に持参した野帳の『巳　第二番』の石狩川の略図で、理解し易いように、石狩川を上にしたもの。凸印が人家を表わしている。ご覧のように、右岸には人家の印がないのである。右岸にホンメンがあるが、人家の印がなく、左岸にメン（メム）が書かれて、人家の印がある。ここが犬が鮭をよく捕ったメムである。前回のポロメムで述べたように、ポロメム、ポンメムは、石狩川の左岸にあったのである。

写真②も、松浦武四郎の自筆による石狩川の川筋図である。H印は、人家の印。石狩川の忠別川合流点から、比布川の合流点までの概略図で、右岸に人家があるのは、比布川口のみである。松浦武四郎が調査した時は、比布川口以外は、意外なことに、人家（コタン）は石狩川左岸にのみ集中していたのである。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

10/01/05 (25) ポンメムのメム（中）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
㉕

高橋 基

―ポンメムのメム（中）―

前回は、松浦武四郎が安政四年（一八五七年）に旭川を調査した時の野帳『日第二番』の絵図で、ポンメムのメムが、石狩川の左岸にあったことを確認した。今回は、松浦武四郎が安政五年に、幕府に呈上した報文日誌『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』（略称・戊午日誌）六十一巻の内の第四巻「東部登加智留宇知之誌」の武四郎自筆の稿本で、ポンメムのメムの位置を検証したい。

地図①は、右の稿本の上部に記された武四郎自筆の「チクヘツフト支流の図」である。ここでは、理解しやすいように、原図をひっくり返して、石狩川を上にした。掲載図では分かりにくいが、点線は、「朱筆」で、川幅の中にある点線は、丸木舟で下ったことを意味し、陸路の点線は、松浦武四郎が歩行したルートである。

紙幅の関係で詳述できないが、**掲載地図①②**と合わせてご覧いただきたい。松浦武四郎は、三月四日（陽暦四月十七日）に、「当所コタン廻りをせん」と、大番屋を出発、先ずチクベツフトで三軒を訪ね、その後、丸木舟を借りて、「チクベツフトの向に着し、是より上陸、枯柳の中雪のぬかる処を樋にて行くこと凡十丁計にして小川二ツ計こへて、メムス着す」と記述、**地図①**の「メム」で七軒について家族構成など詳細に述べている。

「凡半里計にして、ウシ、ベツ、此両岸谷地多し。舟有るが故に是にてこへる」。以下、アサカラ、ウエンベツと歩き、ヲテコマ家で止宿。五日はウエンベツフトのイソチユウ家を訪ねる。ここから松浦武四郎とセツカウシ、アイコヤンの三人は丸木舟で下り、「八ツ（午後二時）前にメムに着しぬ。よって此処にてまた昼食して、是より茅原を真一文字に午未（南々西）の方さして行や凡二十丁計にして、チユクベツ（註・忠別川）の端に出り」。

ここで、**地図①**の忠別川の枝川を腰までつかり渡り、ベベツ（美瑛川）のメム（神楽六条六丁目付近）のクウチンコロ家に着く。ここから丸木舟に乗り、「凡里数一里余と思ふ処彈指の間に、チユクベツ番屋に着しぬ」とコタン廻りを結んでいる。**地図①**からも、「メム」は、石狩川の左岸にあることは明確である。

地図①

地図②

地図②は、安政六年に松浦武四郎が作成した、最も有名な『東西蝦夷山川地理取調図』の旭川周辺図である。川は青、**地図①**の武四郎の歩行部分は、「朱の実線」で描かれている。また、人家（コタン）は、朱の**H**で記されている。この地図は、前回の野帳の絵図、『川々取調帳』や今回の日誌や添え図の集大成の地図で、全道二十八枚の内の「緯四十三度、経七度、石狩山中、併到トカチ山中、サオロ水源」の旭川周辺部分図である。この地図でも、ポンメムのメムは、石狩川の左岸にあることが明白である。

次回は、戊午日誌の野帳等を含めて、ポンメムのメムのまとめとしたい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

10/02/02 (26) ポンメムのメム（下）

断章

旭川のアイヌ語地名研究 ㉖

高橋 基

―ポンメムのメム（下）―

前回は、松浦武四郎の安政五年（一八五八年）の十勝越えの行程の中で、旭川での「当所コタン廻り」の武四郎自筆の図で、ポンメムのメムは石狩川の左岸にあったことを確認した。

写真①は、武四郎がその時に持参した野帳（フィールドノート）の『午第一番』で、「コタン廻り」の最初と最後の部分である。先ず忠別川口の三家を訪ね、ここから、「メムへ舟に（て）脱落）行」（上段）、以下、アサカラまで行き、引き返して忠別川を渡り、ベベツ（美瑛川）のクーチンコロの家から、「右之通歩帰る」（下段）と記録している。『戊午日誌』と異なり、実際の巡回日は、三月三日（陽暦四月十六日）で、一泊せずにアサカラから引き返していることが分かる。

写真①

さて、松浦武四郎は、箱館奉行所の蝦夷地御用雇として在職中の蝦夷地経営に関する建言・報告書を、安政六年（一八五九年）に『燼心餘赤』として編集した。その中で、武四郎が最も重視したのが、幹線道路の開削であった。石狩川を遡り上川に達し、そこから名寄を経由してオホーツク海岸へ出るルート、また、上川から空知川上流を経由して十勝に出、太平洋に達するルートが、松浦武四郎の構想であった。安政五年の十勝越えは、そのための調査であった。

武四郎の道路開削構想の最も代表的なものが、「札幌越大新道申上書」である。長万部、虻田から羊蹄山麓を通り、現在の中山峠を越えて札幌に出、さらに石狩川を遡り、旭川に達し、ここから名寄を経由して北海岸のホロナイ（現在の雄武町幌内）に達する道路を幹線とし、さらにこの幹線から、十勝・釧路・斜里・根室・留萌・増毛・門別・勇払などへ通ずる道路を開削することを提案している。

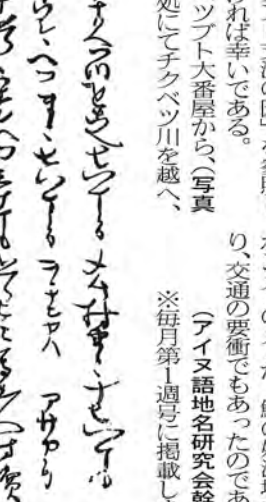
「札幌越大新道申上書」の中で、右の安政五年の「コタン廻り」が活用されている。前回の大番屋からの「チクヘツフト支流の図」を参照していただければ幸いである。

チユクベツブト大番屋から、（写真②）「扨此処にてチクベツ川を越へ、七八丁にてメム村、また十七八丁も上り候てウシ、ヘツ、また七八丁にてヲチンカハ、アサカラ、二十余丁上りウエンヘツ、三十丁も上りヒ、等」のコタンが続き、「惣て此辺平地に御座候。漁猟畑作十分見込有レ之申候」と記述している。また、前回二つの絵図で見た武四郎が実際に歩いたルートについては、アイヌの人たちの「往来道有レ之候間、是より三里斗り川上ヒ、迄の処は別段新道は切開候には不二及申一候。」と、石狩川左岸のメムから現在の永山・当麻・比布までの三里の間は、アイヌの人たちの通路があり、新道を開削の必要はないとまで進言している。

現在の旭川中心部の西部にあったポンメムのメムが、鮭の好漁場であり、交通の要衝でもあったのである。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します



写真②

10/03/02 (27) 旭川の古川メム

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ㉗

高橋 基

写真①

―旭川の古川のメム―

写真①の「古川―メム」は、世界最初のアイヌ語辞書といわれる『蝦夷方言藻汐草』に記載されたもの。この書は、当時最高の蝦夷通詞（通訳）であった上原熊次郎が寛政四年に著し、文化元年（一八〇四年）に木版刊行された。この中で、「古川」のアイヌ語が「メム」と記録されているのである。

一般的には、メム（meｍ）は、「湧き水。泉。清水が湧いて出来ている池、または沼」を意味し、古川は「フシコペッ（husko-pet 古い・川）」あるいは、川名の○○を付けて「フシコ○○（husko-○○ 古い・○○川）」と呼称する。

実は、松浦武四郎も、嘉永三年（一八五〇年）に編纂したアイヌ語辞書『蝦夷語』に、上原同様に、「古川―メム」を採録している。もっとも、武四郎が収録した一四五一語の約八割は、『藻汐草』の写しということで、この「古川―メム」も写しの部類と推測される。

本連載の第二十二回で、安政四年（一八五七年）に松浦武四郎が記録した「ポロメム」（松浦の表記はホロメン）は、石狩川の**古川**で、**亀吉川**であることを検証した。正に「**古川―メム**」である。

これも既述のように、明治二十三年に旭川を調査した永田方正は、右のポロメムを、「ポロメム（poro-meｍ 大池―メム）ハ石狩川ノ**旧流**瀦シテ池トナリタルモノ」と、メムは、石狩川の**旧流・古川**と明記している。

更に、昭和三十一年に知里真志保は、『地名アイヌ語小辞典』の「メム（meｍ）」の項で、一般的な「①泉池・泉沼・清水が湧いて出来ている池または沼で魚が多く入る所・湧きつぼ。」と書いた上で、採集地または使用地を旭川市近文として、「②【チカブミ】古い小川、**古川**の小川。」と記述している。

これらから勘案して、上原熊次郎が採録した「**古川―メム**」が、わずかに旭川に残されていたのではないかと推測する次第である。同好の方々と今後の研究課題としたい。

さて、この石狩川の古川である亀吉川につながる最も古い記録は、近藤重蔵が文化四年（一八〇七年）三月十三日（陽暦十一月十二日）に旭川の番屋に宿泊した時の記録である『石狩川川筋図』である。**写真②**は、その最後の部分で、ウシシベツ（牛朱別川）とチュクベツ（忠別川）のほぼ中間の石狩川左岸にこの「**古川**」が描かれている。略図は、川筋図の干支から筆者が作成したもの。

（近藤の川筋図については、第二回を参照いただきたい。なお、あさひかわ新聞のHP上でも閲覧可能です）

また、松浦武四郎と同じ安政四年三月十八日に、箱館奉行イシカリ詰の足軽・松田市太郎は、『安政四年イシカリ川水源見分書』で、メム川について、「チクベツより凡一里位、字メム川―但蝦夷家大小九軒有之、地性宜敷平地にし而、**古川**有、満水之節は二圓川二相成。」と書き、近藤同様に、忠別川と牛朱別川のほぼ中間にメム川があり、ここにも**古川**（ポンメム）があること、また、松浦武四郎の記録より一軒多い、九軒のコタンがあったと、貴重な記録を残している。**（アイヌ語地名研究会幹事）**

写真②

※毎月第1週号に掲載します

10/04/06 (28) 石狩川の右岸のメム（上）

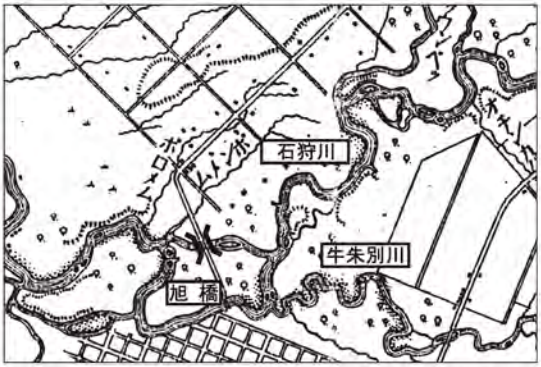
断章
旭川のアイヌ語地名研究
㉘

高橋 基

―石狩川右岸のメム（上）―

前回までは、松浦武四郎の記録を中心に、石狩川**左岸**のポロメムとポンメムについて記述したが、今回は第二十二回で紹介した**右岸**のポロメムとポンメムについて述べる。

掲載図は、明治三十一年製版の北海道仮製五万分一図である。この地図は、アイヌ語地名研究には必携の地図で、河川名は基本的にはアイヌ語名で書かれている。理解しやすいように、現在の旭橋の位置を図に示した。旭橋以北の太い道路は現在の国道40号線とほぼ同じと理解していただいてよい。ポロメムは現在の国道40号線に沿い流れていて、ポンメムは国道に平行する形で流れていた。大正五年測図の二万五千分一地形図で、ポンメムの源流をたどると、現在の護国神社、および、スタルヒン球場と石狩川の中間を通り、花咲スポーツ公園の球技場と陸上競技場の間を抜けて、花咲町四丁目で、石狩川に繋がっていた石狩川の分流だったように思われる。



アイヌ語地名では、同じような川や沼等が並んでいる場合に、大きい方にポロ（poro 親または大）、小さい方にポン（pon 子または小）を付けて呼ぶ事が多い。明治三十三年測量の第七師団司令部の上川地方迅速測図では、ポロメムの方が流路延長が長いので、ポロメムとなったのかも知れない。ただし、幹線道路沿いのためか、早くから水量が少なくなったようである。ポンメムの方は、伏流水のメム（meu 湧き水）が多く、氷川の名称で旭川市管理の普通河川であったが、現在は普通河川から除かれている。ポロメムは川端川の名称で、新橋下流の川端樋門、ポンメムの氷川は、旭橋下流の本町樋管で石狩川に流されている。

さて、掲載図は、陸地測量部（現在の国土地理院の前身）発行の公的な地図である。そこに記載されたポロメム・ポンメムであるが、明治二十三年に調査した永田方正は、本連載の二十三回に既述のように、左岸のポロメム・ポンメムの地名解はしたが、右岸のこのポロメム・ポンメムには触れていない。また、知里真志保も、この地図を活用しているのは明らかでありながら、永田方正同様に、右岸のこのポロメム・ポンメムの地名解をしていない。

永田方正も知里真志保もそれぞれの時代の最高のインフォーマントからの情報で地名解をしていながら、右岸のこのポロメム・ポンメムについて記録していないのは、この地図のポロメム・ポンメムが誤っている可能性がある。現に、文化四年（一八〇七年）、近藤重蔵が乗った丸木舟が転覆破船し、百間（約百八十㍍）ほど流され、御朱印まで濡らしたエピソードで有名な、神居古潭のレーコロプイラの位置が誤って記されている事例がある（「カムイコタン」の項で後日詳述）。

あるいは、常識的には、この時代の情報提供者が、この二つの川を ポロメム・ポンメムと認識していた可能性もある。その意味からも、次回は掲載図より古い時代の地図で、石狩川右岸のメムの考察をしたい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

10/05/04 (29) 石狩川の右岸のメム（中）

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ㉙
高橋 基

―石狩川右岸のメム（中）―

石狩川右岸にポロメムとポンメムが記載されている最古の地図は、本連載の第三回に紹介した文化十四年（一八一七年）に、間宮林蔵が作成したと言われる地図である。

第三回の掲載地図は、北海道大学附属図書館所蔵図で、今号掲載の地図は、国立公文書館所蔵図である（以下、間宮図と略称）。石狩川の左岸のチユクベツ（忠別川）と、同じく左岸のウシシベツ（牛朱別川）の間の石狩川右岸に、ご覧のようにムリチヤロ、ホロメム、ポンメムが記されている。いずれも、石狩川に注ぐ川筋が描かれているので、川名である。

同じような湧き水のある川が並んでいたので、大きい方をポロメム、小さい川をポンメムと呼称したのであろう。しかし、これが前回紹介した、明治三十一年製版の北海道仮製五万分一図のポロメム、ポンメムと同一とはにわかに断定はできない。なお、北大所蔵図は、「ホロメス」「ホシメム」の表記なので、写図としては、本掲載図の方が信頼度が高い。

また、ムリチヤロは、川名であるが、コタンを示す●印があるので、そこにコタン（集落）があったのであろう。ムリについては、湧別川の支流で、丸瀬布で合流する武利川のアイヌ語名が、掲載図でもムリである。武利川は諸説あるがイラクサ説が有力で、ムリチヤロはイラクサ川の川口とも解釈できるが、その後の資料には見ることがなく不詳。（武利川については、伊藤せいち『アイヌ語地名Ⅱ・紋別』を参照されたい）

さて、アイヌ語地名と共に掲載図の重要な点は、ムリチヤロの対岸に、番屋を示す■印があることである。番屋とは、松前藩主または知行主が、アイヌの人たちとの獣皮・干鮭等の交易のために設置した建物。本連載第二回で述べたが、文化四年（一八〇七年）に、天塩川筋から比布のタナシ（現・棚瀬山）に山越えし、そこから石狩川を丸木舟で下った近藤重蔵は、比布川川口の番屋で一泊し、旭川の忠別川合流点下流左岸のチユクベツブトの番屋でも一泊している。間宮図では、近藤重蔵が宿泊した比布川川口の番屋は同一と思われるが、ムリチヤロ対岸の番屋は、近藤重蔵が宿泊したチユクベツブトの番屋とは、明らかに異なっている。

間宮林蔵の上川調査は、秋葉實氏の研究によると、文化十年（一八一三年）という。近藤重蔵が旭川に宿泊した六年後である。その間に、チユクベツブトの番屋が何らかの理由で消滅し、ムリチヤロ対岸の石狩川左岸に番屋が設置されたものと思われる。北大所蔵図も同一地点に番屋の印が記載されている。

近藤重蔵の五十年後の安政四年（一八五七年）に、上川を調査した松浦武四郎は、間宮林蔵の上川滞在中の案内人まで野帳（フィールドノート）の『日第二番』に記録している。しかしながら、近藤重蔵や間宮林蔵が記録した番屋については一切言及していないのは、全くの謎である。

次回は、松浦武四郎の地図と明治時代の地図等で、右岸のメムの検証をしたい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

10/06/01 (30) 石狩川の右岸のメム（下）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
㉚
高橋 基

―石狩川右岸のメム（下）―

安政四年（一八五七年）に旭川を調査した松浦武四郎は、本連載の第二十二回から述べたように、ポロメム・ポンメムを左岸とし、『東西蝦夷山川地理取調図』では、右岸にフウレヘツとフウレメムを描き、幕府への報文日誌の「再篙石狩日誌」でも、右岸のフウレベツ、そして左岸のウシ・ベツ（牛朱別川）までを次のように記述した。

「（ホンメムから）また、廿丁計しばしにて、フウレベツ（註・流に向い左の方小川。其両岸崖にして其上相応に高し。此の岸に土蕪（実言ベンチラ―註・ショウドウツバメ）多く巣を懸たり。此処にも昔人住せし由なり。源はウリウの山より来るとかや。しばしまた上りて凡十七八丁、ウシ・ベツ―右の方に有。川巾凡廿間計有と。川すじ谷地多きが故に、春夏は雪解水にて川巾多く成れ共、秋冬は小川になると聞り。」（牛朱別川巾約20間　約36㍍）

松浦より十六年後の明治八年に、開拓使測量長ワッソンが石狩川を愛別川まで測量し、明治八年、開拓使地理課から『北海道石狩川図』が発行された。**掲載図**はその旭川周辺部分で、近代的測量技術を用いた調査による画期的な地図である。しかし右岸にポロメムがあるが、フウレベツとフウレメムはない。

さて、ワッソンに続き、翌明治七年七月に、開拓使雇地質学者ライマンは、丸木舟十一隻に一行五十六人が分乗して、石狩川の水源をめざして旭川を通過する。その際、右の松浦の地図のフウレヘツ（ここではプーレペツと、ウシ・ベツ（同ウシ・ツペ）について、次のように記述する。

『支流ノ幅ハ、松浦ノ地図ニ載セタルモノト、大ニ差違アルヲ往々ニ見出セシコトアリ。譬ハ、余蕊ノ左側ナルプーレペツ川ノ如キハ、唯二十尺位ノ幅ニテ、其流出ハ概算上一秒間六十五立方尺タリ。且、右側ノ「ウシ・ツペ」ハ、幅大約十五尺、其流出ハ一秒間殆ド四十立方尺タリ。』

と、松浦が小川と書いたフウレベツが、牛朱別川よりも、川幅・水量共に大きいとしている。フウレベツは妥当としても、牛朱別川は誤認の可能性がある。

明治九年、ライマン同様に石狩川源流から十勝に山越えした開拓大判官の松本十郎は、六月十九日に、案内と荷役のアイヌの人たち一行二十人で、丸木舟に乗らずに、石狩川右岸を陸行した。現在の旭川市近文町付近から、比布町の比布川までのコタンを「是迄経歴セル村々、チカフニ、フウレベツ、ホロケナシ、チクシベツ、チクシベツヌク、アサカラダク、ピ、ピ、ニ至リテ上川郡ノ村落ノ限リナリ」と記述。この中に、松浦が記述したフウレベツという川があり、そこにコタンがあったことがわかる。しかしポロメム・ポンメムのコタンはない。

明治二十三年に旭川を調査した永田方正は、右岸の松浦武四郎が書いたフウレベツとフウレメムの二つの地名解をしている。

○フーレペッ（hure-pet 赤川―石狩川ノ旧流ニシテ古ヘハ赤川ナリシガ今ハ清水ニシテ赤川ニアラズ）

○フーレメム（hure-mem 赤池―今ハ無シ）

語意はこの通りであるが、比定地は紙幅の関係で、別稿とさせていただく。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

10/07/06 (31) 改正北海道全図

断章
旭川のアイヌ語地名研究
㉛

高橋 基

今号の掲載図は、明治二十年五月、内務省地理局刊行の『改正北海道全図』。縮尺五十万分の一で銅版ケバ表現による精密図（二〇〇%拡大）。明治十九年一月に開庁した北海道庁の設置を祝うようにして刊行された当時最高精度の北海道図である。この地図は、北海道庁の特に地理・地質・殖民地撰定の職域で規範となった地図である。

この地図の作成者である高橋不二雄は、明治十七年に、札幌県地形測量主任の福士成豊と、石狩川を遡り、水源の石狩岳や、ニセイカウシュッペ山、旭岳にも登頂し、北海道中央内陸部の経緯度実測に成功した。この踏査行の詳細な記録を『札幌県巡回日誌』として残した。

―『改正北海道全図』―

この地図の大きな功績の一つは、現在の旭岳を石狩岳と呼称していたものを、石狩川水源の石狩岳として正したことにある。ただし、旭岳のアイヌ語名のヌタプカウシペを案内人が知らず、もっぱらヲフタテンケ山と呼んだので、現在のオプタテシケ山を西ヲフタテシケ山、旭岳を東ヲフタテシケ山としたのもこの地図の特色である。

さて、明治二十年に上川郡の殖民地撰定の調査をした福原鉄之輔は、調査復命書で、掲載図の忠別川の「チユツペツ川」を漢字表記で「秩別川」とし、原野名を「秩別原野」と表記した。その後、北海道庁の刊行物では、忠別川を「チユツペツ」「チュッペツ」等と表記するようになり、「チュッペツ（cup-pet 太陽・川）」を意訳して、「旭川」の地名誕生に結びつくのであるが、次号で詳述したい。

また、福原は、掲載図の「チカフニ」から、石狩川右岸の原野を「チカブニ原野」とし、これが後年「近文原野」となり、明治二十五年には「鷹栖村」が設置され、村名の起源ともなったのである。このように、この地図の影響力は大きかったのである。

なお、福原鉄之輔は石狩川の状況を、「水性清浄掬スベシ、魚族皆棲ミ且多シ、滔々流レ刳舟通ジテ『ペンケメム』（現・愛別町ペンケメナイ川）近傍ニ達スルヲ得。夏期涸水ノ際ハ、『ポロメム』（掲載図のホロメンム）『タナシ山』（現・比布町棚瀬山）ノ間、河線数条ニ分裂シ復タ上ル不可」と記述、石狩川右岸のこのポロメムが、本連載二十八回の明治三十一年製版の北海道仮製五万分一図に定着したものと思われる。荒井源次郎翁も「ポロメムは、護国神社のあたりをいった」（地名調査同行記―萩中美枝）と述べたことも追記しておきたい。

前回紹介した、松浦武四郎、ライマン、松本十郎、そして、明治二十三年に旭川を調査した永田方正が、「フーレペッ（hure-pet 赤川）―石狩川ノ旧流ニシテ古ヘハ赤川ナリシガ今ハ清水ニシテ赤川ニアラズ」と地名解したフーレペッが、右のポロメムと同一地点の異称だった可能性もある。いずれにしても、石狩川の牛朱別川合流点から、オサラッペ川合流点までは、往時の流路が非常に複雑で、今後とも調査・研究が必要と痛感している。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

10/08/03 (32) 再び「旭川」の地名起源（上）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
㉜
高橋 基

今年は、「旭川開村百二十年」の年で、これを記念した記念事業が多く組まれている。たまたま本連載の第一回も、「旭川の地名起源」であった。今回は紙幅の関係で、第一回で記述できなかった事を追記したい。

第一回でも述べたが、明治二十三年（一八九〇年）九月二十日、庁令六十一号で、次のように、上川郡初の神居村・旭川村・永山村の三村が設置された。（「旭川」の初出）

◎令第六十一号 九月二十日
石狩国上川郡及空知郡ヘ左ノ村名ヲ設ク
空知郡沼貝村（詳省略）
上川郡神居村
北ハ石狩川西ハナイタユベ川
南ハウブン川東ハピイエイ川ヲ界トス

―再び「旭川」の地名起源(上)―

上川郡旭川村
南東ハチュプペツ川
北ハウシユベツ川ヲ界トス
上川郡永山村
南ハウシシユベツ川
北ハ石狩川ヲ界トス

永田方正は、明治二十三年三月に上川・旭川を調査し、明治二十四年に、『北海道蝦夷語地名解』で忠別川の地名解を次のように書いた。

「Chup pet チュプペツ 東川―「チュプカペツ」ニ同ジ。此川ノ水源ハ東ニアリテ日月ノ出ル処故ニ名ク。明治廿三年旭川村ヲ置ク。」

アイヌ語地名研究家の山田秀三は、「旭川の由来」（『アイヌ語地名を歩く』）で、永田の右の忠別川の地名解を記載した上で、次のように述べている。

「チュプ(Chup)は、日、月のこと。これが原名なのであるとして、それを意訳して旭川という名が作られたものらしい。だがこの形の名は永田氏以前の旧記では見たことがない。しかし永田氏ほどの人が自分でアイヌ語を作ったであろうか。チュプペツあるいはこれに近い音を聞いてこの説をなしたであろうか」

山田秀三は、永田方正を「旭川の命名者」としながらも、永田以前の資料で、「忠別川＝チュプペツ」を見たことがないという。しかし、前回に紹介した明治二十年発行の『改正北海道全図』で、忠別川は、「チユツペツ川」と表記、当時の道庁の殖民地撰定・地理・地質の部署では、周知のことであったことは、認識していなかったのである。

さて、もう一つ重要なことは、庁令による三村の分界は、すべて河川によっていて、そのアイヌ語の河川名は、美瑛川の「ピイエイ」を除いて、①ナイタユベ川（内大部川）、②ウブン川（雨紛川）、③チュプペツ川（忠別川）、④ウシシユベツ川（牛朱別川）は、明治二十四年刊行の『北海道蝦夷語地名解』で、初めて表記される永田独自のアイヌ語表記であり、明治三十一年製版の『北海道仮製五万分一図』にも掲載されるものである。

これらは、明治二十三年九月の三村設置時点では、永田方正しか使用不可能なアイヌ語地名表記であった。この事実から、永田方正は、上川初の三村設置に、命名を含めて、深く関わっていたことが裏付けられるのである。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

○令第六十一號 九月二十日
石狩國上川郡及空知郡ヘ左ノ村名ヲ設ク
空知郡沼貝村
上川郡神居村
上川郡旭川村
上川郡永山村

西ハ石狩川北ハ奈江村
南ハ岩見澤村市來知村ヲ界トス
北ハ石狩川西ハナイタユベ川南ハウブン川
東ハピイエイ川ヲ界トス
南東ハチュプペツ川
北ハウシユベツ川ヲ界トス
南ハウシシユベツ川
北ハ石狩川ヲ界トス

↑（註）ウシ■ユベツ川「シ」脱落

『明治二十三年北海道庁布令全書』

10/09/07 (33) 再び「旭川」の地名起源（中）

断章

旭川のアイヌ語地名研究 ㉝

高橋 基

―再び「旭川」の地名起源(中)―

昭和五十二年、旭川市立郷土博物館長の松井恒幸氏は、「旭川村開村の謎」の中で、永田方正が忠別川のアイヌ語名のチュプ・ペッ（cup-pet 太陽・川）を意訳して「旭川」と命名したという説に、次のように反論を述べた。

①旭川という地名は上川離宮計画と合わせ作られた地名である。②何故なら、チュプ・ペッは上川離宮計画以前の文献に出てこない。③離宮予定地の神楽岡の下を流れる川が、忠君愛国に反する「忠別川→忠に別れる川」ではふさわしくない。④「日出る国」の天皇にふさわしい、旭日章旗の「旭」が浮かび、⑤それまでのチウ・ペッ（ciw-pet 水の流れ早い・川→忠別川）に語感の近いチュプ・ペッ(cup-pet 太陽・川)というアイヌ語名が作られ、「旭川」が生まれた。⑥命名者は、第二代北海道庁長官の永山武四郎であろう。

ただし、最後に、これらは決定的な証拠はなく、推論であると断っている。

松井氏には、「"旭川"地名についての考察」という論考もあり、前回紹介したアイヌ語地名研究家の山田秀三も、これを受けて、「チュプ・ペッは永田氏以前の旧記では見たことがない。永田氏ほどの人が自分でアイヌ語を作ったろうか」と記述したのである。

しかし、離宮計画以前の明治二十年に内務省地理局発刊の『改正北海道全図』に、忠別川が「チユツペツ川」と表記されてからは、道庁内の殖民地撰定などでは、秩別、秩別川、秩別原野、チユツペツ川などと使用されていたのであった。

チユツペツは、チュッペッ（cup-pet）で、実際の発音に近い表記。永田方正は、これをチュプ・ペッ（cup-pet）と単語に分けて表記したもので、意味は同じである。

『改正北海道全図』は、明治十七年に、内務省地理局の高橋不二雄と札幌県測量主任の福士成豊が、石狩川水源の石狩岳に登り、初めて中央内陸部の経緯度実測に成功した画期的な地図。

高橋不二雄は、この踏査の詳細な記録を、『札幌県巡回日誌』として残した。写真はその草稿であるが、忠別川は十一回登場するが、写真Ⓐは、最後の四個で、「忠別川→チユツペツ」となっている。高橋の自筆の絵図では、「チユーペツ川」と表記しているが、地図では「チユツペツ川」としている。

写真Ⓑは、石狩場所請負人として有名な阿部屋村山家に伝わった『イシカリ川之図』で、文化年間に描かれたと言われる地図である。忠別川は、「チユツヘツ」と書かれていて、文化期から用例があることがわかる。

さて、アイヌ語が分かり、実際に旭川を踏査した文化期の近藤重蔵や間宮林蔵、安政期の松浦武四郎は、忠別川をチュクベツと表記、チュク・ペッ（cuk-pet 秋・川→秋に鮭 cuk-cep が盛んに上る川）の意味とされている。

「チュク（cuk）の語尾（k）は、破裂音ではなく、喉をしめたままで終わる。つまり、つまったような音である。それでチュプ・ペッだと解されるようになったのかもしれない」と、山田秀三は推論する。

チュク・ペッ（cuk-pet）→チユツペツ＝チュプ・ペッ（cup-pet）→意訳して「旭川」の誕生となった。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

Ⓐ

札幌縣巡回日誌

⑪「チュプペツ」
⑩「チュッペッ太」
⑨「チユッペツ太」
⑧「チユッペツ太」

Ⓑ『イシカリ川之図』

10/10/05 (34) 再び「旭川」の地名起源（下）

断章

旭川のアイヌ語地名研究 ㉞

高橋 基

明治二十三年九月二十日に、上川郡に初めて神居村・旭川村・永山村の三村が設置され、その村界を示すアイヌ語の河川名は、美瑛川の「ピイエイ」を除いて、①ナイタユベ川（内大部川）、②ウプン川（雨紛川）、③チュプペツ川（忠別川）、④ウシシュペツ川（牛朱別川）は、明治二十四年刊行の永田方正著『北海道蝦夷語地名解』で、初めて表記される永田方正独自のアイヌ語表記であり、永田方正が、「旭川」の命名に深く関わっていたことを指摘した。

同じ年の一月十五日には、「滝川村が、新十津川村とともに設置された。その十五日後に発行された、『北海道第九号』北海道学友会刊行に、岡部方幾は、「北海道地名考」

―再び「旭川」の地名起源（下）―

として、札幌・忠別・空知太の地名解（紙幅の関係で割愛）を書き、空知太の項で、「永田方正先生は空知太（註・実際はソラプチペツ）を意訳して滝川村となせり」と明記した。

岡部方幾は、屯田兵司令部付曹長で、この時の北海道庁長官は、永山武四郎であり、永山は屯田兵司令官も兼務していて、岡部方幾はその側近であった。永田方正が「滝川村」を命名したという確固たる情報を持っていたのであろう。なお、永田方正は、「岡部方幾君は、印度語、蝦夷語に練達なる先生」と評している。また、岡部は永山屯田にも度々往来し、「上川離宮の御名称」として、「旭川」「東川」を提唱したこともあった。

札幌学院大学図書館に、『北海道地誌材料第二十巻』という和綴り四十六丁の貴重書がある。永田方正のノートであったが、他の巻は散逸したらしい。この永田方正のノートの最後に綴られていたのが、「地名自記載二付キ内訓」、明治二十三年七月三十一日、北海道庁長官・永山武四郎」という内訓の文書である。

北海道庁長官の永山武四郎が、地名記載につき、旭川誕生の二カ月前に、各部長、郡区長等へ内訓したもので、道庁が地名表記法の基準を示したものとして重要なものである。

六項からなり、第一項は、「凡（おおよそ）地名ニ充ツベキ漢字ハ成ルベク難字ヲ避クベシ」とあり、紙幅の関係で二項～四項は省略して、ここでは、写真の第五項と、第六項を掲載する。

第五項―将来新ニ町村名ヲ付スルトキハ其地ノ字「アイヌ」語ナルトキハ其原義ヲ意訳シタル漢字ヲ付シ（滝川村ノ類）或ハ第一項ニ依リ「アイヌ」語ヲ以テ名クベシ（奈江「谷ノ義」ノ類）其日本語ト「アイヌ」語トヲ区別スル能ハサルモノ亦同シ

第六項―新開町村ニシテ其開拓ニ縁故アル名称（前田村、新十津川村、若クハ月形村ノ類）ヲ用フルハ第五項ニ拠ラス別段ノ詮議ニ拠ル

この内訓は永山武四郎名であるが、文中にもある「滝川村」を命名した永田方正が、担当主導したものであろう。第五項で、アイヌ語地名を重視していることが分かる。

この内訓によって、「旭川村」は、これまで見てきたように、忠別川のチュプ・ペッ（cup-pet 太陽・川）、「神居村」は、カムイ・コタン（kamuy-kotan 神・村）の意訳。「永山村」は、第六項の「開拓ニ縁故アル名称」、すなわち、上川開発の尖兵として、千二百戸の上川屯田の最初の村で、永山武四郎は北海道庁長官兼屯田兵司令官であったところから、その姓・「永山」をとって命名されたのである。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

『地名記載二付キ内訓』

第五項　将来新ニ町村名ヲ付スルトキハ其地ノ字「アイヌ」語ナルトキハ其原義ヲ意譯シタル漢字ヲ付シ（滝川村ノ類）或ハ第一項ニ依リ「アイヌ」語ヲ以テ名クベシ（奈江「谷ノ義」ノ類）其日本語ト「アイヌ」語トヲ區別スル能ハサルモノ亦同シ

10/11/02 (35) 牛朱別川のアイヌ語名（上）

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ㉟
高橋 基

―牛朱別川のアイヌ語名（上）―

前回まで、「旭川」村の地名起源を見てきたが、百二十年前の明治二十三年九月二十日に、旭川村と永山村が誕生したのであるが、この二つの村の境界になったのが、この牛朱別川である。永山村の村界を庁令六一号で確認すると、「南ハウシシュペツ川、北ハ石狩川ヲ界トス」とあり、南の旭川村との境界は、「ウシシュペツ川」と明記している。

さて、旭川村と永山村の境界線となった牛朱別川の明治二十三年から百二十年の歴史の中で、最大の出来事は、牛朱別川の川口、すなわち、石狩川との合流点の切り替え工事である。掲載図は、昭和五年発行の『旭川市全図』で、切り替え工事は、この年着工し、翌六年十一月竣工、昭和七年十月には、旧牛朱別川の埋め立て工事も完了（付帯工事は十五年）。図のように、現・JR宗谷本線鉄橋から旭橋に新たに流路を掘削し、築堤した大工事であった。切り替え後の旧牛朱別川の現・十条十二丁目から現・ロータリーを通り、現・四条西二丁目へ流れ、現・七条西六丁目あたりで石狩川に合流していた流路を埋め立て整地した。その結果、旭川市街地の西部の街並みは一変したのであった。

ところで、掲載図の現在の金星町から十条九丁目にかけて「境界線（←）」が書かれている。永山村が設置された明治二十三年には、石狩川の分流がこを流れていて、現在の十条九丁目あたりで、牛朱別川と合流していたのである。したがって、ここが永山村と旭川村の境界であったのである。

さて、丁度、旭川村と永山村が誕生する明治二十三年の三月に、永田方正は、旭川のアイヌ語地名を調査した。翌明治二十四年に、『北海道蝦夷語地名解』で、牛朱別川について、次のように地名解をした。

「ウシシュペッ（ushishi-pet 蹄川）―鹿跡多キ川○上川アイヌ基吾ヲ、「ウシシュペッ」ハ、「イシュシュペッ」ニテ雪水多ク下リ陸ニ氾濫スルヲ以テ名ツクト」

牛朱別川は、この川のほとりに鹿の蹄の足跡が多かったので、ウシシ（usis―蹄）ペッ（pet―川）と名付けられたという。

掲載図中の旭川中学校（現・旭川東高）の教員だった磯部精一は、『北海道地名解』（大正七年刊）で、次のように述べている。

「牛朱別（ウシシ、ペット）蹄の川の義―ウシシは、「蹄」の義にて、牛馬鹿等何れの蹄を意味するものなるが、此処にては、「鹿の蹄」を意味する由なり。昔時此辺には、鹿の群棲したるを以て、今より二十年前には、旭川中学校の裏辺にて、鹿の角を拾ひしこと往々ありしという。」

二十年前の明治三十一年は、旭川中学校の敷地から牛朱別川河畔までは、上川農事試作場であった。往時は鹿が群棲し、上川農事試作場で鹿の角を往々拾ったとの伝聞が披露されたのであった。これは一例である。

鹿はアイヌの人たちにとっては、鮭同様に重要な食料であり、毛皮は衣料や寝具、角は鉄の代用品で鍬になり、矢先になるなどアイヌの人たちの生活と切り離すことのできない関係にあった。牛朱別川は、その鹿の群棲を象徴する河川名だったのである。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

断章

旭川のアイヌ語地名研究 ㊱

高橋 基

―牛朱別川のアイヌ語名(中)―

牛朱別川は、この川のほとりに鹿の足跡が多い川なので、ウシ・ペッ（usis-pet 蹄・川）と命名された。その牛朱別川での鹿猟に関するアイヌ語地名は、地図①に見えるオヨクウシである。オ・ヨコ・ウシ・イ（o-yoko-us-i そこで・鹿の群れを待ち伏せて狙い射つ・のが常である・場所の意味である。オヨクウシの山裾を牛朱別川が流れていて、山裾と川の間に、鹿の群れがいつも通る道があり、そこで鹿を待ち伏せし、弓で射るのである。鹿猟の絶好の場所であったので名付けられた地名である。

動物学者の犬飼哲夫は、『北方動物誌』で、石狩・大塩方面の鹿が、十勝平原に往来する移動ルートを次のように書いている。「十勝平野への移動ルートの一つは、中央山系の一番低い鞍部、すなわち、標高二千㍍のトムラウシ山とオプタテシケ山の間を越えた。大正時代までこの方面の人達はこの鞍部をシカ越えと呼んでいたが、今ではその名も忘れられてしまった。ところが、現場に行ってみると、ハイ松やクマザサの間に、幅一㍍ほどコンクリートで固めたようなシカ道が残っている」―実在した鹿道の貴重な記録である。十勝の研究者の安田巌は、右のこの鹿道を、石狩と十勝を結ぶアイヌの人たちの交通路のひとつにあげている。また、狩勝峠も元来は鹿道のルートが交通路になったものである。

このように、鹿の集団移動により鹿道ができ、上川では、この牛朱別川のオヨクウシの他に、辺別川・愛別川・石狩川筋に、鹿猟のヨコウシ地名が残されている。

地図①は、明治三十一年製版の『北海道仮製五万分一図』で、ご覧のように、河川名は、ほとんどがアイヌ語で書かれている。地図②は、大正五年測図、大正八年印刷の地図①と同じ位置の五万分一地形図である。

地図①のオヨクウシは、一八八・六㍍の三角点のある三角山の名称が付されているが、現在は埋め立て用に削られて、山名も山容もない。

地図①のオヨクウシと牛朱別川を挟んで対岸にあるのが、キピリヌプリ（kipir-nupuri 水際からそそり立っている崖・山）で、かつては牛朱別川の流れで、崖が形成されていたのであろう。地図②では、一七一㍍の射的山の名称となっている。射的山の名称由来は、明治二十四年に入地した永山屯田兵が、この山の北の裾に射的場を設け、冬期間に射撃訓練したことにより名付けられたもの。射的山からは石刃などの狩猟用の石器が出土し、先土器時代の遺跡として、射的山遺跡の名称で、全国的に知られていた。最近では、庭園から射的山にも登れる「上野ファーム」が、旭川の観光名所として、全国から観光客が訪れている。

射的山の山裾を流れる川が、ヌプポコマナイ＝ヌプ・ポク・オマ・ナイ（nup-pok-oma-nay 野原・下・にある・川）で、平坦地を流れる川の意味で、地図②では当麻町から流れる神水川となっている。

前回は、牛朱別川の旭川市街地の川口部の改修を紹介したが、三角山と射的山の間から、洪水対策用の牛朱別川分水路（人工河川）―幅約二百㍍、長さ約五・七㌔㍍に及ぶ「永山新川」ができ、直接石狩川に合流させている。（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

地図①

地図②

11/02/01 (37) 牛朱別川のアイヌ語名（下）

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ㊲

高橋 基

―牛朱別川のアイヌ語名（下）―

旭川を調査した人の牛朱別川のアイヌ語表記の履歴を見ると、文化四年（一八〇七年）の近藤重蔵は「ウシシベツ」、安政四年（一八五七年）の松田市太郎は「ウシ、ベツ」、松浦武四郎も「ウシ、ベツ」、明治二十年の福原鉄之輔は「ウシ、ベツ川」である。これらから、牛朱別川は、ウシシ・ペッ（usis-pet 蹄・川）で、この川のほとりに鹿の足跡が多い川なので、命名されたと理解できる。

ところが、明治二十四年に永田方正が、北海道庁発行の『北海道蝦夷語地名解』で、牛朱別川を「ウシシ・ペッ」と表記したので、漢字表記では、牛朱別川となったのである。

この事情を、アイヌ語地名研究家の山田秀三は、『北海道大百科事典』で、牛朱別川の読み方を「うししゅべつがわ」とした上で、「永田方正は、ウシシ・ペッ（usis-pet）の子音（s）シを何故かシュと書き、その影響で地図製作者や役所もその誤りを踏襲した場合が多い。だいたいは直して書いたが、牛朱別川ではわざとそれを残した。この誤りの仮名によって牛朱別と当て字されたものらしい」と書いた。

さて、掲載図は、陸地測量部（国土地理院の前身）の明治三十一年製版の北海道仮製五万分一図で、山田秀三が指摘したように、牛朱別川は、「ウシシ・ペッ」となっている。また、支流の「ポンウシシ・ペッ」も同じである。これは、牛朱別川のみに限らず、北海道全域のアイヌ語地名表記に『北海道蝦夷語地名解』の表記が採用されたためである。

さて、掲載図の「シニウシ・ペッ」が、現在の「難波田川」で、その東側に整然と区画されているのが、明治二十五年八月に四〇〇戸が入地した旭川屯田兵村である。同年十一月十八日には、北海道庁告示第六十三号で、旭川村ウシシ・ペッ原野一円に、「旭川村字ウシシ・ペッ」の字が置かれた。このように、川名のみならず地名も永田方正の誤ったアイヌ語表記が踏襲されたのである。

ところで、明治二十年に殖民地調査にあたった福原鉄之輔は、調査復命書で、右の「ウシシペッ原野」を、「ウシ、ペッ川の左側、忠別川の北に横たはる樹林をウシ、ペッポロニタイ（usis-pet-poro-nitay ウシ、ペッの大樹林）ト称ス。其概積壱千五百四拾六万坪」と記し、特に、アイヌの人たちは、「丸木船材は常に之を此地に得ると。」と貴重な記録を残してくれた。

旭川屯田兵村の回顧録では、旭山動物園で有名な旭山は、入地当時は、大樹林があって見えず、伐木して初めて旭山の存在を知ったというのは有名なエピソードである。

また、掲載図のシニウシ・ペッ（sini-us-pet 休む・いつもする・川）は、この川で休憩するという意味であるが、その理由は明確ではないが、丸木舟の製作時や運搬時に、ひと休みする川だったのであろうか。

明治三十一年、このシニウシ・ペッの改修工事が、屯田兵第三中隊長の難波田憲欽大尉の命令で敢行され、その結果、氾濫を防ぎ、灌漑の便が開かれたので、これに因んでこの川を「難波田川」と呼ぶようになった。しかし、この川の北海道庁の公式呼称は、「なんばたがわ」となっている。「うしゅべつがわ」と共に、歴史的資料からみて誤りであろう。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

11/03/01 (38) 内大部川のアイヌ語名（上）

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ㊳

高橋 基

内大部川は、石狩川の左岸の支流で、旭川市と深川市の境界の川である。明治二十三年に旭川を調査した永田方正は、内大部川の地名解を次のように書いた。

「ナイタユベ（nai-ta-yube）川鮫―此川ヘ鮫入ルニアラズ、本川（註・石狩川）絶壁ノ下ニテ鮫ヲ捕リ、舟ニテ此川ヘ運ビ陸ニ揚グ。故ニ此名アリ。」

永田方正が書いた川鮫は、図のチョウザメのことで、アイヌ語でユペ（yupe）。チョウザメは、その卵の塩漬けがキャビアと呼ばれる高級珍味となる魚。図のように鮫に似ていてチョウザメの名がつくが、サメは軟骨魚類でチョウザメは硬骨魚類の仲間。体表には板状の堅い鱗があり、これが蝶の形に似ているので蝶鮫の名称がついたといわれている（蝶番の説もある）。明治時代まで、石狩川や天塩川に、春に産卵のため海から上り、秋に下ったという。両河川とも、今では幻の魚である。

チョウザメ

安政四年（一八五七）、松浦武四郎は上川を調査するために石狩河口を丸木舟で出発し、七日目に、永田方正が「石狩川の絶壁でチョウザメを捕り、ナイタユベ（内大部川）に陸揚げした」場所を通過し、漸く神居古潭に到着する。

―内大部川のアイヌ語名（上）―

松浦武四郎にもこの石狩川の絶壁は強烈な印象だったのであろう。写真①は、その時の調査報文の「再篙石狩日誌」に描いた石狩川のこの絶壁と内大部川口の図で、松浦武四郎の自筆である。写真②は、昭和六十三年に筆者が四人乗りゴムボートでこの絶壁の下を下った時の実景である。かつてチョウザメが棲息していたことを連想させるに十分な雰囲気であった。

松浦武四郎は、帰途、神居古潭で「シリコツネは括槍にて此辺りを乗り廻し居りしが、一尾の潜龍沙魚を捕りて来る」と記したが、『石狩日誌』では、往路「クウチンコロは括鎗（マレプ）を提て岩上に暫時佇立せしが四尺斗の潜龍沙魚を一尾に三尺斗のチライ（註・イトウ）を得来る」と書いている。

また、松浦武四郎は、内大部川の由来になったチョウザメについて、「蝦夷訓蒙図彙」で蝶鮫の絵を添えて次のように解説している。「蝶鮫―潜龍沙魚―ユウベ、カルマー石狩川上九十里の処まですめり。肉白くして味よろし。其皮かたくして、好事家の玩物なり。大きさ四五尺に及ぶ物有。是を以て膠を作る也。」

旭川のアイヌ人たちは、神居古潭のチョウザメをシャメカムイと崇拝し、ヌプリコロカムイ（山の神）の熊と仲の良い友達で、一方は水、一方は山の守護神として深く尊敬し、毎年のサケやマスのお初は、この二神に供えたという。また、石狩川を丸木舟で上る時も、「おれはお前たちの部下のものだよ」ということをシャメカムイに告げる意味で、舟はたをたたく。そうすると無事に通過することができるという。丸木舟での往来の重要な儀式であった。

チョウザメは、石狩川の幻の魚となったが、内大部川のアイヌ語名のナイタユベ（ナイタイベ）によって、往時を回想させてくれる。

写真①

写真②

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

11/04/05 (39) 内大部川のアイヌ語名（中）

断章

旭川のアイヌ語地名研究

㊴

高橋 基

―内大部川のアイヌ語名(中)―

明治二年八月十五日、蝦夷地を北海道と改称し、全道を十一カ国八十六郡に設定、旭川は石狩国上川郡となった。この原案は松浦武四郎によってなされたもので、松浦武四郎は、石狩国上川郡は、「上川郡―本川筋(註・石狩川筋)神処より惣て上をさして一郡に仕候。上川筋、本川筋村々多く、チクベツ、ビ、ベ、ツ等相分り申候へ共、惣名を当時上川と相唱候事に御座候。」と、松浦武四郎の案は、石狩川の現称の神居古潭から上流を石狩国上川郡としていた。

明治二十三年九月二十日に、石狩国上川郡に初の三村、すなわち、神居村・旭川村・永山村が設置される。空知郡との郡界となる神居村の村界は、「北ハ石狩川、西ハナイタユベ川(註・内大部川)、南ハウブン川(註・雨紛川)、東ハピイヱイ川(註・美瑛川)ヲ界トス」(庁令第六十一号)とあるように、河川により分界され、空知郡と上川郡の郡界になったのが、この内大部川(ナイタユベ川)であった。松浦武四郎が神居古潭から上流を上川郡としたのが、約三キロ下流の左岸支流の内大部川が郡界と明記されたのであった。

さて、右の内大部川のアイヌ語表記の「ナイタユベ」は、前号で紹介した永田方正の表記である。重要なので、再度掲載する。

「ナイタユベ(nai-ta-yube)川鮫―此川へ鮫入ルニアラズ、本川(註・石狩川)絶壁ノ下ニテ鮫ヲ捕リ、舟ニテ此川へ運ビ陸ニ揚ゲ。故ニ此ノ名アリ。」

掲載図は、明治二十九年の北海道庁地理課発行の『北海道実測切図』で、二十万分一図を二二〇%拡大したもの。⬇印の所が、鮫(チョウザメ)を捕る絶壁で、ここから丸木舟でチョウザメを運び、内大部川へ陸揚げしたという。永田方正は、明治二十三年三月の調査時にこのことを聞き、明治二十四年発行の『北海道蝦夷語地名解』に右の地名解を書いたのである。松浦武四郎をはじめ、実際に上川を調査した人たちの表記は、「ナイタイベ」で、「ナイタユベ」は永田方正独自の表記である。「旭川の地名起源でも述べたが、永田方正のアイヌ語地名表記は、単語を一語一語切って表記するのが特徴で、内大部川もその典型である。従って、神居村の命名も、旭川村同様に永田方正が命名を含めて深く関わっていたと推察される。

知里真志保は、昭和三十五年に、「上川郡アイヌ語地名解」で、永田方正説を記載した上で、新解もつけ加えて、内大部川の地名解を次のように書いた。

「内大部川(ないたいべがわ)―アイヌ語ナイタイペ(naitaipe)。ナイ・タ・ユベ(nai-ta-yupe沢・の・鰈(ちょうざめ)鮫)の義で、石狩川の絶壁の下で捕った鰈鮫を舟でこの沢へ運び入れて陸へ揚げたのでこの名がついたという。或はナイ・エタイェ・ペッ(nai-etaye-pet沢の・頭がずっと奥へ行っている・川)なまの転訛か。」

永田方正は、前記の書で、天塩川と音更川上流の「ナイタユベ」も、「川鮫」と地名解をしているが、チョウザメがそこまで遡上したか私の調査では疑問である。内大部川については、知里説の後段の検討も含めて、次回は松浦武四郎の記録を中心に記述したい。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

断章

旭川のアイヌ語地名研究 ㊵

高橋 基

―内大部川のアイヌ語名(下)―

安政四年（一八五七年）、松浦武四郎は、内大部川について、当時の上川のアイヌの人たちのリーダーであったクウチンコロからの聞き書きを次のように記録した。

「ナイタイベ―右の方川口巾十間計、遅流也。源まで凡二日路も有るよし。其両岸の山々に椴木多しと。扨川すじ少し上りて右の方、ワツカウエンナイタイへ、また少し上りてノホリコヤンナイタイへ、並びてシノマンナイタイベ、上りて左の方ヲロウエンベツ、右本川すじなり。此うしろはソラチの方に当るよし。源はホロイワ岳と云より落る。魚類鮭少しにて鱒・鯤・鰍多しと。クウチンコル申口」（「再篙石狩日誌」）

掲載図は、松浦武四郎が作成した『東西蝦夷山川地理取調図』の内大部川から神居古潭の左岸と、エヌプト（現・伊野川川口）、チクヘツプト（現・忠別川川口）と、「大番屋」までの関連事項部分を載せたものである。

掲載図には、クウチンコロが述べた内大部川右岸のヲロウエンベツが脱落している。オロウェンペッ（oro-wen-pet その中が・悪い・川）は、普通は岩などがごろごろしていて歩きにくい川をいう。この川は現称・オロエン川で、前回紹介した明治二十九年発行の『北海道実測切図』では、滝の印が七個あり、現地調査でもこの通りで、アイヌ語地名は、現地の地形を表現しているという典型でもある。

また、掲載図では、内大部川の水源の山は、ナイタイヘイトコ（nay taipe-etok 内大部川の・水源）となっているが、クウチンコロは、「ホロイワ岳」としている。全道各地のポロイワ（poro-iwa 大・山）は、目立つ霊山的な山である。このポロイワ岳は、スキー場のある神居山（七九九㍍）ではなく、空知郡との境界の神居山（八〇九㍍）で、別称がカムイシリ（kamuy-sir 神の・山）だったのであろう。

松浦武四郎は、上川・旭川調査のあと、空知川を丸木舟に乗り遡る。内大部川と永源を共にするホロナイ（現・パンケ幌内川）について、次のように記述している。

「ホロナイ―左の方相応の川也。川巾凡十間も有るべし。此源より上川え山ごし有りと。（中略）また、カモイコタンの下え出るにもよろしき由聞き侍りけり。其山中岩石多しとかや。右はタヨトイ度々超えたる事有るよしなり聞けり。」（「再篙石狩日誌」）

右は、現在の道道四号線の旭川芦別線に当たるルートで、松浦武四郎を案内して同行したシリアイノは、帰途にここからナイタイベに山越し、旭川のポンメムの家で五・六日休息して石狩に戻りたい旨を申し出、実行する。

さて、松浦武四郎は、蝦夷地経営上で最も重視したのが、新道開削のための踏査であった。その建言・報告書を安政六年に編集したのが、『燼心餘赤』である。この中の「石狩サツポロ領ヲカハルシよりチトセ通りユウバリ、ソラチより上川大番屋え新道見積り書」では、右のホロナイからナイタイベに山越えし、一里ほど下りイヌプト（伊野川）の上流へ出て、イヌプトを下り、チクベツプトの大番屋の後ろに出るルートを提唱している。

このように、内大部川は空知川筋との交通路の川として利用されていたことがわかる。（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第一週号に掲載します

11/06/07 (41) 神納橋から神居古潭まで（上）

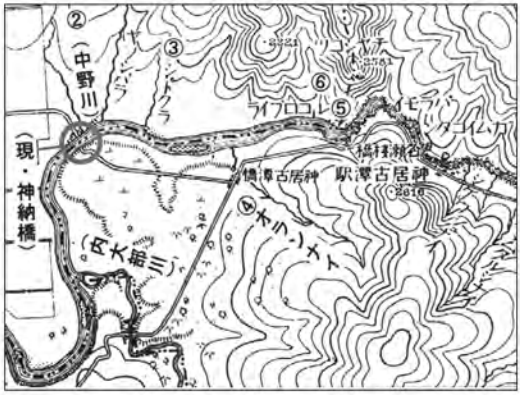
断章
旭川のアイヌ語地名研究
㊶

高橋 基

前回の内大部川から、順次、石狩川を上流に向かいアイヌ語地名を見ていくこととし、今回は、神居古潭の直前までを概観する。

掲載図は、明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』で、鉄道が敷設される前の測図である。左岸の「神居古潭駅」は、駅逓の宿舎のこと。(現・神納橋)は、現在の道道五十七号・旭川深川線の位置で、当時は渡船である。掲載図の石狩川の右岸の⑤の位置までは、当時も空知郡で、現在は深川市域である。

明治二十四年に永田方正は、『北海道蝦夷語地名解』で、前回の内大部川の対岸付近から上川郡と認識していたようで、石狩川の右岸の上川郡の最初に、下流から上流に向けて、次の三つのアイヌ語地名解を書いている(掲載図の番号と照合ください)。



―神納橋から神居古潭まで(上)―

①エンベウシ（enbe-ushi 矢筈ある処）―ラシユパ（方言サビタの木）にて作る矢を「エンベ」と云ふ。兎狐を射るに適す。

②ヤソシパラ（yasoshi-para 広き網漁場）―石狩川の広き網漁場へ注入する川なれば名づく。

③シ゚クラ（shit-kura 機弓）

①のエンベウシは、掲載図外なので記載せず、②のヤソシパラは、深川市納内町の資料で、現・中野川と判明した。神納橋上流の石狩川の広い直線コースで、鮭漁などをしたのであろう。そこへ流入する川である。③のシ゚クラは、仕掛け弓を置く川の意味であろうが、知里真志保も山田秀三も不詳としている。現称のアモイ川の由来も不明である。

さて、左岸では、北海道指定文化財の神居古潭縦穴住居遺跡の上流側に流れているのが、④「オランナイ（o-ran-nai 川尻の水落る川）―川尻の水、本川(註・石狩川)へ落ち下るに因り名づく。橋あり、カムイコタンハシとあれども、此の処カムイコタンにあらず」と永田方正が書いたが、知里真志保は、「オランナイ（o-ram-nai 川尻・低い・沢）―川尻がぐっと低くなって石狩川に注いでいるのでこの名がある」と地名解。現地から知里説が妥当である。

次に、永田方正は、石狩川の川中の激流を、⑤「カムイウッカ（kamui-utka 神瀬）―川の中央に大岩あり。水激して奔流する処」と記した。松浦武四郎も丸木舟で遡上時、「雷吼をなすさま、如何にもおそろしくなりたり」と書き、⑥「ウッカヤオマナイ（utka-ya-omanay 瀬の・岸にある・川）(現称・神居沢川)と貴重な記録も残した。

ところが、このカムイウッカは、掲載図では、⑤「レーコロプイラ」と誤って書かれ、かつ、左岸には「名瀬桟橋」と橋名まで記載している。実は、レーコロプイラは、文化四年(一八〇七年)近藤重蔵が乗っていた丸木舟が転覆破船し、百間(約百八十㍍)ほど流され、御朱印まで塗らしたという、有名なエピソードのある激流の難所で、ハルシナイ(春志内)から二キロメートルも上流にある。

このレーコロプイラについて、永田方正は、「レイコロプイラ（re-koro-puira 有名の激湍―此の崖に桟道あり。名瀬の桟と名づくるも可なるべし」と地名解。この文言から、石狩川の激流の様子と桟道の状況が同じところから、カムイウッカ―レーコロプイラと誤解して、「名瀬桟橋」まで記載したのである。

次回は、その桟橋にあたる神居古潭大橋やカムイウッカの様子を写真でお見せしたい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

11/07/05 (42) 神納橋から神居古潭まで（中）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
㊷
高橋 基

―神納橋から神居古潭まで(中)―

掲載図は現在の二万五千分一の地形図(一五〇%拡大)で、地図の★印の所が、前回紹介したカムイウッカ(kamuy-utka 神の・瀬)の位置で、岩盤が川幅一杯に広がり、写真のように、波打って瀬(ウッカ utka)となっている。

写真は、★印の地点から、望遠で撮影した「神居古潭大橋」で、ご覧のように、大橋といっても、石狩川をまたいだ橋ではなく、崖の部分を安全に通行するために作った橋である。路肩に神居古潭大橋の標識があるが、車で通過する人は、ほとんど橋と意識していないであろう。

これが、前回の明治三十年の地図で紹介した「名瀬棧橋」に当たる橋である。棧橋は、元来は棧道と同じで、切り立った山腹や崖などに沿って、木材や綱などで棚のように張り出し設けた橋のこと。神居古潭大橋は近代工法で作られた棧橋であるが、明治時代も、ここを安全に通るために棧橋があり、明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』では、「名瀬棧橋」の名称であったのである。

明治二十三年にここを調査した永田方正の地名解を再掲すると、「カムイウッカ（kamui-utka 神瀬）―川の中央に大岩あり。水激して奔湍する処」と記した。ところが、明治三十年の『北海道仮製五万分一図』では、このカムイウッカを誤って、「レーコロプイラ」とし、昭和三十五年に、知里真志保は、「上川郡アイヌ語地名解」で、この「レーコロプイラ」を、「レーコロプイラ（re-kor-puira 名を・もつ・激湍）前記カムイウッカと同じものか。」と記述した。有名な激流という意味である。

右の事実から、今後のアイヌ語地名研究者のために、是非伝えたいことは、明治三十年、三十一年製版の『北海道仮製五万分一図』は、少なくとも上川郡は、明治二十四年の永田方正の『北海道蝦夷語地名解』を参照しており、知里真志保の前記地名解は、右の地図を資料として使用していることが明白であるということである。

さて、昭和五十二年と六十三年の二度、四人乗りのゴムボートでここを下ったが、今年の六月二日の写真撮影時は、写真のように、昔どおり瀬（ウッカ utka）はあったが、往時の激流の状況は感じなかった。季節・水量によっても異なるが、ここのカムイウッカは、★印の地点から激流が右岸に叩きつけて、非常に危険な所であるのが特徴である。

実は、天塩川の最大の難所と言われた所も、カムイウッカと言い、別称がカムイコタンであった。名寄市の旧・智東駅の下流にあり、明治時代の天塩川運漕時代も、「智東の滝」と恐れられた有名な難所であった。天塩川のカムイウッカは、左岸に激流が激突する危険な場所で、この点が共通しているのであった。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

断章

旭川のアイヌ語地名研究

㊸

高橋 基

知里真志保も山田秀三も、カムイスキーリンクススキー場のある神居山（七九九・二㍍）は、「ハルシナイカムイシリ（harushnai-kamuishir 春志内の・神山）―春志内川の水源の山」としている。ところが、明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』では、神居山のアイヌ語名は、「オタオシマックタアンヌプリ」となっていて、この地図を参照していながら、二人とも、このアイヌ語地名については一切触れていない。幻のアイヌ語地名であった。

「オタオシマックタアンヌプリ（ota-osmak-ta-an-nupuri川岸の砂原・の後ろ・に・ある・山）」と読むことができる。すなわち、「オタ（地名）」というアイヌ語地名の後ろにある山―という意味である。ところが、安政四年（一八五七年）に調査した松浦武四郎の調査記録にも、「オタ」という地名は記録されていない。「オタ（ota 砂、川岸の砂原）」のつくアイヌ語地名は、和人によって、しばしば漢字表記の「歌」とされる。その代表的なものが、「歌志内（ota-us-nay 砂浜が・ついている・川）オタ・ウシ・ナイ→オタシナイ→歌志内」、「歌登（ota-nupuri 砂・山）オタ・ヌプリ→歌登」などである。

―神納橋から神居古潭まで（下）―

松浦武四郎の調査から十六年後の明治六年、開拓使測量長・ワッソンが、石狩川を愛別川まで測量した。このワッソンに同行した開拓少主典・平林通恪の『北海紀行』に、「オタ（ota 砂）」の和人の訛り表記の「ウタ（砂）」の地名が記載されている。管見では唯一の資料である。ワッソン一行は、アイヌの人たちの漕ぐ丸木舟に乗り、①ナイタイベ川（内大部川）からカムイコタンに向け遡上した。その部分を紹介する。掲載図は現行の五万分一図で、文中のアイヌ語地名の①～④の位置を表示した。

「①ナイタイベ川アリ。上川郡ノ境ト定メタル地ナリ。流急・石出テ瀬声高ク、岩石ノ間ヲ漸ク上ル所アリ。舟屢々転覆セントス。又半里、②ウタニ泊ス。「ウタ」ハ砂ノ義ニテ、岸上砂ヲ布クル平地アリ。他ハ多ク断崖ニシテ崖上ハ山ナリ。六月八日―十町余、③ヲウラオンナイ（石小川）、十町、④ワラモイ。此処ヨリ両岸絶壁・奇石怪岩ノ間ヲ舟行ス。」

①のナイタイベ川は、現・内大部川、③のヲウラオンナイは、前々号掲載のオランナイ（o-ram-nay 川尻・低い・川）で、④ワラモイは、パラモイ（para-moi 広い・湾）の訛った表記で、カムイコタンの入り口である。

さて、幻のアイヌ語地名の②ウタは、平林通恪が書いたように、「ウタハ砂ノ義ニテ」と、ウタ＝オタ（ota 砂、川岸の砂浜）で、この周辺は、両岸が崖で、ここだけが、砂を敷いた平地なので、アイヌの人たちが、ここを「オタ（ota 川岸の砂原）」と言い、ワッソン一行は、明治六年六月七日、ここにテントを張り、宿泊した記念すべき土地であった。

神納橋の左岸は、現在も川砂が堆積し、オタ（ota 川岸の砂原）のアイヌ語地名の要素を残している。写真は、⬇印から撮影したもので、神納橋から見る神居山は、正にオタオシマックタアンヌプリがぴったりの山である。**（アイヌ語地名研究会幹事）**

※毎月第1週号に掲載します

断章
旭川のアイヌ語地名研究
㊹
高橋 基

石狩川で最大の難所が、このカムイコタンである。丸木舟の操舟の名手のアイヌの人たちも、掲載図（現行五万分一図を八十五%縮小）のシキウシバからハルシナイの約三キロメートルだけは、奇岩怪石で川幅が狭く、激流となり、丸木舟での上下が不可能であった。アイヌの人たちは、この間をカムイ・コタン（kamuy-kotan 神の・居所）と尊称していた。

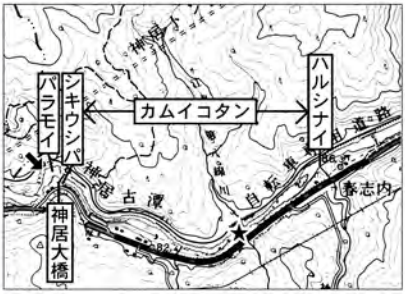
これに神居古潭の漢字が当てられ、明治二十四年に、この地名から、神居村が誕生する。明治二十三年にここを調査した永田方正は、翌年、次のように地名解をした。

「カムイ・コタン（kamui-kotan 神村）―鬼神、石梁にて川水を止めんとす。神、来りて石梁を砕き鬼神を殺す。因りて此辺を神村と名付くと云ふ。今、神居村と称す。」

掲載図の★印のテシ（tes 石梁）に関して、鬼神（ニッネカムイ）を神（サマイクル）が退治する伝説を紹介している。

知里真志保は、昭和三十五年に、「上川郡アイヌ語地名解」でカムイコタンの地名解を次のように書いた。

「カムイ・コタン（kamui-kotan 神・村）―この場合のカムイ（神）は二ッネカムイ（nitne-kamui 魔神）を意味する。ここは河中随所に奇岩怪石現われ、舟行の難所だったので、「魔の里」と名づけられた。」



― 旭川のカムイコタン① ―

パラモイ

知里真志保は、既に、昭和三十一年刊行の『アイヌ語入門』でも同趣意の見解を発表していて、かつ、右の地名解は、『旭川市史第四巻』に掲載されたもので、以後は、旭川では、知里真志保の「カムイコタン＝魔の里」説が流布し、一般的な見解となった。

実は、カムイコタンは、ここ石狩川だけでなく、天塩川・空知川・夕張川・雨竜川・歴舟川にもあり、いずれも舟行の難所であった。アイヌ語地名研究家の山田秀三は、右の知里真志保の調査にも同行し、掲載写真も提供していた。その上で、他の河川のカムイコタンも調査した。その結果を、昭和五十九年に『北海道の地名』の中で発表し、旭川のカムイコタンについては、次のように述べた。

「カムイ・コタン（kamui-kotan 神の・居所）―アイヌ時代の神様は激流とか断崖のような人間の近寄りにくい処に、好んでいらっしゃった。人間はそこを通る時は恐れ畏こんで過ぎなければならない。不謹慎な者はお咎を受けるのは当然な場所なのである（「神がいらっしゃる所」の意）。

筆者も先にあげた各河川のカムイコタンを実際に調査して、山田秀三の解釈が妥当なものと実感している。

さて、写真のパラモイは、カムイコタンの入口で、丸木舟で石狩川を遡る人たちには、前号の神納橋からカムイウッカ（kamuy-utka 神・瀬）の白波立つ激流を乗り越えて、やっとパラモイに着いて、安堵する所であった。写真は➡印の位置から撮影したもので、正にパラ・モイ（para-moy 広い・湾）の景観である。カムイコタンの峡谷を流れてきた激流が、中央に見える神居大橋から川幅が急に広くなり、湾のように見える流れになった所を名付けたものである。ここから多くの伝説の岩などがあり、次回からこれらを紹介していきたい。**（アイヌ語地名研究会幹事）**

※毎月第1週号に掲載します

11/10/04 (45) 旭川のカムイコタン（２）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑮

高橋 基

― 旭川のカムイコタン② ―

掲載写真は、神居大橋と神居岩（左上）で、地図の⬆印から撮影したもの。神居大橋の下流が、前号で紹介したカムイコタンの入口のパラ・モイ（para-moy広い・湾）で、チョウザメのシャメカムイ伝説が有名である。

旭川のアイヌの人たちは、神居古潭のチョウザメをシャメカムイと崇拝し、ヌプリコロカムイ（山の神）の熊と仲の良い友達で、一方は水、一方は山の守護神として深く尊敬し、毎年のサケやマスのお初は、この二神に供えたという。また、石狩川を丸木舟で上る時も、「おれはお前たちの部下のものだよ」ということをシャメカムイに告げる意味で、舟ばたを叩く、そうすると無事に通過することができるが、叩かない者がいると、舟が転覆したり、全然動かなくなるという。この神様のお陰で上川や石狩のアイヌは毎日平和な日を送ることができたという。

明治九年、開拓大判官・松本十郎は、アイヌの人たちの漕ぐ丸木舟で、パラモイを通過する時、アイヌの人たちが、「舷ヲ叩ク事頻ナリ。何故ト問ヘバ、此ノ深淵ニ潜龍沙魚ノ大ナルモノ住居スト古来相伝フト」と、伝説に基づくアイヌの人たちのパラモイ通過儀礼を記録している。（『石狩十勝両河記行』）

また、掲載写真のように、神居大橋から北西の山を見ると、神居岩（二三三㍍）の岩山の突起が目に飛び込んでくる。明治二十三年に調査した永田方正の地名解は、「チヤシ・コツ（chashi-kot 砦跡）―川左［註・左岸］の砦跡と川を隔て相対す。」と書き、明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』でもチヤシコツと明記されている。『旭川市史第一巻』では、実在のチャシコツとして、「チャシコツは二重の空濠によって仕切られた要害の地で、内部から薄手の土器片・石斧・鉄鍋の破片などが出土している。かなりの年月にわたって使用されたものである。」としている。

神居大橋と神居岩

昭和三十五年、知里真志保は、『旭川市史第四巻』の「上川郡アイヌ語地名解」に、神居岩について次のように記述した。

「クッネシリ（kut-ne-shir岩崖・をなしている・山）―神居古潭のトンネルの上に見える山。義経山。ここは昔アイヌの文化神サマイクルの砦だったという。そこの岩崖（いま神居岩）は別名サマイクル・ルシ・ケトゥンチ・サッケ・イ（samaikur-rush-ketunchi-satke-i サマイクルが・獣皮の・張枠を・乾した・所）とよぶ。昔、サマイクルが六匹の犬を飼っていたが、山狩に出た時それらの犬が先に帰って乾してあった獣皮を半分食ってしまった。その食い残した獣皮の形が岩層になって今この崖にあらわれてるのだという。」

右の知里地名解の調査に同行した山田秀三は、門野ネンクアイヌ長老と石山アツムヤシク長老に案内してもらい、「クッネシリ」と教えてくれたのは、門野長老だという（『深川のアイヌ地名を尋ねて』）。また、以後紹介する知里真志保のカムイコタンの伝説は、両氏の伝承によるものである。

神居岩は実在のチャシコッであると共に、右のように、文化神サマイクルの砦説と、魔神ニッネカムイ（nitne-kamuy）の砦説があるが、カムイコタンの伝説の中心は、サマイクルが、ニッネカムイを退治するものである。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑯
高橋 基

― 旭川のカムイコタン③ ―

カムイコタンの自然と伝説を最初に紹介したのは松浦武四郎である。安政四年（一八五七年）の調査の記録である。今回は、紙幅の関係で、掲載図の★印のシラッチセ（sirat-cise 岩・家＝岩屋）と、カムイコタンの別名シュポロ（＝スポロsuporo 川水逆巻く激流）を紹介する。

松浦武四郎は、カムイコタンの入口のパラ・モイ（para-moy広い・湾）の記述の前に、掲載図の★印のシラッチセ（＝シラリチセ）について、実際には見ていないが、添画を描き、次のように書いた（「再窩石狩日誌」）。

「シラリチセ―峨々たる高山の根の岩なる処に一ツの穴有るよし也。是をシラリチセと云。シラリは岩、チセは家也。雪降候哉往来のアイヌ等は、此穴にて止宿する由なるが、夏に成ると時として蝮蛇が有るよしにて、決て此穴に入るものなし。」

松浦武四郎が表記したシラリチセ（sirar-cise）は、アイヌ語の音韻変化で、シラッチセ（sirat-cise 岩・家＝岩屋）となる。また、松浦武四郎は、ダイジェスト版の『石狩日誌』では、「シユマチセ（suma-cise 岩・家）とて岩窟有。其奥を知者無と。雪中には皆是に入りて宿すとかや。」と記述している。同じ意味で、二つの呼称があったことが分かる。いずれにしても、丸木舟での往来時代の辛苦が伝える伝承である。

★印のシラッチセ

大正11年の神居古潭

明治二十三年にカムイコタンを調査した永田方正は、「シラッチセ（shirat-chise 岩屋）―二十人許を容るべし。アイヌ、時に宿すと云ふ。」と書いた。

上の写真は、平成十八年に再訪した時のもので、大きさが分かるように、筆者も入れて撮影した。筆者の上の三角部分から入るのだが、岩盤の崩落や土砂の堆積で、現況ではせいぜい五人くらいしか入れない状況であった。

さて、もう一枚の写真は、大正十一年の現・神居大橋の前身と、そこから上流を撮影した貴重な写真である（北海道立文書館蔵）。複写の関係で見にくいが、左側に、神居古潭駅と進行中の列車が写っている。比較的原始に近いカムイコタンの川筋の姿と、次のカムイコタンの別名シュポロ（スポロ）の状況が理解できるのではと考えて、掲載したものである。

松浦武四郎は、次回でも触れるが、現・神居大橋付近からハルシナイ（春志内）までをカムイコタンと言い、別名を「シユホロと云。シユホロは両方峨々として、中を水の落る処と云事也。カモイコタンと云ふは神が有る処と云事也。」と記述している。

大正十一年の写真でも分かるように、シュポロとは忠別・美瑛・牛朱別の三大河川や小河川の水が、全て石狩川となり、両方峨々（両岸から大岩が突き出ているさま）のこの狭い水路に、怒濤のごとく押し寄せる激流の様子を表現しているのである。

永田方正は、「シュプ ポロ（shup-poro 鮫の産卵多き処）―カムイコタンの原名なり。或アイヌ云、シユポロは、プイラポロと同義にて大瀬の義なりと。」と書いた。

文化四年（一八〇七年）、近藤重蔵は、天塩川の最大難所の「智東の滝」と言われた所を、「カムイコタン＝シポロ（＝スポロ）―乱石の上、湍流激奔、湧濤ノ如シ」と、旭川のカムイコタンと全く同じように記録している。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

断章
旭川のアイヌ語地名研究
㊼
高橋 基

―旭川のカムイコタン④―

今回は、安政四年(一八五七年)の松浦武四郎の記録から、「シキウシバ＝荷物背負場」について検討する。武四郎は、「再篙石狩日誌」でシキウシバを次のように記述した。「シキウシバ―此処大岩峨々と両方より突出する間滝に成たり。シキウシバとは、荷物背負場と云事也。惣名是より上をカモイコタンと云。」

カモイコタンは激流のために丸木舟で上ることができないので、このシキウシバに丸木舟を陸揚げして、荷物を背負い、陸路ハルシナイまで約三キロメートルを歩行し、ハルシナイから別の丸木舟に乗り、上川に入るのが通例であった。その丸木舟から荷物を陸揚げし、荷物を背負う所が、シキウシバであった。

松浦武四郎が書いたシキウシバは、シケウシ(sike-us-i荷物を背負い・つけている・所)に、和語の「場」が付いた合成語のようである。例えば、石狩市の矢臼場が、ヤウシ(ya-us-i網が・沢山ある・所→鮭捕獲用の網が沢山かけられている所)に、和語の「場」が付いた合成語の可能性が高い。(上川には寛政初期から交易用の「場所」が開設され、松浦武四郎より五十年早く上川を踏査した近藤重蔵は、これまでにも紹介したように、比布と忠別の二カ所の番屋に宿泊し、その上、忠別川上流に三カ所の番屋があると明記している。このように、交易の関係で、和人が早くからこのカムイコタンを往来していて、「シキウシバ＝荷物背負場」が定着していた可能性がある。いずれにしても、シキウシバについては、今後の研究を待ちたい」。

「野帳」のシキウシバ

【現・神居古潭】

明治44年の神居古潭

さて、それでは、「シキウシバ＝荷物背負場」の位置はどこだったのか。武四郎は、ダイジェスト版の『石狩日誌』で、次のように記述している。

「辛うじて神処(カモイコタン)のシキウシバといふに着す。此処アイヌ等皆荷物を上乗り来りし船を繋置処也。故に此名あり。又向岸にシユマチセとて岩窟有。」

シユマチセ(suma-cise岩・家)は、前号で紹介した、掲載図のシラッチセ(sirat-cise岩・家)＝シユマチセである。従って、シキウシバは、シラッチセの対岸の掲載図の神居大橋のある左岸の岩場であることが分かる。

ところが、前記の「再篙石狩日誌」では神居大橋の岩場の上流になっている。すなわち、「(シキウシバから)しばし上り、凡二丁計ホロレフシヘ―川中に大岩一ツ有るなり。ポロは大なり。レフシヘは川中の岩のこと。此辺川巾凡二十間位と成(以下省略)」

ホロレフシヘは、ポロレプシペ(poro-rep-us-pe大きい・沖・について・いる・者＝岩)で、掲載図の★印のように、位置は明確である。従って、武四郎の右の記述に信をおくならば、シキウシバは、この大岩から凡二丁(註―約二一八メートル)下流の左岸ということになる。明治四四年の神居古潭の写真(北大図書館蔵)の吊り橋の上流左岸の入り江状の付近である。

掲載の「野帳」のシキウシバは、この調査に持参したフィールドノート(『巳第二番』)のシキウシバのスケッチで、中央の川中の大岩がポロレプペで、絵の右側(左岸)が、シキウシバである。この図からも、シキウシバは、神居大橋の上流左岸であるようである。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

12/02/07 (49) 旭川のカムイコタン（6）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑲
高橋 基

明治十九年八月、上川仮道路が完成する。上川郡初の道路で、これによって「アイヌの人たちの丸木舟により上川入り」していた和人の踏査・紀行が終焉する。なお、上川仮道路の改修事業は、明治二十年着工し、忠別太・空知間（十四里十町）は、明治二十二年九月竣工する。いずれも、樺戸集治監（明治二十年一月～同二十三年六月は、樺戸監獄署の名称）の囚徒による、いわゆる囚人道路であった。また、岩見沢・忠別太間の駅逓も明治二十二年八月に五駅逓が開駅し、明治二十三年六月に上川道路が完成する。

本連載で繰り返し紹介している永田方正は、右のように激動する明治二十三年三月にこの神居古潭を調査したのである。

さて、掲載写真のポロレプシペ（poro-rep-us-pe 大きい・沖・ついている・者＝岩）は、カムイコタンの象徴的な大岩の一つで、写真のように渇水期はこの岩の上にも立てるが、石狩川が増水すると水没する。石狩川の水量を見るバロメーターにもなっている。

安政四年（一八五七年）、石狩川を丸木舟で遡上した松浦武四郎は、シキウシバ（荷物背負場）で上陸し、陸行すること二丁（約二一八㍍）で、このポロレプシペ（表記はホロレフシヘ）に出会う。「ホロレフシヘ―川中に大岩一ツ有るなり。ホロは大なり。レフシヘは川中の岩のこと。此辺川巾凡二十間位と成、其岩の高さも凡六七間より十間にも及（以下省略）」と、持参した野帳にも、シキウシバとこのポロレプシペのスケッチを描いている。余程印象が強かったのであろう。

他方、明治二十三年に陸路カムイコタンに入った永田方正は、この岩について、次のように地名解をした。

「レプシュベ（repushbe 川中の岩）―直訳、沖の中に在る物の義。大岩川中に在り、故に名づく。此岩の上流に八目鰻夥しく群集するを以て此岩の名特に著はる。レプは沖の義なれども上川アイヌは大河の中をレプと云ふ。上川アイヌ某云ふ、古へ此辺は海中なりしを以てレプの称ありと」

永田方正は、この岩の上流に八目鰻が群集するので、この岩が特別視されたと貴重な記録を残した。

冒頭の上川道路の開削、駅逓の開設に最も深く関わった高畑利宜は、明治五年六月に開拓使使掌という役人として、札幌から丸木舟で十日目にカムイコタンの入り口の大渕（ポロモイ poro-moy 広い・湾―のことに到着、ここからハルシナイまで陸行、その後三カ月余にわたり上川の調査をする。上川のアイヌの人たちの漁労については、「五月は八ツ目鰻の漁獲、六七月頃は鱒漁、十十一月に至れば鮭魚を漁す（是は千四五百石漁獲すと云）」と、復命書でもアイヌの人たちの八ツ目鰻の漁獲について触れている。

明治二十一年十月、『北海道毎日新聞』の記者の野中拗泉は、神居古潭定住第一号の元札幌郡苗穂村戸長だった安藤彦松が、ここで八ツ目鰻をこの年約一万尾漁獲、乾燥して札幌で一尾五厘で販売したと記録する。神居古潭小学校の前身は、八ツ目鰻の漁業権利金で建設、また運営資金にもなり、「ヤツメの学校」として語り継がれたという。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

― 旭川のカムイコタン⑥ ―

現・神居古潭

渇水時…巌上に３人の高校生

ポロレプシペと神居岩

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑤⓪

高橋 基

― 旭川のカムイコタン⑦ ―

前回、明治二十一年に神居古潭の和人定住者第一号の安藤彦松が、その年に八つ目鰻を二万尾漁獲し、それを乾燥して札幌で一尾五厘で販売したことを紹介した。その安藤彦松定住から百年目の昭和六十三年に、『神居古潭開基百年記念誌―足跡』が刊行された。**写真①**「タモによるヤツメとり」は、『足跡』に掲載された和人によるしゃくりだも、すくいだもの漁法で、右側の五人は見物人である（撮影年代不明）。前回紹介したように、八つ目鰻の漁業権で、学校が建設されるほど八つ目鰻の漁獲があったのである。

『足跡』の「遺跡・史跡・伝説等の位置」に、「やつめうなぎとり岩」があり、その解説に、「往時アイヌの人達が両手でやつめうなぎをつかみほうだいとった所といわれている」とある。これがまさしく、掲載地図と**写真②**「ポロレプシペ（poro-rep-us-pe 大きい・沖・についている・者＝岩）＝「やつめうなぎとり岩」である。

ヤツメウナギ（八つ目鰻）は、昭和三十九年に発刊された、『アイヌ語方言辞典』では、八雲方言―ヌクリペ（nukuripe）、沙流方言―ウクリペ（ukuripe）、名寄方言―ウクルペ（ukurpe）、そして、旭川方言―オクルペ（okurpe―門野ナンケアイヌ）、オクリペ（okuripe―門野ハルエ）と表記されている。このように、旭川だけが、オクリペ、オクルペなのである。

①タモによるヤツメとり

右の『アイヌ語方言辞典』の旭川の被調査者（資料提供者＝インフォーマント）は、知里真志保や山田秀三のカムイコタン調査に同行・案内をした、門野ナンケアイヌ長老である。門野ナンケアイヌ長老は、松浦武四郎を案内したこともある、上川総乙名（地域の首長）クーチンコロの孫で、明治十四年生まれである。「門野ナンケアイヌ長老と同じ方言を話す人は、妻のハルエ（Harukor）さん、石山Aciniaskur氏の三人きりという。沙流・十勝・名寄などの言葉は、皆ここのとは違う、という」と、言語学上重要な記録が追記されている。

さて、その門野ナンケアイヌ長老伝として、「神居古潭のやつめ」という伝説が、更科源蔵の『アイヌ伝説集』（昭和五十六年刊）に、次のように収録されていて、興味深い。

「昔、文化神サマイクルが山で熊を獲って、木皮舟に積んで石狩川を下って来たところ、ここで舟をひっくり返して、熊の肉と一緒に積んでいた熊の腸を流してしまった。それが石狩川のやつめになったのだ。それで神居古潭にはやつめが多く、また、やつめには骨がないのだ。」

また、門野ナンケアイヌ長老と一緒に、知里・山田のカムイコタン調査に同行・案内した石山アツムヤシク長老（ので子息の石山長次郎長老（明治三十五年生まれ）は、カムイコタンでのヤツメウナギ漁について、次のように語っている。実体験談である。

「オクルペ（okurpe ヤツメウナギ）は、春と秋に捕れるが、秋のがうまい。カムイコタンで捕れた。家族全員で捕りに行った。網には捕虫網状のものを用いた。網が流されないように、岸に一端を固定した網に結び、柄を持って魚が入るのを待った。また、魚がかかったことを知らせるアスルペ（asurpe さわり糸）もついていた。」―**図③**参照―（『昭和五十六年度―アイヌ民族調査Ⅰ』）

②ポロレプシペ

③ヤツメウナギを獲る網

現・神居古潭

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

12/04/03 (51) 旭川のカムイコタン（８）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑤1

高橋 基

―旭川のカムイコタン⑧―

今回は、掲載地図と写真①の「ポロレプシペ（poro-rep-us-pe 大きい・沖・ついている・者＝岩）」は、**川中の大岩**であるが、何故、レプシペ（rep-us-pe 沖・にある・者＝岩）と表現されたのか明確にしたい。

明治二十四年に、永田方正は、この川中の大岩の地名解で、「**レプは沖の義なれども上川アイヌは大河の中をレプと云ふ。上川アイヌ某云ふ、古へ此辺は海中なりしを以てレプの称あり**」と、当時の上川のアイヌの人達の伝承を記述している。その根元となった伝説を見てみよう。

昭和六年刊行の近江正一著『伝説の旭川及其附近』の中の「神居古潭の伝説」を紹介する。これは、天保十四年（一八四三年）生まれといわれる村山与茂作長老の伝承を中心にまとめたものである。

「ずつと古い昔の事である。其の頃はカムイコタンが、石狩川の河口で太古はあれから下流は海であった。毎日毎日帆掛け船（弁財船）が何隻となく這入つて来ては、石狩アイヌの捕らへた熊、鹿、鷹、狐、鮭、鱒と、珍しい器具と交換したものである。今は石狩川口に住んでゐると伝へられてゐるシヤメカムイ（石狩川に棲息するテウザメ）といふ神様が、神居古潭停車場附近の深い淵に住んで居たが、日のよく輝いた日には、美しい背中を水面に出して居たものであった。此のシヤメカムイと、山のカムイ（ヨモサク翁は熊の事であると話した）は、非常に仲が良く、一方は水、一方は山で、上川アイヌの守護神として崇められて居た。秋になって鮭が捕れるやうになると、アイヌウタリ（アイヌの人々）は、自分達の食ふ前に、必ず此のシヤメカムイと、山のカムイに捧げたものである。」

この後に、本連載㊺回でも紹介した、石狩川を丸木舟で遡って カムイコタンのパラモイ（para-moy 広い・湾）に着くと、丸木舟の舷をたたき、「自分はシヤメカムイの子分である」という符号を送ると、カムイコタンから中に無事入ることが出来るといい、「この神様のお庇護で上川のアイヌウタリは、毎日平和な月日を送れたのである。カムイコタンといふのは、神居古潭に神様が居る所といふ意味で、カムイは則ちシヤメカムイ、山のカムイ（熊）を指したものである。」と、カムイコタンの由来も明記している。

右の伝説から、カムイコタンにある「ポロレプシペ（poro-rep-us-pe 大きい・沖・ついている・者＝岩）」は、伝説では、海の沖にあった大岩だったので、右のように命名されたことがわかるのである。

さて、それでは、カムイコタンが石狩川の河口であったのが、何故、現在のようになったのか、伝説は次のように続く。

「現在、夫婦岩と称せられて、巌石が流れに横たわって居るが、アイヌウタリは、ニチエネカムイ（鬼または化け物）といって居る。ニチエネカムイが、カムイコタンに来て、アイヌ達に魚も捕らせなければ、此の種族も滅ぼしてしまふと暴れ廻った時に、シヤメカムイが現はれて、大格闘の末に、此のニチエネカムイを殺してしまった。此の戦で多くの地面を流し、突き進んで陸を作り、現在のやうに石狩川口迄が陸になったのである。」

写真②が、右の文中で、夫婦岩、または、ニチエネカムイと言われた岩群である。現在は、テシ（tes 岩梁）と言い、岩が川幅一杯に梁のようになった状態に命名されたもの。詳細は上流のテシ（tes 岩梁）で説明したい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

①ポロレプシペ

②テシ（岩梁）

現・神居古潭

12/05/01 (52) 旭川のカムイコタン（9）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑫
高橋 基

―旭川のカムイコタン⑨―

掲載地図と**写真①**の「ポロレプシペ(poro-rep-us-pe 大きい・沖・についている・者＝岩)」は、**川中**の大岩であるが、旭川のアイヌ伝説では、カムイコタンまでが、**海**であったので、**レプ**シペ(rep-us-pe **沖**・についている・者＝岩)と、**レプ**(rep 海、沖)の語が用いられた。地理的概念としての海のアイヌ語は、アトゥイ(atuy 海)であるが、漁や交易に関して、また、海のない上川や石狩川中流域では、物語や伝説の中では、**レプ**(rep 海、沖)の語が用いられたという。

前号では、紙幅の関係で割愛したが、カムイコタンまでが、海であった証拠は、「カムイコタンから下流は海であったのは事実で、その証拠にオトエ(現・深川市音江町)、タドシ(現・深川市多度志)附近の貝塚から出るものは全く海の貝類の化石ばかりである」―と、結んでいる。

さて、前号で紹介したカムイコタンまでが海であったという伝説は、伝承者が明確で、しかも、神が、**写真②**の「ニチエネシヤパ(鬼の首)」をはねるという、カムイコタンの伝説の根幹をなす貴重なものである。前号では、昭和六年刊の近江正一の**写真③**の『伝説の旭川及其附近』で紹介をした。その近江正一は、大正九年九月、旭川新聞の記者として篤彦のペンネームで、「アイヌ種族の伝説」の標題でアイヌの伝説等を二十六回にわたり連載している。前回紹介した、「神居古潭の伝説」は、連載の第一回の記事がほぼそのまま転載されている。近江正一は、その連載の冒頭で、伝説の伝承者を、「近文のアイヌコタンに、本年八十五歳になる村山與茂助(十回目に村山與茂作翁と訂正)と云ふ古代の旭川附近及伝説をよく知っている副酋長」と紹介している。

村山与茂作は、松浦武四郎の記録では、天保十四年(一八四三年)生まれとなっているが、近江正一の記述では、天保七年(一八三六年)生まれとなっていて、年齢に誤差がある。明治二十年代の記録では、上川アイヌの酋長(首長)が、川村モノクテ、副酋長が村山ヨモサク(与茂作)で、ヨモサクは日本語のできるアイヌの二・三人のうちの一人であったと伝えられている。いずれにしても、伝説の伝承者が判明しているのは、意義深いことである。

なお、近江正一は、『伝説の旭川及其附近』を改題して、昭和二十九年に、『アイヌ語から生まれた郷土の地名と伝説』として刊行した。更科源蔵は、右の書に「推薦の言葉」を書いた上、自らは、昭和三十年に『北海道伝説集・アイヌ篇』(楡書房)を刊行した。更科源蔵の右の書は、出版社を替えて、昭和四十六年には、『アイヌ伝説集』(北書房刊)、昭和五十六年には、『アイヌ伝説集』(みやま書房刊)として出版された。更科源蔵のこれらの著作には、村山与茂作が語った「神居古潭の伝説」も、「神居古潭の神々」として採録され、出典も、近江正一『伝説の旭川及びその附近』と明記されている。

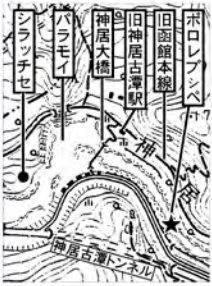
さらに、昭和三十四年には、『旭川市史第一巻』に、「旭川と近郊のアイヌ伝説」として、五十一話が掲載されている。その中で、神居古潭の伝説の五話は、近江正一の『伝説の旭川及其附近』あるいは、『アイヌ語から生まれた郷土の地名と伝説』からの転載でありながら、どうしてか出典が記載されていない。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

①ポロレプシペ

②ニチエネシヤパ(鬼の首)



現・神居古潭

③「伝説の旭川及其附近」

断章

旭川のアイヌ語地名研究

53

高橋 基

―旭川のカムイコタン⑩―

石狩川に左岸から突き出ている岩である、掲載地図と写真の「ポロレプシペ（poro-rep-us-pe 大きい・沖・についている・者＝岩）」は、この岩が位置の特定ができることでも重要な役割をなしている。

安政四年（一八五七年）に松浦武四郎は、この岩から下流二丁（約二一八㍍）に、丸木舟から荷物を陸揚げし、荷物を背負う場所である「シキウシバ（sike-us-i 荷物を背負い・つけている・所＋和語の『場』）―松浦は、『荷物背負場』と表記」があると記述した。

ところが、明治二十三年に調査した永田方正は、翌年発刊した『北海道蝦夷語地名解』では、この岩を「レプシュベ（repushbe 川中の岩）」と書き、この岩の上流に、丸木舟から荷揚げする地名として、「イヤッテウシ（i-yapte-ushi 揚場）―荷物を陸揚げする処なり」を記載した。しかし、松浦武四郎や明治期の調査記録や紀行からも、ポロレプシペより上流に、荷揚げ場があるとは考えられないのである。

永田方正の『北海道蝦夷語地名解』の石狩川の地名解の地名記載方法は、原則的には、石狩川の下流の左岸から上流の水源まで記述し、その後、右岸の下流から上流の水源まで順次書く方式である。掲載図の「現・神居古潭」の例で見ると、シラッチセは、「本川の右」（石狩川の右岸）、パラモイは、「本川」（石狩川の川中の意味）、ポロレプシペは、永田は先に見たようにレプシュベと書き、「本川」（石狩川の川中）、そしてイヤッテウシも、「本川」（石狩川の川中）と記述している。

ポロレプシペと神居岩と旧駅舎

昭和三十五年、知里真志保は、『上川郡アイヌ語地名解』の「まえがき」で、地名記載順について、永田と同様に、川下から川上に向かって地名を列記したと書き、永田と異なる点は、『「左」とあるのはアイヌ流の考え方に従って『川上に向かって左（註・右岸）』をさし、『右』は『川上に向かって右（註・左岸）の意味である』としたことである。

知里真志保は、このように地名記載方法を明確にしながらも、本連載の㊽のカムイコタン⑤で紹介した、「イヤッテウシ（i-yapte-ush-i 物を・陸揚げし・つけている・所）―神居古潭の吊り橋（註・神居大橋）の下。」を、永田同様に、掲載図のポロレプシペの上流に記載している。これは、知里真志保が、イヤッテウシの位置を、「神居大橋の下」と明記しながらも、記載順はポロレプシペの上流に記載するという矛盾を露呈している。

なお、松浦武四郎が記載したシキウシバは、永田・知里の地名解にはなく、永田・知里が採録したイヤッテウシは、松浦のカムイコタンの記録にはない。この二つのアイヌ語地名が、同時に記載されている地図が、管見では唯一、掲載地図の『蝦夷地図』である。

文化七年（一八一〇年）の『蝦夷地図』は、国文学研究資料館史料館所蔵図で、作者が間宮林蔵という説のある地図である。ただし、テシ（tes 岩礁）がケシと誤写されているので、間宮の直筆ではなく、写図と推測される。図中のヤフテウシ（イヤッテウシ（i-yapte-ushi 揚場）―荷物を陸揚げする処）と、シケウシハ（シキウシバ（sike-us-i 荷物を背負い・つけている・所＋和語『場』））の二つのアイヌ語地名は、文化期には併存していたことを物語る貴重な地図であるといえる。

文化７年『蝦夷地図』

現・神居古潭

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

断章

旭川のアイヌ語地名研究

⑭

高橋 基

―旭川のカムイコタン⑪―

前回は、明治二十四年の永田方正と昭和三十五年の知里真志保のアイヌ語地名記載方法を紹介した。永田も知里も、川下から川上に向かって地名を記載するのは共通しているが、異なる点は、知里は、『左』とあるのはアイヌ流の考え方に従って『川上に向かって左(註・右岸)』をさし、『右』は『川上に向かって右(註・左岸)の意味である』としたことである。

さて、安政四年(一八五七年)、カムイコタンに到着した松浦武四郎は、丸木舟を漕ぎ案内をしてくれたニホンテとアイランケの二人に、これから歩くシキウシバ(荷物背負場)からハルシナイまでの約三キロの間の地名を聞き、手持ちの野帳(フィールドノート)に書き付けた。それが、掲載写真の①『巳第二番』の当該部分である。対照しやすいように番号を付し、見えない部分も補足して、以下に記述する(②の地図も参照下さい)。

(1)シキウシバ…荷物背負場、荷負通る也
(2)ホロレフシヘ…川中大岩有
(3)ホンノミンタルマイ…右
(4)ホロミンタルマイ…右
(5)ヲナエルシ
(6)テシヤヲマナイ…右
(7)サヌシヒリ
(8)ルイカルシ…右
(9)テシヤ…大滝也
(10)テシヤヲマナイ…左
(11)ハルシナイ…右

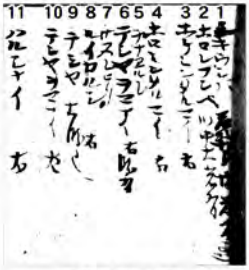
シキウシバよりハルシナイ迄をカモイコタンと云也。**ニホンテ、アイランケ申口**

右のように、この記載法は、知里のいう、「アイヌ流の考え方」によって書かれていることが明瞭である。また、野帳には、地名を教えてくれた人(インフォーマント)の名前を「ニホンテ、アイランケ申口」のように必ず記述している。松浦武四郎は、この野帳を基に報文日誌の「再篙石狩日誌」を完成するが、これには、先の「ニホンテ、アイランケ申口」の部分は省かれている。

他方、松浦はまた、野帳を基に川筋ごとの地名帳の『川筋取調図』や『川々取調帳』を作成し、安政六年(一八五九年)にそれらを基にして、『東西蝦夷山川地理取調図』二十八枚を完成する。この地図は、伊能忠敬実測図の中図を基にしたもので、縮尺は二十一万六千分の一で、木版三色刷りである。

右の二十八枚の最初の「首」二枚にわたり、前記のニホンテやアイランケなど松浦武四郎を案内したり地名調査に協力してくれたアイヌの人たち二百七十九人の名前を記載して、松浦武四郎は感謝の意を表している。石狩国上川郡では、首長のクーチンコロ以下十九人が記載されている。このように案内者や協力者の名前が記載されている地図は、地図の世界では類例がないといわれている。松浦武四郎のアイヌの人たちへの深い思いを知ることができるのである。

さて、掲載図の②は、写真①の野帳の当該部分であるが、これまで見てきたポロレプシペが、右岸に「ホロレプシベ」と誤って記載されている。これは『川々取調帳』に右岸に誤って記されて、この地図にも誤りのまま写され、それが、明治二十四年の永田方正の地名解にまで誤ったまま引き継がれてしまった典型的な例である。



①『巳第二番』
シキウシバ～ハルシナイ

②『東西蝦夷山川地理取調図』

現・神居古潭

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

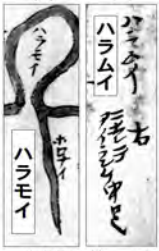
12/08/07 (55) 旭川のカムイコタン（12）

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑤⑤

高橋 基

前回は、安政四年(一八五七年)に、上川(旭川)を調査した松浦武四郎は、アイヌの人たちに地名を聞いた時は、その地名と共に、教えてくれたアイヌの人たちの名前を必ず記録していたことを紹介した。その時は、その土地を熟知した地元のアイヌの人に尋ねたのである。

カムイコタンに到着前のナイタイベ(現・内大部川)までは、丸木舟を漕ぎ、案内してくれた石狩川中流のトツク(現・新十津川町)の首長のトミハセとセツカウシに聞き、ナイタイベから掲載図の「現・神居古潭」のパラモイ(para-moy 広い・湾)までは、上川のニホンテとアイランケに尋ねた。写真①の(1)が、松浦武四郎が持参した野帳(フィールドノート『巳第二番』に書いたパラモイの記録である。



①(1)『巳第二番』
(2)『蝦夷地図』

(1)ハラムイ―右
ニホンテ
アイランケ　申口也

これは、「パラムイ(para-muy 広い・箕)―(上流に向かって)右岸―ニホンテとアイランケが述べた」という意味である。実は、このハラムイ＝パラムイという表記は、松浦武四郎のこの記録が唯一のものなのである。

―旭川のカムイコタン⑫―

そのパラムイの意味を考察したい。

まず最初に、明治二十三年に調査した永田方正と、昭和三十五年の知里真志保の地名解を紹介する。

(永田地名解)・パラモイ(para-moi 広湾)―カムイコタンの激湍此処に至りて川幅広くして湾流し、流水始めて穏やかなり。パラモイは、広き静処とも訳すべし。(註―para-mo-i 広い・静かである・所)

(知里地名解)・パラモイ(para-moi 広い・湾)―ポロモイ(poro-moi 大きい・湾)と呼ぶ人もある。神居古潭のトンネルの下。(註―トンネルは、旧国鉄函館本線のトンネルで、掲載図の「現・神居古潭」にも見える)

旭川のカムイコタンのパラモイに関しては、右の永田地名解が、最も簡潔で的確な説明と言える。

さて、ニホンテとアイランケが松浦武四郎に教えた地名の「ハラムイ」は、「パラムイ(para-muy 広い・箕)」であった。本来のムイ(muy)は、「箕→穀物をあおりふるって、からやゴミをより分ける農具」であるが、アイヌ語地名では、モイ(moy 湾＝入江)の訛り、転訛として残っている。知里真志保の『地名アイヌ語小辞典』にも、「モイ(moy 浦)のなまり」と記載されている。積丹町の島武意↑スマムイ(suma-muy 石の・箕↑元来は、スマモイ suma-moy 石でできた・入江)が、代表的な例で、海岸部に多い。

ハラムイは、松浦武四郎が残した写真②の地図にも描かれている。海岸部に多い、「ムイ(muy 箕)地名が、何故、内陸部の旭川のカムイコタンにあるのか?それは、これまで見てきたように、ポロレプシペ(poro-rep-us-pe 大きい・沖・についている・者＝岩)のように、カムイコタンまでが、海であったという伝説と深い関係があるのであろう。その意味でも、非常に興味深い記録である。

他方、写真①の(2)「ハラモイ」も、本連載53の文化七年(一八一〇年)の『蝦夷地図』で見たように、「ハラモイ＝パラモイ(para-moy 広い・湾)」も、古くから見られた呼称であったことも分かる。一つの地名に、複数の呼称がある典型的な例である。

②『東西蝦夷山川地理取調図』

現・神居古潭

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

断章

旭川のアイヌ語地名研究

⑤⑥

高橋 基

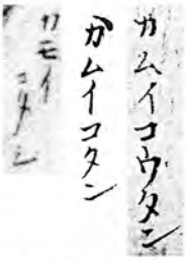
―旭川のカムイコタン⑬―

―此処川中ノ岩エ水打付ケ両方エ流ル大難所ナリ。アイヌ五六丁ノ間舟ヨリ荷上ゲ、舟ヲ引キテ川端ヲ行ク。舟二乗リテ上ル事成リカタシ。両方切立岩沢切立ニテ木有リ。沢幅百間ホドナリ」と記している。ただし、これは実際に踏査した記録ではなく、主に聞き取りにより編集したものである。上川では、他にチクベツ(忠別川)とタナシ(棚瀬山、二二四㍍)の二カ所が記載されている。

旭川のカムイコタンには、カタカナ表記に、カムイコタンとカモイコタンの二種類の表記があり、明治期に漢字表記の神居古潭となり、明治二十三年九月二十日に神居村が設置されるのである。今回と次回の二回にわたり、カモイコタンから神居村誕生までの歴史を表記を中心に繙いてみたい。

カムイコタンの地名記録で最も古いのは、天明末期から寛政初期(一七八九年前後)の**写真①**の『松前随商録』(市立函館図書館蔵)の(1)カムイコウタンと言われている。松前藩主の直場所が、カムイコタンを含めた石狩川上流(上川郡)に二カ所設置されていたという記録である。

(2)のカムイコタンは、寛政九年(一七九七年)、松前藩士・高橋壮四郎(寛光)ら四名が、藩命により蝦夷地を調査して編纂した地理書の『蝦夷巡覧筆記』(別名松前地並東西蝦夷地明細記)、掲載のカムイコタンは、別名『松前東西地利』―国立文書館蔵によった)で、カムイコタンの初の具体的記録である。すなわち、「カムイコタン



①『松前随商録』など

(3)のカモイコタンは、寛政九年(一七九七年)の自序のある、近藤重蔵の『蝦夷地絵図』(東京大学史料編纂所蔵)のカモイコタンの表記である。(4)のカムイコタンは、同じ近藤重蔵であるが、文化四年(一八〇七年)に、天塩から山越えし、上川を踏査した時の『蝦夷地図』(高木崇世芝氏蔵)のカムイコタンの表記である。

近藤に続き上川を調査した間宮林蔵は、本連載53で紹介した、文化七年(一八一〇年)の『蝦夷地図』(国文学研究資料館史料館蔵)の表記は、カムイコタンであった。ところが、伝・文政五年(一八二二年)の伝・間宮林蔵の『蝦夷図』(国立国会図書館蔵)では、カモイコタンとなっている。

④松浦武四郎「再嵩石狩日誌」

松浦武四郎は、嘉永三年(一八五〇年)に稿本『蝦夷語』(松浦武四郎記念館蔵)の凡例で**写真②**の「神をカムイ」、また神祇で「神―カムイ」と表記しながらも、本連載54でも紹介したように、安政四年(一八五七年)、案内をしてくれた、ニホンテとアイランケから、**写真③**の「シキウンバよりハルシナイ迄をカモイコタンと云也」と教えられ、カモイコタンと表記した。この野帳『巳第二番』から、幕府(箱館奉行所)への報文日誌の稿本「再嵩石狩日誌」(共に松浦武四郎記念館蔵)でもカモイコタンと記し、カモイコタンの意味を次のように簡潔かつ最適な表現をしている。

「シキウンバとは、荷物背負場と云事也。惣名是より上をカモイコタンと云。またシユホロとも云。シユホロは両方峨々として中を水の落ちる処と云事也。カモイコタンと云は神が有る処と云事也」

写真④は、右の文章に添えた松浦武四郎自筆の「カモイコタンの図」である。次回は、この松浦のカモイコタンの表記から神居村が誕生するまでの歴史を確認したい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑰
高橋 基

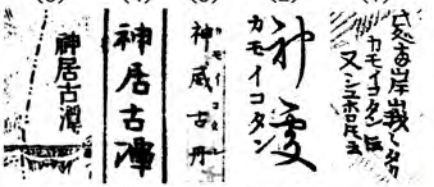
―旭川のカムイコタン⑭―

今回は、松浦武四郎が表記した「カモイコタン」が、「神居古潭」の漢字表記になった経緯を明らかにしたい。

写真①の(1)は、本連載の⑭でも紹介した、松浦武四郎の『東西蝦夷山川地理取調図』(北海道開拓記念館蔵)のカモイコタンで、「此処両岸峨々タリ カモイコタント云 又シユホロトモ云」とある。

この地図は、安政六年(一八五九年)刊行の木版彩色刷地図である。蝦夷地(北海道)が二十六舗(枚)に分割されて刷られていたので、調査には該当部分のみの持参が可能であり、明治初期まで広く利用され、旭川のカモイコタンの表記が定着していった。

(2)は、松浦武四郎の文久元年(一八六一年)刊行の『石狩日誌』の「神處(カモイコタン)」である。前回も紹介した、幕府への報文日誌の「再箇石狩日誌」と違い、『石狩日誌』は広く蝦夷地を紹介する普及版のため、フィクションが多い。しかし先の地図と相まって、旭川のカモイコタンの表記は定着していったといえる。



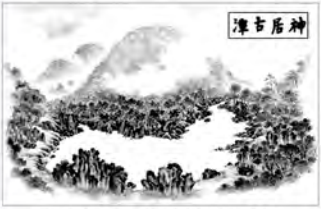
①カモイコタンの表記

明治五年、上川を八十日余調査した開拓使使掌の高畑利宜(たかはたとしよし)は、『石狩川検分図』(滝川市郷土館蔵)でも、カモイコタンと表記している。その「復命書」には「神威古丹」と漢字表記があるが、これは大正四年の筆写なので、漢字表記の初出とは認められない。

明治七年、開拓使お雇い地質学士兼鉱山師長のライマン一行は、石狩川水源から十勝へ山越えして調査したが、その時の報告書の訳文では、「鴨居古丹」を使用した。カモイコタンの明治期の漢字表記の最初である。

明治十五年、札幌県地理課の福士成豊(ふくしなりとよ)は、石狩川流域の測量をして愛別まで調査した。その時の復命書(北海道立文書館蔵)では、**(3)**「神威古丹(カモイコタン)」と漢字表記にカモイコタンとルビを付けている。

明治十七年、内務省地理局の高橋不二雄(たかはしふじお)は、北海道の中央高地の測量のため、右の福士成豊と石狩川水源の石狩岳に登頂するなど、本道の中央高地の詳細を明確にした。その調査記録の『札幌県巡回日誌』(東京大学史料編纂所蔵)に、初めて**(4)**「神居古潭」の漢字が使用された。現在の漢字表記の「神居古潭」を用いた最初である。なお、帰路の記事では「鴨居古丹」を二度使用している。従ってカモイコタンの読みであったと推測される。「潭＝深い淵」は、地形・場景と見事に合致している。



②高橋不二雄『溯磆画帖』

また、高橋不二雄は、この踏査で多くのスケッチを描き、『溯磆画帖』(東京大学史料編纂所蔵)として残した。

写真②は、神居古潭のパラモイ(para-moy 広い・湾)を描いた絵である。高橋不二雄の自筆キャプションは、「号外第一号、八月三十日、石狩川左傍(註・上流に向かって左岸)ノ山腹ヨリ神居古潭ノ西端ヲ見ル図」と「神居古潭」の漢字を使用している。本連載④⑧でも紹介した現在のパラモイの写真と、ほぼ同じ位置から描いたと思われる貴重な絵である。

明治二十年五月、内務省地理局から、高橋不二雄の自序のある、『改正北海道全図』(北海道大学附属図書館蔵)が発行された。この地図は五十万分の一図で、当時最高の北海道地図であり、明治十九年一月に設置された北海道庁の基本地図となった。カムイコタンは、**(5)**「神居古潭」と漢字表記されて、以後これが正式表記となったのである。

神居村誕生については、紙幅の関係で次回ときせていただいた。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑱
高橋 基

―旭川のカムイコタン⑮―

前回は、安政四年（一八五七年）に旭川のカムイコタンを調査した松浦武四郎の「カモ・イコタン」の表記から、内務省地理局の高橋不二雄が、明治十七年に初めて神居古潭の漢字表記を使用し、明治二十年五月に内務省地理局から、高橋不二雄の自序を持つ、当時最高の北海道地図―『改正北海道全図』の地図上に「神居古潭」が初めて記載され、以後正式表記となったことを述べた。ただし神居古潭の読み方は、カモ・イコタンであった。また、この地図は、明治十九年一月設置の北海道庁の規範の北海道地図として活用されていた。

例えば、**写真①**は、明治二十二年作成の「石狩原野殖民地撰定概図」の神居古潭である。神居古潭の漢字表記と、その左側に、明治二年に松浦武四郎により確定した、上川郡と空知郡の郡界（――）表示も、規範の『改正北海道全図』と同じである。

さて、永田方正は、明治二十三年三月に旭川のカムイコタンを調査した。これより先、同年一月十五日に滝川村が設置され、その名称は永田方正が命名したと言われている。同じく九月二十日に上川郡最初の三村が誕生する。すなわち、神居村・旭川村・永山村である（庁令第六十一号）。庁令では神居村の村域は、次の通りである。

①殖民地撰定概図

「北ハ石狩川、西ハナイタユベ川（註・内大部川）、南ハウプン川（註・雨紛川）、東ハピイエイ川（註・美瑛川）ヲ界トス」

神居村は、北は石狩川、西は内大部川、南は雨紛川、東は美瑛川と、村界は東西南北とも河川によって分界され、しかもその河川はアイヌ語の表記で設置されたのである。

ここで注視するのは、西の村界の内大部川のアイヌ語のナイタユベ川の表記である。内大部川のアイヌ語名は、文化期の間宮林蔵や安政期の松浦武四郎をはじめナイタイ・ベであった。**写真①**の「殖民地撰定概図」もナイタイベ川である。ところが、神居村の分界河川名は、「ナイタユベ川」である。このナイタユ・ベ表記は、本連載㊴の「内大部川のアイヌ語名(中)」でも紹介したが、永田方正の独自表記である。すなわち、「ナイタユベ（nai-ta-yu-be）川鮫（おおさめ）―此川へ鮫入ルニアラズ、本川（註・石狩川絶壁ノ下ニテ鮫ヲ捕リ、舟ニテ此川ヘ運ビ陸ニ揚ゲ。故ニ此ノ名アリ」としている。

右の内大部川の地名解は、明治二十四年刊行の『北海道蝦夷語地名解』に掲載されていて、神居村が設置された明治二十三年段階では、永田方正しか使用できなかったアイヌ語地名表記であった。この点からも、滝川村同様に、神居村も永田方正の命名と推測される。

②北海道実測切図

また、松浦武四郎以来、高橋不二雄まで、カムイコタンは、カモ・イコタンの表記であったが、本連載㊹の「旭川のカムイコタン①」で紹介したように、永田方正はカム・イコタンと表記した。カモ・イコタンでは、神居村にはならないのである。左の地名解も神居村が誕生した翌年のものなので、神居村の永田方正命名説の根拠である。

「カムイコタン（kamui-kotan 神村）―鬼神、石梁にて川水を止めんとす。神、来りて石梁を砕き鬼神を殺す。因りて此辺を神村と名付くと云ふ。○今、神居村と称す。」

「今、神居村と称す」の一文は、神居村はカムイコタンの意訳であるとの明文化と、永田方正の神居村命名の自画自賛の感慨を感ずる。

写真②は、明治二十九年発行の『北海道実測切図』の神居古潭である。郡界（――）が内大部川になっていること、アイヌ語地名は永田方正によっているのが特徴である。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

断章

旭川のアイヌ語地名研究 ⑲

高橋 基

―旭川のカムイコタン⑯―

前回は、旭川のカムイコタンの表記は、松浦武四郎のカモイコタン表記から、神居古潭の漢字表記となり、永田方正によって、カムイコタン表記となって、明治二十三年に神居村が誕生したことを述べた。今回は反対に、カムイがカモイの表記になった歌志内市の場合を紹介する。

今年は、旭川市民の誇りである作家・三浦綾子さんの生誕九十年の記念の年である。三浦綾子さんは、「一九三九年（昭和十四年）、私は市立旭川高等女学校を卒業、小学校教諭の検定試験を受けて、その年から歌志内の神威小学校に赴任した」（原文のまま―『ひかりと愛といのち』―平成十年十二月、岩波書店刊）。また、「わたしの住んでいた神威の市街地にある家の二階から、真向いに神威岳が見えた」（前書）という。

実は、三浦綾子さんがわずか十六歳十一カ月の若さで、最初に赴任した歌志内の神威小学校は、「かむい」の読み方ではなく、「かもい」小学校」が正しい読み方であった。冒頭の文章は、随筆集『ひかりと愛といのち』の巻頭の『氷点』のこころ」の最初の文章で、初出の『女性自身』の昭和四十一年四月十八日号の「私はなぜ『氷点』を書いたか?」や、自伝小説の『石ころのうた』では、正しく「神威小学校」とルビが付されいる。「かむい」は、正確無比を誇る岩波書店の珍しい誤植である。

歌志内市一道路地図

歌志内市のシンボルの神威岳（四六七・六メートル）のスキー場や温泉などは、誤読を避ける意味も込めて、掲載道路地図のように「かもい岳」と仮名書きにしている。また、歌志内市のホームページでも、難読地名の読み方として、「神威＝かもい」と掲載している。

もう一つ、歌志内市の神威のエピソードを紹介しておこう。歌志内村は、昭和十五年四月一日から町制が施行された。その時点で公的には十八の字名のほか、土地台帳には、全部で約四十の字名があったといわれていた。複雑で事務上も支障が出るので、北海道庁に字名改正と地番整理を申請した。これを受けて、昭和十六年三月十三日、北海道庁告示第三百九号で、九つの字名が告示された。「神威」もその一つで、「カム平」とルビが付されていた。しかし、前述のように、現在まで、歌志内市では公的に「カモイ」の読み方のままで、北海道庁告示の「読み方」が守られなかった珍しい例である。

神居大橋と旧神居古潭駅

さて、三浦綾子さんのこれも自伝小説の『草のうた』に、函館本線の車窓から神居古潭を描写した場面があるので紹介したい。昭和七年、小学校四年生で初めて汽車に乗った時の回想である。今はサイクリングロードになっているが、明治三十一年から、昭和四十四年まで見られた、函館本線の鉄路からの神居古潭の景色で、見事な筆致で往時を彷彿とさせる。

「中でも、汽車の左眼下に蛇行する神居古潭を見た時は、この世にこんな綺麗な景色もあったのかと、姉にいくら突っつかれても、「わあ!きれいだあ!」「大きな石だあ!」と、つい叫んでしまうのだった。子供の私は、碧水という言葉は知らなかった。白い沫という言葉も知らなかった。澄んだ水が、ある場所では碧く、ある場所では煮え滾る湯のように岩を噛み、またある所では緑色の水羊羹のように静まりかえった深い淵を見せていた。ここが神居古潭と呼ばれる景勝地であることを、私は初めて知った。」（主婦の友社『三浦綾子全集第十二巻』所収『草のうた』）

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

断章

旭川のアイヌ語地名研究 ⑲

高橋 基

―旭川のカムイコタン⑯―

前回は、旭川のカムイコタンの表記は、松浦武四郎のカモイコタン表記から、神居古潭の漢字表記となり、永田方正によって、カムイコタン表記となって、明治二十三年に神居村が誕生したことを述べた。今回は反対に、カムイがカモイの表記になった歌志内市の場合を紹介する。

今年は、旭川市民の誇りである作家・三浦綾子さんの生誕九十年の記念の年である。三浦綾子さんは、「一九三九年（昭和十四年）、私は市立旭川高等女学校を卒業、小学校教諭の検定試験を受けて、その年から歌志内の神威小学校に赴任した」（原文のまま―『ひかりと愛といのち』―平成十年十二月、岩波書店刊）。また、「わたしの住んでいた神威の市街地にある家の二階から、真向いに神威岳が見えた」（前書）という。

実は、三浦綾子さんがわずか十六歳十一カ月の若さで、最初に赴任した歌志内の神威小学校は、「かむい」の読み方ではなく、「かもい」小学校」が正しい読み方であった。冒頭の文章は、随筆集『ひかりと愛といのち』の巻頭の『氷点』のこころ」の最初の文章で、初出の『女性自身』の昭和四十一年四月十八日号の「私はなぜ『氷点』を書いたか?」や、自伝小説の『石ころのうた』では、正しく「神威小学校」とルビが付されいる。「かむい」は、正確無比を誇る岩波書店の珍しい誤植である。

歌志内市一道路地図

歌志内市のシンボルの神威岳（四六七・六メートル）のスキー場や温泉などは、誤読を避ける意味も込めて、掲載道路地図のように「かもい岳」と仮名書きにしている。また、歌志内市のホームページでも、難読地名の読み方として、「神威＝かもい」と掲載している。

もう一つ、歌志内市の神威のエピソードを紹介しておこう。歌志内村は、昭和十五年四月一日から町制が施行された。その時点で公的には十八の字名のほか、土地台帳には、全部で約四十の字名があったといわれていた。複雑で事務上も支障が出るので、北海道庁に字名改正と地番整理を申請した。これを受けて、昭和十六年三月十三日、北海道庁告示第三百九号で、九つの字名が告示された。「神威」もその一つで、「カム平」とルビが付されていた。しかし、前述のように、現在まで、歌志内市では公的に「カモイ」の読み方のままで、北海道庁告示の「読み方」が守られなかった珍しい例である。

神居大橋と旧神居古潭駅

さて、三浦綾子さんのこれも自伝小説の『草のうた』に、函館本線の車窓から神居古潭を描写した場面があるので紹介したい。昭和七年、小学校四年生で初めて汽車に乗った時の回想である。今はサイクリングロードになっているが、明治三十一年から、昭和四十四年まで見られた、函館本線の鉄路からの神居古潭の景色で、見事な筆致で往時を彷彿とさせる。

「中でも、汽車の左眼下に蛇行する神居古潭を見た時は、この世にこんな綺麗な景色もあったのかと、姉にいくら突っつかれても、「わあ!きれいだあ!」「大きな石だあ!」と、つい叫んでしまうのだった。子供の私は、碧水という言葉は知らなかった。白い沫という言葉も知らなかった。澄んだ水が、ある場所では碧く、ある場所では煮え滾る湯のように岩を噛み、またある所では緑色の水羊羹のように静まりかえった深い淵を見せていた。ここが神居古潭と呼ばれる景勝地であることを、私は初めて知った。」（主婦の友社『三浦綾子全集第十二巻』所収『草のうた』）

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

13/01/08 (60) 旭川のカムイコタン(17)

断章
旭川のアイヌ語地名研究
60
高橋 基

前回、三浦綾子さんが、昭和十四年、わずか十六歳十一カ月の若さで当時の歌志内村の神威小学校の先生になったことを紹介した。

三浦綾子さんが亡くなる年の一月一日付けの三浦光世さんと、綾子さんのサインがある、写真①の『ひかりと愛といのち』(平成十年、岩波書店刊)を頂戴した。感激して、巻頭の一文を読むと、初めて赴任した学校名が、「神威小学校」となっている。このルビは、「かもい」が正しく、「かむい」は誤植であることに気がついたのである。旭川の人は、神居島・神居の関連で、「神威」は誤植であっても自然と受け入れることができるが、歌志内の人が読むと、憤慨するのではないかと心配をしていた。地名とはそういう存在なのである。名門出版社の岩波書店としては、珍しい誤植であった。

たまたま、旭川のカムイコタン表記とカモイコタン表記の問題を取り上げていた関係と、昨年は三浦綾子さんの生誕九十周年記念の年であったのでその最後の月に掲載させていただけたのは幸いであった。

歌志内市の字名の神威については、前回紹介したように、町制施行を機に、町役場名称を申請し、それを受けて、北海道庁当局で、「神威」と、わざわざ「カム」とルビを付されたにも関わらず、「カモイ」「かもい」と

―旭川のカムイコタン⑰―

「いずれにしても昭和十六年告示された『かむい』は、実際には使われておらず、もっぱら『かもい』が一般化して使用されていることは、まことに皮肉な現象で、地名などは、片の通牒や告示では、容易に変えがたいものをもっているということで興味あることである。」

②「旭川のカムイコタン探訪」

さて、自治体でカモイ系の呼称をしている代表は、積丹半島西部の神恵内村である。村名の由来は、カムイナイ(kamuy-nay 神・沢)によると言われ、神威内・神威恵内とも書いた。江戸期以来ニシン漁の手稲場所として発展し、明治二年と比較的早く村名となっている。北海道では歴史の古い方で、和人の命の呼称が、そのまま村名となった類型といえる。

このように、地名にまつわるエピソードを見ると、「地名は大地に刻まれた歴史である」という思いを深くする。私のアイヌ語地名研究の原点は、ここにあり、その信念のもとに研究を続けている。地名を研究するのは、正に地域の歴史の研究でもある。

右のような趣旨による、同好の研究者の集まりが、私の所属する、「アイヌ語地名研究会」である。この会では、毎年、アイヌ語地名研究大会を開催している。平成十八年六月十一日、第十回大会は旭川クリスタルホールで開催。アイヌ語学者の村崎恭子さんの講演があり、午後からは、バス二台を連ねて、「アイヌ語地名フィールドワーク…旭川のカムイコタン探訪」を実施した。写真②は、その時の記念写真である。参加者四名が多く、貸切バスを二台追加しての探訪は、前年の十六回目の大会であるが、最高の参加人数であった。それだけ旭川のカムイコタンは、歴史・景観ともに魅力のある所であるという証左でもあった。

次回からは、再びカムイコタンの個々のアイヌ語地名の地名解を開始します。シケウンナイから報告する。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

三浦綾子
ひかりと愛といのち

①三浦綾子さんのサイン本

13/02/05 (61) 旭川のカムイコタン(18)

断章
旭川のアイヌ語地名研究
61
高橋 基

―旭川のカムイコタン⑱―

今回から、再び個々のアイヌ語地名の地名解を検討する。前回の予告のように、シケウ＝ナイ(sikeu-nai=荷物を背負いしつづける・川＝「この川の所で丸木舟から荷物を陸揚げして、荷物を背負っていく所」の意味)から検討する。

久しぶりなので、初めての読者のために、掲載図②の「現・神居古潭」の地図を参照して、往時のアイヌ時代のカムイコタンについて、重要地名・事項を含めて概説させていただく。

アイヌ時代に上川に入るには、丸木舟で石狩川を溯り、現在の神居大橋の下流のハラモイ(para-moi=広い・湾)まで来て、ここから上流は激流のため、丸木舟では上れないので、ここで丸木舟から荷物を陸揚げし、荷物を背負い、約二㌔上流のハルンナイ(春志内)まで陸行し、ここからまた丸木舟に乗って上川の地に入ったのであった。神居大橋のある宮場あたりがシキウシパ(sikeu-us-i=荷物を背負いいつも・する・所＝場＝和語の「場」＝「荷物背負場」の意味)で、ここから丸木舟で上れない激流区間のハルンナイ(春志内)までの約二㌔が、カムイコタン(kamuy-kotan=神・村＝神のいらっしゃる所)とアイヌの人たちは尊称していたのである。

さて、今回のシケウ＝ナイは、明治三十三年三月にカムイコタンを調査した水田万正が、北海道庁から明治三十四年に出版した『北海道仮製地名解』で、初めて採録したアイヌ語地名である。この書は、アイヌ語地名を愛惜した初代北海道庁長官の宮村道俊と、二代目長官の永山武四郎との二人の命を受けて著述したと、その「緒言」で水田万正は明記している。また、この著書は、アイヌ語地名研究の必携の書、聖典とまでいわれているものでもある。水田万正は、この地名を右の書で初めて採録して、次のように説明した(ウ＝ュは水田独自の表記＝ウ)。

「シケウ＝ュナイ(sikeu-unai=荷ひ川)＝北の川より荷物を陸揚げして荷ひ行くを以てなり。樺戸郡愛別神居古潭出所ある処」

水田万正が初めて採録したシケウ＝ュナイが、これも上川郡初めての五万分一図である。掲載図①の明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』に記載されている。この地図はご覧のように川名や地名は片仮名書きのアイヌ語地名である。そのアイヌ語地名は少なくとも上川郡は、先の水田万正の『北海道仮製地名解』によっている。ただ、本連載の40でも指摘したように、図の左上の「レーコロフイラ(re-kor-pera=名を持つ・激流・有名な激流の意味)」は、水田万正は、ハルンナイ(春志内)より、さらに上流にある激流と書いている。ここの激流を水田万正は、カムイウッカ(kamui-uka=神・瀬)と書いている。どちらも『北海道仮製地名解』に記載されたものであるが、この地図には、位置が誤って記載されたのである。俵孝水田万正は、シケウ＝ュナイは、掲載図②の「ホロレフ＝ペ(moro-rep-un-pe=大きい・沖・についている・もの＝岩)の大岩より上流にあると記録し、掲載図①でもそのようになっている。

写真③のシケウ＝ナイ調査は、昭和六十一年に四人乗りゴムボートで、水田万正がシケウ＝ナイが、ホロレフ＝ペより上流にあるとしたので、丸木舟の遡航が可能かを調査した時のものである。その結果も含めて次回に報告する。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します

①明治三十年製版
「北海道仮製五万分一図」

②現・神居古潭

③シケウ＝ナイ調査

13/03/05 (62) 旭川のカムイコタン(19)

断章

旭川のアイヌ語地名研究

㊷

高橋 基

前回に続き、明治三十三年三月に、このカムイコタンを調査した水田方正が、初めて採録した「シケウ・ニュナイ（shike-ush-nai 荷物川）」此の川より荷物を陸揚げして荷ひ行くを以て名く。樺戸監獄雲神居吉丹派出所ある所」を検証する（前回も記したように、ウシュは水田方正の独自表記なので、以下、水田方正以外の表記では、シケウ・ナイと表記する）。

水田方正が明記しているように、この川は、樺戸監獄雲神居吉丹派出所のある処の川であるという。したがって、樺戸監獄雲神居吉丹派出所の位置が特定できれば、そこにある川がシケウ・ナイである。ところが、現時点で、樺戸監獄雲神居吉丹派出所の位置を特定できる公的な史資料が発見されていない。そこで、前回も掲載した明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』を見ると、水田の表記通りのシケウ・ニュナイがある。ただ、この地図は、前回も指摘したように、「レーコロフイラ（re-kor-puira 名を持つ・激流・有名な激流の意味）」の位置が誤って掲載されていたので、慎重に検討する必要がある。

以上の諸点を踏まえた上で、アイヌ語地名研究家の山田秀三は、『深川のアイヌ地名を尋ねて』（昭和五十二年刊）で、理解しやすいように、次のように解説している。掲載図の①②を参照してお読みいただきたい。

―旭川のカムイコタン⑲―

「そのシケウ・ナイ辿りのには、神居古潭の激流を相当遡らなければならない。安全の想、丸木舟では大変なことだと思って眠った。だが『行狩日誌』で見ると、シュマチセ（sumatise 岩・家）は、シキウシバ（シケウシ・荷物・背負場）」の位置の対岸だという。シュマチセの位置の方はわかっているのだから、『行狩日誌』で書かれたシキウシバは、今、吊橋（註・神居大橋）のある附近のことだったと理解してよいらしい。シケウシと呼ばれた一帯の土地の端にある川なのでシケウ・ナイと云われたのではなかろうか。」

そこで、前回、写真でお見せしたように、昭和六十一年七月末に、四人乗りゴムボートで、地図のシケウ・ニュナイまで遡った。急流・水量により左右されるが、この時は楽々と簡単に遡ることができた。路程の結果、シケウ・ニュナイまで丸木舟で遡る事は可能と判断することができた。

山田秀三は、「シキウシバ（シケウシ＝荷物背負場）は、吊橋（神居大橋）のある附近で、シケウシと呼ばれた一帯の土地の端にある川なのでシケウ・ナイと云われたのではなかろうか」と、水田方正の記録を肯定的に述べている。

確かに、この部分だけを見ると、この通りに理解できる。しかし、水田方正の原文、『北海道蝦夷語地名解』を見ると、このシケウ・ニュナイと、その下流にある掲載図②「ポロレプシペ（poro-rep-us-pe 大きい・沖・について・もの＝岩）」との間に、「イキテウシ（i-kite-ushi 陽場）＝荷物を陸揚げする処なり」を記録している。すなわち、ポロレプシペより上流に、イキテウシ＝（山田秀三の言う）シケウシがあり、そこにある川なので、シケウ・ニュナイという名称があると記述しているのである。ここは、知里真志保の地名解も混乱しているので、次号で解明していきたい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※四月第一週号に掲載します

13/04/02 (63) 旭川のカムイコタン(20)

断章

旭川のアイヌ語地名研究

㊸

高橋 基

今回も明治三十二年三月に、このカムイコタンを調査した水田万正が、初めて採録した「シケウ ニュナイ(zikeu nyu nai 荷ひ川)」—此の川より荷物を陸揚げして荷ひ行くを以て名く」について再検証させていただく。

今回は、まず、安政四年(一八五七年)に、アイヌの人たちの漕ぐ丸木舟で、掲載図②「現・神居古潭」のパラモイ(para-moi 広い・湾)に到着し、神居大橋のある(荷物陸揚場)のシキウシパ(荷物背負場)から、ハルンナイ(春志内)までの約三キロを実際に歩いた松浦武四郎の地名記録を「再録名辞書」誌でたどってみる。その上で、水田地名解や知里地名解と対比検討する。ただし、紙幅の関係で、ここでは掲載図①のオミムタルシナイまでとし、以下は省略した。

①明治三十年製版『北海道仮製五万分一図』

②現・神居古潭(二万五千分一図)

—旭川のカムイコタン⑳—

(1)ハラムイ=パラモイ
(2)シキウシパ…荷物背負場
(3)ポロレプペ=ポロレプペ
…川中に大岩一ツ有るなり
(4)ポンノミンタルマイ…
(5)ポロノミンタルマイ…等高峻々
(6)ヲナエルシ
…右の方より大岩一ツ出たり

これが松浦武四郎が記録した往時のカムイコタンの前半部分であった。

他方、水田万正の『北海道蝦夷語地名解』で、アイヌ語地名記載順(ここでは、川中と左岸のみ)を見ると次の通りである。

(1)パラモイ…広湾
(2)チャシコッ…砦跡
(3)レプニュペ…川中の岩
(4)イヤッテウシ…場場
(5)シケウシュナイ…荷ひ川
(6)ポンノオミンタルナイ…小庭川
(7)ポロオミンタルナイ…大庭川

次に、昭和三十五年の知里真志保の『上川郡アイヌ語地名解』の記載順を見ると、基本的には水田地名解を踏襲した上で、右の水田地名解の(3)レプニュペと、(6)ポンノオミンタルナイの間に、次のアイヌ語地名を記載している。

(ア)ニッネカムイ・オフオシマイ
…鬼の足跡
(イ)エムシケシ…刀・の端
(ウ)イヤッテウシ…荷物陸揚げ場
(エ)ペンチャイトッシコテンラ
…鵜巣岩
(オ)シケウシ
…荷物を背負い運ぶところ

水田万正が、「イヤッテウシ(iyatteusi 場場・荷物を陸揚する処なり)」を示ポロレプペの上流としたのは、松浦武四郎等の紀行からも誤りであるのは明白である。したがって、それに付随した、「シケウシュナイ(shike-ush-nai 荷ひ川)」の位置も誤りであるという。

明治十九年八月に、上川仮道路が完成する。これ以降は、松浦武四郎のようにアイヌの人たちの漕ぐ丸木舟によっての上川郡入りはなくなった。水田万正の誤解も、このような事情から生まれたものと推察される。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します

掲載地図②の「現・神居古潭」の神居大橋の位置にあることを明確化しながらも、水田万正の地名解に合わせて、ポロレプペの上流に記している。知里真志保が、自らのアイヌ地名表記のルールを破っているのである。

…荷物を背負い運ぶところ

本連載㊸でも指摘したところであるが、知里真志保は前書の「まえがき」でも、掲載地名は、下流から上流に向かって順次記述する旨明記している。しかし、右の(ウ)は、掲載地図②の

1/05/06 (64) 旭川のカムイコタン(21)

断章

旭川のアイヌ語地名研究

㊹

高橋 基

今回は、石狩川を七キロ遡って、上川のアイヌの人たちを訪ねようとした魔神・ニッネカムイ(nitnekamuy)を、文化神のサマイクル(samaykur)が征伐する伝説の前哨戦の「鬼の足跡」を紹介する。

前回は明治二十三年にカムイコタンを調査した永田方正が、「ポロレプ(poro-rep-un-pe)大きい神」について、「イヤッテウシ(i-yatte-ushi)掲場—荷物を降掲する処なり」があるとした説を誤りであると指摘した。それは、知里真志保が、昭和二十五年発表の「上川郡アイヌ語地名解」で、永田方正のカムイコタンでの地名記載法を踏襲していながらも、ポロレプシへの上流の★印の「鬼の足跡」の地名解を記載しなかったが、永田方正がこれを採録しなかったというのも、「永田イヤッテウシ説」否定の根拠の一つである。それでは、知里真志保の二つの伝説のアイヌ語地名の地名解を見てみよう(写真は大雪の一部上から撮影)。

①「ニッネカムイ・オラオ・ンマイ(nitnekamuy-o-raoro-un-mai 魔神がそこでぬかった所)—神居古潭の対岸(注—旧神居古潭駅側から見て対岸・左岸)の岩に深さ一丈(注—約三・〇メートル)以上もある穴があり、魔神が文化神サマイクルに追っかけられた時に踏みぬいた足跡だという」・「鬼の足跡」

②「エムンケ(emunke 刀の淵)—前記の穴のそばの岩の上に幾つもの柔痕があり、それはサマイクルが魔神に切りつけたときの刀痕だという」(いずれも写真参照下さい)

この後に、魔神・ニッネカムイは、文化神・サマイクルに追いつめられて、ハルンナイの上流で首をはねられるのであるが、この伝説を最初に記録したのが松浦武四郎である。

—旭川のカムイコタン㉑—

安政四年(一八五七年)、松浦武四郎は、カムイコタンを通る時に、持参した野帳(フィールドノート)に、写真のように「鬼の足跡」の絵を描き、次のように、メモしている。この当時は、ニッネカムイは、魔神とは表現していたことがわかる。

「ヲノエルシ—此二つ石に鬼が両足を入れしと云、凡巾三尺七八寸(注—約一・一メートル)、深さ一丈七八尺(注—約八・四メートル)二つは水干る時は顕て見ゆる、又其上に刀の切跡と云十文字の印味有、其上に又手を懸し跡有」

と云大なる跡有(写真の左側の穴は武四郎の記述通り、下まで突き抜けている)

松浦武四郎は、帰府への報文日誌の「再巡石狩日誌」では、頭注に添画とともに、野帳とほぼ同文で記述している。また、一般向けに本格刊行されたダイジェスト版の「石狩日誌」では、次のように記述している。

「ヲノエルシとは右の方に差し出たる大岩の上に座し、アイヌ等其下の過ぎたる後に其鉛遣う所なりと傍に鬼の足跡(ニイツイカモイ)と云て凡三間半の井の如き穴三ツ程有、深さ何れも一丈余、又極に五六間を過てエモシケシと云は、山蔓カモイ、鬼(ニイツイカモイ)を切らんとして此処に刀先を切込し所と云」

この「鬼の足跡」という岩穴は、「鍋穴」と言われるもので、岩盤の窪みや渦れ目に入った小石が、川の激しい水流で回転し、長い年月をかけて岩石を削ってできた円筒形の穴をいう。ここから下流一・二キロにわたり、神居古潭鍋穴群として、旭川市指定文化財(天然記念物)となっている。この鍋穴に、「鬼の足跡」伝説が発生したのである。

なお、松浦武四郎が採録したヲノエルシ(ヲナエルシ)は、アイヌ文化研究者によると、「オノイエルウシ(o-noye-ru-ushi そこで・足をとる・跡所)・オノエルシ(o-noye-rushi)」と読めると教えていただいた。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※四月第1週号に掲載します

「鬼の足跡」の大岩

野帳『巳第二番』

現・神居古潭(二万五千分一図)

13/06/04 (65) 旭川のカムイコタン(22)

断章

旭川のアイヌ語地名研究

65

高橋 基

―旭川のカムイコタン㉒―

前号で、カムイコタンの中心的な伝説の「鬼の足跡」を紹介した。今回は伝説の発端から、魔神あるいは魔神といわれたニッネカムイが、文化神サマイクルに征伐されるまでの壮大な伝説を、地図を参照しながらアイヌ語地名解で眺めるつもりだ。ただし、伝承者によって多少内容が異なるが、諸説勘案して紹介する(○番号と地図○は同一)。

伝説の発端は、魔神ニッネカムイが、上川アイヌの慰役を企てて、山の上から大岩をカムイコタンの狭流に投げ込み、石狩川を塞き止め水攻めにしようとした。魔神ニッネカムイが川を堰き止めた川幅一杯に浮んだ大岩が、①テン(ten-ko-ro 岩屋)である。明治二十三年にカムイコタンを調査した永田方正は、次のように地名解をした。

①「川中」テン(ten 岩屋)―川中に数十の大岩乱立して殆んど滝の如し。故に名く。アイヌ云、魔神岩を以て岸となし、此河水を止む。神あり鬼を殺し岸を裂き、水を通流せしむと」

この川中の大岩を山のカムイの熊が一部を壊し、応援に駆けつけた文化神サマイクルが、これを破壊して水が流れるようにした。その上、ニッネカムイと激闘の結果、劣勢の魔神ニッネカムイが、②のクッネシリ(神居岩)に逃げ込んだ。

②「石屋」クッネシリ(kut-ne-siri 岩屋をなしている山)―神居古潭のトンネルの上にあるる山。義経山。(註・現称は神居岩)

石は、当連載45で紹介した、昭和三十五年の知里真志保の地名解で、知里はこの山は、文化神サマイクルの砦だったと書いている。他方、伝承者によっては、ここは魔神ニッネカムイの砦であって、ここから大岩を投げ込み石狩川を堰き止めようとしたという。ところが、文化神サマイクルがそれを壊し、その上で、サマイクルはニッネカムイを征伐しようと戦いになり、サマイクルの圧倒的な力に、ニッネカムイはたまらずにこの砦に逃げ込んだという。サマイクルはなおも追いかけてこのクッネシリでニッネカムイを捕まえて、ここから魔神を蹴飛ばしたところ、ニッネカムイは遠かトの石狩川の中の岩場の③で、両足がズボッと抜かり、なおもそこから逃げだそうと手る前を、追ってきたサマイクルが切りつけたが、魔神に当たらずに岩の上に十文字の切り創を残した。それが前回紹介した「鬼の足跡」とエムシケン」である。「知里地名解」を再掲させていただく。

③「左岸」ピ「ニッネカムイ・オラオンマイ(nitnekamuy-o-raesmai 魔神がそこで・ぬかった所)・「鬼の足跡」

(2)「エムシケン(emus-ken 刀の端)―サマイクルが魔神に切りつけたとき、その刀傷だという」

ここからなおも文化神サマイクルは、魔神ニッネカムイを追いかけて、現在の神居第三線川の辺で、とうとうニッネカムイはサマイクルに背をねじられ、④魔神の大きな体は左岸の大岩になって残り、⑤首は対岸に飛んで岩となったという。「知里地名解」では、岩になった個々のアイヌ語名を次のように記し、魔神の最期を伝えている。

④「左岸」ピ「ニッネカムイネトパケ(nitnekamuy-netopake 魔神・の胴体)」

(2)「ニッネカムイパケ(nitnekamuy-pakehe 魔神・の頭)―胴体の上の岩という。

⑤「右岸」「ニッネカムイノッケウェ(nitnekamuy-notkewe 魔神・のあご)―別称、鬼の首」

写真は、国道十二号線拡張のために、魔神の胴体に、昭和五十四年、ニッネカムイ覆道が作られ、伝説の岩が新く保存されたもの。

次回も伝説の端緒となったテン(ten 岩屋)について、大塩川のそれを含め詳述したい。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

魔神の胴体―平成3年3月―

13/07/02 (66) 旭川のカムイコタン(23)

断章

旭川のアイヌ語地名研究

㊻

高橋 基

―旭川のカムイコタン㉓―

旭川のカムイコタンの鬼神あるいは魔神といわれたニッネカムイと、文化神サマイクルの壮大な伝説の発端のテシ(ｔｅｓｈｉ 岩壁)について、最初に記録したのは、明治二十二年に上川を調査した永田方正である。掲載地図の①の石狩川の川中の地名解を再掲する。

①【川中】テシ(ｔｅｓｈｉ 岩壁)―川中に数十の大岩乱立して殆んど愛の如し。故に多くアイヌ云、鬼神岩を以て愛となし、此詞癸を正む。神あり鬼を殺し愛を愛ら、水を通流せしむと。【註:永田の表記はテシ(ｔｅｓｈｉ)】

写真のテシ現況は、右岸から上流に向かって撮影したもの。左岸の背後に見えるのが、「岩見大橋」で国道十二号線を西車線にするために作られたキロメートル余の橋梁でこのためすっかり景観が変わった。

掲載図の左岸の神居第五線川は、明治三十年製図(北海道仮製五万分一図)では、テシキオマナイとなっていて、この川に架かる橋の名が、このテシを見る絶好の場所の意味で「岩橋」と名付けられていた。永田方正は次のように地名解をしている。

「テシキオマナイ(ｔｅｓｈｉｋｉｏｍａｎａｉ―ｔｅｓｈｉ 岩壁に接する川)―岩壁の左辺へ流れ入る川なれば名づく(川向にも同名の川あり【註:江丹別第八線川】)。此川の橋を岩見橋と云ふ」

さて、安政四年(一八五七年)に踏査した松浦武四郎は、③「鬼の足跡」や鬼の首では、伝説を記述しているが、その伝説の端緒となったこのテシでは、一切触れていない。写真のように、野帳の「巳」の「巳第二番」に、「テシホ」とスケッチを描いているのみである。

また、武四郎は、幕府への報文日誌の「再篇石狩日誌」では、頭注に野帳のスケッチ

「巳第二番」テシホ

「テシ現況」

者共通しているのである。現在は、美深町の「森林公園びかがアイランド」の古川の部分となっている。

文化四年(一八〇七年)に、利尻・礼文の巡見の帰途、大塩から大塩川を遡った近藤重蔵は、後にテシと言われるこの場所で、次のように西蝦夷地(樺太経)伝聞を記録している。

「ペシパルホツプ―直、此邊鬼住居シ、魚上アサルナウニセシラ、判官来リ玉ヒ、殺シ玉フト云【註:説話は筆者が付した】」

近藤重蔵の五十年後に、同じ場所で、松浦武四郎は、報文日誌の「大之穂日誌」で、大塩川の名の「テシ尖(大塩)」はここのテシから起こったと次のように記している。

「テシ―此処両岸平山なるが、大岩両方より出来りテシの形に成りたり。むかし鬼神が作りしと云り。此川の惣名テシホは此処より起りしなと言へり」

大塩川のテシは、名寄の伝承者の北風磯吉翁は、「普通は見えないが、川水が減水すると現れて見える」(アイヌ伝説集)と述べている。筆者はアイヌ語地名研究家の山田秀三氏の指示を受けて、このテシを最末までの長靴を履いて、実際に横切ってみた。北風磯吉翁のいう川水が減水した状況でもあり、岩の上を歩いて渡ることが出来たのであった。同じ伝説を持ちながら、荒々しい石狩川とは全く違うのどかな景観であった。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週目に掲載します

13/08/06 (67) 旭川のカムイコタン(24)

断章

旭川のアイヌ語地名研究

⑰

高橋 基

―旭川のカムイコタン㉔―

前回、大塩川のテシ（nisi=岩壁）を見たが、文化四年（一八〇七）に、近藤重蔵は、大塩川のテシは、「鬼が魚を上らせないようにするため作ったが、判官（源義経）が来て、それを覆した…」と、文化期には、大塩川には、義経伝説があったという貴重な記録を残した（『蝦夷地日記』）。

安政四年（一八五七年）に松浦武四郎は、近藤が「鬼」と書いたのを、旭川と同じ、鬼神（nitnekamuy）と具体的にし、明治十二年生まれの名寄地域の伝承者の北風磯吉翁は、「魔神が作ったテシを覆したのは、『文化神のサマイクルカムイ』（更科源蔵『アイヌ伝説集』）であった」と伝えた。

このように、テシに関しての伝説を見ると、アイヌ時代の往時、石狩川上流と大塩川上流には、密接な交流があったことを物語っている。

大塩川の伝説は、テシ伝説以上に進展しないのであるが、旭川のカムイコタンでは、ニッネカムイが、サマイクルに匹をはめられるところまで発展する。

当連載65では、昭和二十五年の知里真志保の地名解で紹介したが、今回は最も古い松浦武四郎の記録で、安政期の伝説の地を見ていただく。

まず、掲載図の石屋❸には、神に切られた、**鬼の首**の岩がある。松浦武四郎は幕府への復文日誌の『丑満石狩日誌』で次のように書いている。

「ニイツイカモイ―左（注―上流に向かって左＝石屋）の方に、高さ二丈計（約六・一㍍）の人の首の如き岩有り是を**鬼の首**なりと云ふ。アイヌ等此前へ木幣を削て奉る。ニイツイとゝふは鬼の事也。カモイは神也。其鬼此処まで上り神と合戦をして、神に負けて切られし首なりと申し伝えたり。此辺り腰のまたは殿のと申すまゝの岩有」

写真(3)は、松浦武四郎がこの調査に持参した野帳（フィールドノート）『巳第二番』の一番のスケッチで、左に見える「ニツニカモイシャハ（nitnekamuy-sani=鬼の・頭）」が「**鬼の首**」で、特徴が酷似している。写真(1)は、その現在の姿で、大きさがわかるように筆者も前に座って写したもの。武四郎のスケッチと比較すると、「**鬼の首**」の下部が土砂で埋まっている。安政期の石狩川を知る重要な手がかりである。

写真(2)が、掲載図❹の左岸の「**鬼の鼻**」である。国道十一号線の拡張工事で、「**鬼の鼻**」の大岩が破壊されるところを、「ニッネカムイ説」を作り、アイヌ伝説の岩が残り保存されたもの。

写真(4)は、『丑満石狩日誌』の添え画で、(3)の野帳のスケッチを元に描いたもの。松浦武四郎の直筆である。「**鬼の鼻**」については、武四郎は右の日誌で、次のように記述している。

「カモイ・ト・パケ（nitnekamuy-to-pake・**鬼の・鼻**）―山岸に高さ七八丈（約一十一・二十四㍍）の大岩、ツイ有是はニイツイカモイの躰の出也。子トパケは場と云事。此処も急流なるが故に、両人は岩の上乗り、四人にて棹さし上ぐる也。」

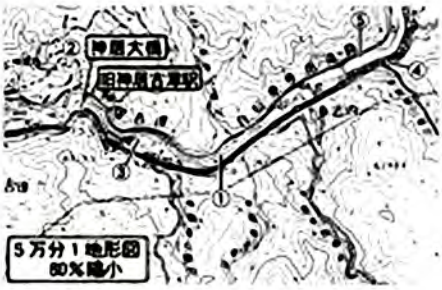
写真(4)の下に「丸木舟」と記した所は、「**鬼の鼻**」の下流の激流を、アイヌの人たちが、苦労して上流へ向かう様子を、松浦武四郎は――線部の通り忠実に絵に描いている。文文とあわせて、往時のカムイコタンに思いを馳せていただきたい。（アイヌ語地名研究会幹事）

（1）鬼の首

（2）鬼の鼻

（3）『巳第二番』

（4）『丑満石狩日誌』



※毎月第1週に掲載します

断章

旭川のアイヌ語地名研究

㊽

高橋 基

―旭川のカムイコタン㉕―

旭川のカムイコタンのニッネカムイ伝説は、掲載図には載まらず、掲載図◉の「ニッネカムイネトパケ(nittnekamuy-netopake・鬼神の・鼻)」から、約一五㌔上流の左岸の写真⑥のトゥレップサラニプ(turep-sarani-p オオウバユリの球根―を入れた一手さす鉢と言われた伝説の大岩まで続くのである。

安政四年(一八五七年)に、この大岩を見た松浦武四郎は、これはニッネカムイが落命する時に捨てたサラニプ(手さす鉢)でそれが岩と化したものと聞き、「東蝦夷日誌」に次のように伝説を書きとめた。

「トレップサラチフ―大岩一ツ有(註上流に向かって右―左岸)の川岸に突出す。トレフは則(蝦夷語)鉢、松前方言ウバユリと云、京都辺の山にてはガワユリ、また一名鬼かくれ白合と云もの也、鬼の鉢(註アイヌ語)是を下レフと云、山中の雪蔵、噴料に大抵是を掌るもの也、むかし其トレフをサラチフと云ものに入れて、此処まで二イツイカモイ持ち来り、此処にて命終りて捨てたるが、石に化せしと云処也。サラチフは次に図する如し(写真⑦)。アイヌ等山に行く、または川に行く時、噴料其外の具等を入れて持ちけるもの也。本邦にてコタシ(註・小出し)フゴ(註・籠)等云もの也。樺皮(註・樺の木の皮を作った系)にて駄ごと用ゆ。」

写真⑥のの大岩は、武四郎が描いた写真⑦のサラチフ(手さす鉢)に似ていて、実はこれはニイツイカモイ(nitu-kamuy・鬼神)が、捨てたものが、石と化したものだという。

松浦武四郎が書いた、ダイジェスト版の「石狩日誌」の記述は次の通りであるが、この中で鬼神ニイツイカモイの伝説を口外することは禁忌、タブーであったと明らかにしたのは、当時のアイヌの人たちの慣習を知る上で、貴重な資料となっている。

「トレフサラチフと云は、彼鬼神の携へ居たりし蝦夷語(トレフ)―和名鬼かくれ白合という―を入れし鉢(サラチフ)の化石なりと、想て此鬼神には種種の経歴も有りしが、アイヌ等他に語ることを禁せりとかや。」

さて、昭和六年発行の近江正一著『伝説の旭川及其附近』でも、同じ伝説が簡潔に記述されているので、最後の部分のみを記載する。

「…そしてニチエネカムイの首は岩となり、ニチエネシャパ(鬼の口)となり、胴体は立岩ニチエネとなり、持ってゐたフゴ(籠)は化石となってトレップサルネップとなった。トレップはうば百合、サルネップはフゴの意である。」

ところが、昭和二十年に、鈴沢クラさんの母の川村ムイサシマツ姥伝として、この大岩は、ニッネカムイではなくサマイクルカムイの忘れ籠という伝承が、更に補強により次のよう紹介された(『北海道伝説集・アイヌ篇』・文章はアイヌ伝説集によった)。

「サマイクルカムイの漁をする小舟が、今も伊福(註・伊納)の駅の近くに岩になっている。それから姥百合を入れた籠は、鬼神のものではなく、サマイクルカムイのもので、その籠を忘れて行ったので、附近には今も姥百合が沢山とれるのだという。」

伝承者によって、伝説も変わるという典型の一つである。同じように、昭和三十五年に、知里真志保も、伝承者は明記していないが、写真⑥の大岩は、サマイクルの手さす鉢として、次のように地名解を書いている。

「サマイクル・トゥレップ・タ・サラニプ(sapuykur-turep-ta-sarani-p サマイクルが・ウバユリを・掘った・手さす鉢―これも岩と化して今も岸に近い河中に立っている。」

写真⑥のトゥレップサラニプの大岩の位置は、別頁の掲載図で明らかにしたい。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1・3週に掲載します

(1)トゥレップサラニプ

(2)「サラチフの図」

13/10/01 (69) 旭川のカムイコタン(26)

断章

旭川のアイヌ語地名研究

㊾

高橋 基

—旭川のカムイコタン㉖—

旭川のカムイコタンのニッネカムイとサマイクルカムイの伝説は、掲載地図の②のクッネシリ(kut ne siri 岩崖をなしている山・現称・神居古潭)から、約九七㍍上流の前回紹介したトゥレッサラニッ(turep-sara nit オオウバユリの球根—を入れた—丸(寸胴)といわれた大岩を経て、掲載地図には収まらないほどの巨大な伝説である。

最上流のトゥレッサラニッ(turep-sara nit オオウバユリの球根—を入れた—丸(寸胴)の大岩の名になったトゥレッ(turep オオウバユリの球根)は、キコウジニンニクと共にアイヌの人たちの重要な食料で、バルイッケッ(baru-ikka 食料・の搾り)・大切な食料・といわれていたそれだけに、昔方とも、アイヌ語地名としても全国的地・残っている。

写真(1)のオントゥレッアカム(on turep-akam 風化した・オオウバユリの球根・の円盤)は、その代表的な保存真である。写真のものは、十度・十年前に、杉村フサさん(81)に作っていただいたもの。旭川市の郊外にトゥレッ(turep)を採りに行くその時著を、一片ずつはがして水洗いし、それを円に入れて柱で突き、ドロドロ状態のものを缶で蒸して、番粉を採る。残ったでんぷんと繊維質を固めて円盤状にして、柱で中央と縁周に穴を開け、乾燥化する。出来あがったものに、中央の穴に紐を通して吊し干しし、保存食とした。のである。

さて、昭和三十五年に、知里真志保は、右の伝説の大岩の下流、松浦武四郎や水田方正も記録していない初出の伝説の岩の地名解を次のように書いている。

「サマイクルイメ ケッケ(zamiku-i-mek-arke サマイクルの・残した食物の平分・文化神の食べ残した食物のかけらだというのが岩に化してなお路傍にある」

知里真志保が記録したこの伝説の岩は、かなり調査したが、発見出来なかった。後述するが、知里真志保は、レーコロフイラ(re-kor-puira 流・有名な(激流)の下流、トゥレッラニッの伝説の大岩を書いていて、これ自体が位置の誤りなのであるが、写真が添えられていたので判明した。しかし、サマイクル・イメ・ケッケは、「路傍」とあるので、道路工事で破壊されたのかも知れない。

写真(2)の「伝説の岩二つ発見」は、昭和四十五年八月一日、日付けの新聞記事である。この新聞記事のコピーは、杉村フサさんのご主人の故・杉村満さんからいただいた記事内容は、杉村満さんの父の民間カンシャトクさん(当時78)と、弁井シャスレさん(当時78)のお二人が、旭川市教委と旭川市立郷土博物館の依頼で、「神居古潭の奇岩にまつわるさまざまなアイヌの伝説を、現存の古老に遺跡ハトロールしてもらう」という企画で、「伝説の岩二つ発見」との見出しで報道された。

その一つの岩は、今はないというは注)の旭川寄りの本の縁に隠れて見落としがちの「鬼のすね」で、実際の形はあまり似ていない伝説の岩である。

もう一つの岩は、「鬼の見台」で、掲載新聞の写真の上部に●印が付き出ている。これは、掲載地図の④の「ニッネカムイネトハケ(nitne-kamuy-neto-hake 魔神の胴体)の笠端部分であることが分かる。当連載の65でも述べたが、国道一号線の拡張工事で、ニッネカムイの胴体の大岩が破壊されるところを、杉村満さん等の旭川アイヌ協会の強烈な陳情で、昭和五十四年に、「ニッネカムイ復活」として、その姿を残せたのは、幸いであった。

杉村フサさんは、この大岩の前の石狩川に、ゴツゴツと見えるのが、ニッネカムイの「あばら骨」である—と、尾沢カンシャトクさんから直接教えられたと語られた。ニッネカムイ伝説の最後の正統な伝承であろう。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1・3週に掲載します

(1)オントゥレッアカム (2)「伝説の岩二つ発見」

13/11/05 (70) 旭川のカムイコタン(27)

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑦⓪
高橋 基

これまで六回にわたり、ニッネカムイとサマイクルカムイの伝説の岩を中心に紹介してきた。今回からは、再びあの「魂の足跡」から上流へ向かいアイヌ語地名を見ていきたい。

安政四年(一八五七年)に松浦武四郎は、神居大橋付近のシキウシバ(荷物置き場)から、ハルシナイまでの約三キロを、カムイコタンと云、また、シユホロともいう。シユホロは両方峨々として、中を水の落る処と云事也。カモイコタンとは神が有る処と云事也。と「再高日誌」に書いた。

今回は、掲載地図に加え、昭和五十五年撮影のシキウシバからハルシナイまでの航空写真を載せた(旭川開発建設部刊行)。約三キロのカムイコタンは、アイヌの人たちも、この区間だけは、丸木舟で航行できない、石狩川最大の難所であった。川幅が狭い、両岸は巨岩・奇岩の連続で、その間を激流が流れている。こんな難所には、神様がいらっしゃるというので、カムイコタン(神の・居所)の尊称となった。別称がシユホロ=スホロ(suo-ho 激流の所)で、実際に歩いてみると、松浦武四郎が「シユホロは両方峨々として、中を水の落る処と云事也。」と書いたのが実感できる。航空写真で、その険隘な流路がお分かいただけると思われる。

このカムイコタンの左岸のほぼ中間に、神居第六線川があり、アイヌ語名は、ポロオミンタルナイである。航空写真でもわかるように、ここはカムイコタンの中で、唯一、左岸の山際から石狩川までの間が広い場所である。この広い場所を松浦武四郎は、ミンタル(eintar 庭)と記述している。また、明治・十四年に永田方正は、「ミンダル(eindaru 庭庭)」と書き、昭和三十五年に近里真志保は、「カムイミンタル(kamuy eintar 神々の遊び場)」と表記した。

さて、先に見た神居第六線川のアイヌ語名はポロオミンタルナイで、その下流の対をなす小さな川が、ポンオミンタルナイ(通称・砂金沢)である。明治時代の永田方正と、昭和時代の知里真志保の地名解をそれぞれ紹介する。

カムイコタン航空写真

―旭川のカムイコタン㉗―

【明治の永田方正の地名解】

○ポンノオミンタルナイ(pon-no-eintaru-nai 小庭川)―「ポンノは小なり、「オ」は川尻なり、「ミンダル」は庭なり、「ナイ」は川なり、此川尻の側に流の平地あり故に名く。

○ポロオミンタルナイ(poro-eintaru-nai 大庭川)―此川尻に広き庭あり、故にかく。此川に隣あり、第二十四図と同じ。

【昭和の知里真志保の地名解】

○ポンオミンタルナイ。小オミンタルナイ川の義。次項参照。

○ポロ・オミンタルナイ。大オミンタルナイ川の義。「オミンタルナイ」(o-eintar-un-nay 川尻に・神々の遊び場・ある・沢)アイヌは大小二つの川が並んでいる時にそれを親子と考え、一方にポロ(poro 親である)「大きい」を、他方にポン(pon 子である)「小さい」を冠することがよくある。この場合も、「親である・オミンタルナイ」「子である・オミンタルナイ」が原義である。

安政時代の松浦武四郎は、神居第六線川の伝承ではなく、カムイコタン唯一の開けた場所として、ミンタルオマイ(eintar-o-mai 庭・ある・所)と伝承を記述したものとのと推量する。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します

13/12/03 (71) 旭川のカムイコタン(28)

断章

旭川のアイヌ語地名研究

⑦①

高橋 基

―旭川のカムイコタン㉘―

今回は掲載地図の①テ（tes＝岩梁）とその前後の二つのアイヌ語地名を解釈し、次回はカムイコタンの最後のハルシナイで、カムイコタンの結びとしたい。

まず、テ（tes）の下流にあるサメ（ピリ）であるが、以下は安政四年（一八五七年）にカムイコタンを調査した松浦武四郎の『丑歳石狩日誌』の記述である。

「サメ（ピリ）―此処南岸に出たり。其間十七、二間（約一十二、三メートル）、獅子吼とも云処なるべし。サメは高岸に木をわたし、其上に居て魚を捕ることを云也。サメは橋の様成るもの也。ピリは水の澁まる事を云也。此下、水澁をなすが故に云也」

武四郎の記録から、サメ（ピリ）（sa-mi-piri 柵・にごりついている・澁）―柵のトの澁巻きと読める。掲載図①の「テッシ」の中央が、テ・サン（tes-san 梁・台＝柵）で、この台の代わりに木が渡してあり、そのトが澁が巻いていて、ここでは「sa 剛」が、「（sa 流し網）で魚を捕る場所である」（同前）

他方、松浦武四郎がテの上流にあるというルイカウシについては、次のように書いている。

「ルイカウシ―右の方大岩の上をこゆる故、此辺木喰多し。こへて少し平地ありて、魚を出たり。」（同前）

ところが、翌安政五年（一八五八年）に、松浦武四郎は十勝越えの際に再びカムイコタンを通過するこの時は、「ルイカは橋、ウシは有るところ也。此処岩上神が橋を掛んとして両方より大岩をつき出しる処と有り。」（東部踏査日誌）と、「ルイカウシ（ruyka-ush 橋・ある・所）は、神が橋を掛けようとして両岸から大岩を突き出した所だ」という。

このテの下流と上流の二つのアイヌ語地名については明治の水田方面も、昭和の知里真志保も触れていない。明治・大正時代には既にこのような伝承が途絶えていたのであろうか。なお、実際に和人現地調査をしたが、この二カ所の場所の特定は出来なかった。

さて、当連載の㊱で、既に松浦武四郎のテに関する記述を紹介した。このテは、ニッネカムイとサマイクルカムイの闘争伝説の発端であったところが、松浦武四郎は、このテについてのことに、一切触れていない。

これは、当連載の㊱のトゥレッサラニ（turep-sarani オオウバユリの球根・）を入れた「ピ（pi 澁）の項で、松浦武四郎が、聚と此吸神には種の縁故も有りしが、アイヌ等他に語ることを禁ぜりとかや。」（『石狩日誌』）と述べているように、当時の道案内のアイヌの人たちは、伝説の発端とは、松浦武四郎には語らなかったためと思われる。

それ故、松浦武四郎は、テッシと云は魚を捕る場也。其が岩と出来たりと云事也。其間大滝に成たり。しばし行立して魚類の飛上るを見るに、如何にも見事也。」（『東部石狩日誌』）と記述、武四郎が見参した野帳（フィールドノート）の「日第二番」でも、同じ内容が簡潔に記されて掲載図①のテッシの図と、もう一枚は網をテに誘導してアー（sa 流し網）で網を捕る絵が描かれている。あくまでもテの現況に終始している。

なお、先の文に見えたその間大滝に成りたりの武四郎の野帳のスケッチが、掲載図②のテシホで、掲載写真③は、武四郎と同じ岸の川岸から撮影したテ全景である。逆巻く急流と轟音は、冬期間、夕張川も同じ。カムイコタン（神の・所・所）の尊称が実感できる絶景である。（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

①『巳第二番』―「テッシ」

②「テシホ」

③テシ全景

連載
旭川のアイヌ語
地名研究
㉙

高橋 晶

—旭川のカムイコタン㉙—

今回は、カムイコタンの最上流の地（地図のハルシナイ）を通して、アイヌ語地名解釈も時代によって推移することを見ていきたい。

上川から丸木舟で石狩川を下ってきたアイヌの人たちは、ハルシナイで丸木舟を止めて、ここで荷物を陸揚げし、ハルシナイから荷物を背負い、現在の神居大橋周辺のシキウシバ（荷物背負場）まで運んだ。丸木舟はそこにしばらくとどまったり、シキウシバから別な丸木舟に乗り換えて石狩川を下った。ハルシナイから下流約三㌔は、急流怪石で川幅が狭く、難流となっていて、丸木舟でくることは不可能であった。それで、アイヌの人たちは、この間をカムイコタン（kamuy kotan 神の居所）と尊称していた。

安政四年（一八五七年）、松浦武四郎は、丸木舟でシキウシバに着き、そこから約二㌔を歩き、このハルシナイから別の丸木舟に乗り、上川に向かった。その時に持参した野帳（フィールドノートの原型）に、次のように書いている（写真①）。

「ハルシナイ—石狩小川、幅六間
ハルシナイ—石狩小川、幅六間（約十九㍍）計公道出。ハルは食物の事也、此処よりのちゝ名も、此処より飲料水なるが故に名る也。柳の木有。此ドルしの平地有。然て此処に正宿す。シキウシバより此処まで六キロ。カムイコタンと云也。此間凡一里（約三・九㌔）と公なるとも少し遠し。」

一般的にハル（haru 食料）は、食料を意味するが、知里真志保の『地名アイヌ語小辞典』では、ハル（hare）—食料とともに携帯用の食糧（弁当）を意味する。

すると、松浦武四郎がアイヌの人たちにハルシナイの意味を教えられたのは、ハルシナイは丸木舟から荷物を背負い上下するところなので、弁当をいつも置いている川の意味で、ハルシナイ（haru usi nay 携帯用食糧—弁当がいつも置いてある川）との意味だったのであろう。

明治十九年八月、上川郡初の道路の上川仮新道が完成する。これによって丸木舟での往来がなくなり、明治二十三年に永田方正はハルシナイを調査し、次のように地名解をした。

「アルウシュナイ（aru ush nai 鱒川）—鱒をアルとふぶ。大川（注・石狩川）の上り（注・過の岸に丸小屋を作り、魚を捕り此のアルウシュナイより陸揚げし食料に備ふ。故に此名あり。存志内とあるは、上川アイヌの語にあらず。」

上川のアイヌの人は、ハル（haru 食料）の「h」を落として発音するので、この川は、アルウシュナイと、存志内というのは、上川のアイヌの人の発音に合致しないので、上川のアイヌの言葉ではないと断定する。これを受けて、地図②のように明治三十年の陸地測量部の北海道仮製五万分一図では、永田方正の表記—アルウシュナイを採用している。しかし、松浦武四郎の記録を始め、旧記・旧図の大部分が、ハルシナイの表記なので、永田の指摘は妥当ではない。

昭和三十五年の知里真志保の地名解を見ると、丸木舟時代のことは、全く忘れ去られた解釈となっている。

「存志内（はるしない）ハルウシナイ（haru ush nai 食料をくべる沢）—ハルシナイ、アルウシナイ、アルシナイなどともいった。この沢の奥にはウバユリやキロウジャニンニクなどの食料植物が群生していたのでこの名がある。」

アイヌ語地名研究家の山田秀三氏は、旧記にこそ真実があると説かれた。このハルシナイもその典型で、松浦武四郎が記録したハルシナイ（携帯用食糧—弁当がいつも置いてある川）が、本義だったと思われる。

(1)ハルシナイ　(2)アルウシュナイ

（アイヌ語地名研究会会員）

※四月号～翌年三月号に掲載します

14/02/04 (73) 旭川のカムイコタン(30)

旭川のアイヌ語地名研究 ⑬

高橋 昌

―旭川のカムイコタン㉚―

掲載地図の「ハルシナイ」について、前回は、安政四年(一八五七年)に、松浦武四郎が幕府への報文目誌の「丑蝦夷日誌」に、案内のアイヌの人達から聞いた、「ハルシナイ―ハルは食物の事、此処下るものも下るものも、此処えぬ飯料置処なるが故に下る也」と、貴重な記録を残してくれたことを紹介した。

すなわち、ハルシナイ(春志内川)から下流の石狩川は、カムイコタンと言われる激流のために、約二㌔下流のシキウシパまでは、丸木船では下ることが出来ず、必ずここから荷物を背負い、シキウシパまで苦労して歩くのであった(下る場合も同じ)。ハルシナイ(春志内川)は、そのような位置にある川だったので、「ハルシナイ(haru snay・―haru-us-nay 携帯用の食糧―弁当がいつも置いてある川)」が、本来の地名解だったのである。

私たちはこの真実を、「丑蝦夷日誌」が公開されて初めて知ったのである。松浦武四郎は、郷土地のことを、広く知ってもらうために、ダイジェスト版ともいえる木版本の「石狩日誌」や「十勝日誌」を、文久元年に刊行した。「石狩日誌」では、ハルシナイについては、次の記述のみで、ハルシナイの由来地名解には、全く触れていない。

「過てハルシナイといふに出る(シキウシパより凡一・二十、此間をカモイコタンと云―此所にて少し激流なりて、丸木船も五六艘備あり。故に是より又用いて上る也」

また、前回紹介した永田地名解や知里地名解は、恣意的には正しい解釈であったとしても、丸木船時代のハルシナイ(春志内川)の由来ではなかったのであった。

さて、この由緒あるハルシナイ(春志内川)は、現在の公式河川名は、**掲載地図**のように「神居第四線川」と、実に味気のない番号川になってしまったのである。石狩川左岸の伊野川と内大部川の間の六つの河川名が、神居第一線川から神居第六線川まで、番号川になってしまった。詳細は不明だが、昭和四十四年度から北海道の河川現況管理の機械化が、三年計画で実施され、その時に番号川化されてしまったようである(昭和四十五年発行「北海道河川一覧」の序による)。

他人不思議な縁もある。ハルシナイ(春志内川)から約一五㌔、旭川寄りの国道一号線に、平成二年十月に、春志内トンネルが完成する。由緒正しい「ハルシナイ(春志内川)」が番号川になってしまったが、「春志内トンネル」に、ハルシナイ(春志内川)の名を残すことになったのである。誠に不思議な縁であるが、春志内トンネルについては、別項で詳述する。

最後にハルシナイ(春志内川)の水源について触れておきたい。写真(1)は、安政四年に松浦武四郎が持参した野帳(フィールドノート)の「丑第二番」で、ハルシナイの水源は、「ハルシナイイトコ(水源)―エルンゲプヘ(現・イルムケップ山、八六四・二㍍)のつゞき、ポロイワ(現・神居山、八〇九・八㍍)と云山より流るゝし也」と書いている。

昭和三十五年、知里真志保は、「十勝アイヌ語地名解」で、ハルシナイの水源を、ハルシナイカムイシリ(haru-shnai-kamuy-shiri 春志内の神山)―春志内川の水源にある山」としている。これは、現在のカムイスキーリンクスのある神居山(七九九・二㍍)を指している。山名も、神山=神居山と名数している。

ところが、既に、当連載③で詳述したところであるが、明治三十年製版の「北海道仮製五万分一図」では、現在のカムイスキーリンクスのある神居山は、写真(2)のように、山名が、オタオシマックタアンスプリ(ota-o-shi-mak-ta-an-suppuri 川岸の砂原の後ろにある山)となっていて、幻の山名として紹介し、その謎解きをした。実際の水源とは別にして、伝承者によって異なる山名が地図上に記載される一つの例である。(アイヌ語地名研究会幹事)

(1)「丑第二番」　(2)「仮製五万分一図」

※明月号一面写真に掲載します

14/03/04 (74) 旭川のカムイコタン(31)

連載 旭川のアイヌ語地名研究 ㉔

高橋 昌

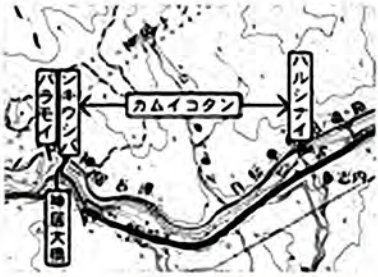
―旭川のカムイコタン㉛―

明治二年八月十五日、蝦夷地を北海道と改称し、全道を十一カ国八十六郡に設定、旭川は石狩国上川郡となった。この原案は松浦武四郎によってなされたもので、当連載39でも紹介したが、松浦武四郎は、石狩国上川郡は、「上川郡―本川筋(註・石狩川筋)神処より巡て上をさして一郡に往候。上川筋、本川筋村々多く、チクベツ、ピ、ベッツ等和分り申候へ共、郡名を当時上川と相唱候事に御座候」と、松浦武四郎の案は、石狩川の現称の神居古潭から上流を石狩国上川郡としたもので、それが現在の原型になっている。

永田方正は、明治二十四年刊の『北海道蝦夷地名解』の国郡の「上川郡」の項で、重要な記録を記している。すなわち、

「上川郡―原名ペニ・ウン・クル・コタン(peni un kuru-kotan)と云ふ。上川人の村と云ふ義なり。アイヌ古へより本郡神居村字カムイコタンより上流のアイヌをペニウンクル(peni un kuru 川上・の・人)―上流人の義と云ひ、此処より下流をハニウンクル(pani un kuru 川下・の・人)―中川人の義と云ひ、石狩河口をパラトーウンクル(parato un kuru 広い川口・の・人)―川口人の義と云ふ。べ、石狩郡に花畑村あるは、パナウンクル(pana un kuru 川下・の・人)の誤りにて下流人の義なり。」

永田方正は、アイヌの人たちは、昔からこの石狩川の最大の難所、大険の地―カムイコタンから上流の人をペニウンクル(peni un kuru 川上・の・人)と言い、その人たちの住む所をペニウンクルコタン(peni un kuru-kotan 川上人・の・村)と言ったので、上川郡と命名されたというのである。



パラモイと神居大橋

石の上川郡由来記をめぐって、これまで石狩川最大の難所であるカムイコタンの、江戸末期から明治二十年代までの踏査記録と、カムイコタンの伝説を中心に紹介をしてきた。しかし、カムイコタン=神居古潭には、まだまだ紹介していない沢山の魅力がある。

往時の神居古潭での花見や紅葉の最盛期には、旭川から臨時列車が出て、大変な賑わいだったという。神居古潭の生き字引の南山義居の南山恵美さんや、神居古潭開基百年記念誌『足跡』編集部長だった増茂昭さんにお話をお聞きすると、例えば、花見の時期のヤツメウナギのカバ焼きの売れ行きは、想像を絶するものだったと懐かしむ。

現在も神居古潭の魅力は沢山あり、まずは、今年、第五十七回を迎える、秋分の日の「こたんまつり」がある。カムイノミ・イナウ式の中で、国が指定した文化財の「アイヌ古式舞踊」が、旭川チカップニ・アイヌ民族文化保存会の皆さんによって披露されたり、その他盛り沢山のイベントが行われる。

北海道の指定文化財では、既に紹介した、昭和三十二年指定の「神居古潭竪穴住居遺跡」、また、旭川市指定文化財では、「鬼の足跡」で紹介した、昭和四十一年指定の「神居古潭おう穴群」、平成二年指定の「旧神居古潭駅舎」があり、そして、平成九年には、これらをひっくるめて、神居古潭は、「旭川八景」に選ばれている。

その上で、平成十九年には、神居古潭は、日本の地質百選に選定された。これを受けて、一昨年から、神居古潭を中心とした「旭川ジオパーク」構想が誕生し、活動を開始している。ジオはギリシャ語で、「地球」の意味。ジオパークとは、学術的に価値の高い地質や地形などを保全・活用し、教育や観光などに役立てる自然公園のことをいう。

「日本ジオパーク」には、全国で三十二地域があり、北海道では、既に、洞爺湖有珠山(世界ジオパーク)にも認定、白滝、アポイ岳、三笠の四カ所が認定、認定に邁進して、早期実現してほしいと願い、「旭川のカムイコタン」の項の結びとしたい。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一曜号に掲載します

14/04/01 (75) ハルシナイと神竜頭首工

連載
旭川のアイヌ語地名研究
75
高橋 基

―ハルシナイと神竜頭首工―

丸木舟による交通時代の石狩川の最大の難所がカムイコタンだった。下流からカムイコタンに着いた丸木舟は、神居大橋付近のシキウシパ（荷物背負場）で、丸木舟から荷揚げして、荷物は歩行して運び、ハルシナイに丸木舟がないときは、丸木舟は空荷にして引き上げ、ハルシナイから再び上流へ向かうのであった。

現在は、掲載地図のように、ハルシナイ（春志内川）のすぐ上流に、神竜頭首工が設置されている。写真①②のように石狩川に堰堤を築き、ここから農業用水を取り水するのが、頭首工である。神竜頭首工の上流左岸には、掲載地図のように、ニッネカムイ覆道がある。位置関係を知るにて、掲載したものである。

神竜頭首工は、石狩川中流沿岸に開けた北空知の穀倉地帯の深川や秩父別、旭川の農地に水を送る水利施設である。その歴史を見ると、大正十一年に神竜土功組合が設置され、現頭首工から約六百メートル下流から、非常な難工事の末に取水し、灌漑溝が昭和二年に通水し、深川などが開田した。しかし、堰堤がないために、取り水施設の維持管理に莫大な費用を要した。

昭和二十七年に国営灌漑排水事業が行われ、昭和三十六年に、写真①神竜頭首工が完成する。さらに、農業の近代化などから、神竜、深川、空知の三つの水利区域の水田の用排水施設の改良と、畑地の灌漑を目的に、写真②の現在の頭首工が、平成元年に改良新築された。写真③は、平成十八年二月八日に、上流から、左にニッネカムイ覆道をとらえ、水を止めていない状態の神竜頭首工を撮影したものである。写真①②③の◆は、ニッネカムイ覆道を指している。

写真①は、インターネットの「水土里ネット」からの転載であるが、ここには大正十三年からの工事の苦労ぶりが見える写真が掲載されているので、是非ご覧いただきたい。

昭和三十六年の初代の神竜頭首工を見て、ここに頭首工を築いた発想に驚いたが、実は明治七年にハルシナイから上流に向かった、開拓使御雇外人の地質学士兼鉱山師長のライマンは、カムイコタンの最下流部に堰堤を築き、水車機械所の設置を提案しているのである。

ライマン一行は、明治七年六月十七日、札幌の豊平川を出発、石狩川を遡り、その水源から十勝川上流へ山越えし、十勝川を下って、太平洋岸の大津に下る行程であった。

途中の支流を調査しながら、鴨居吉丹（「来蹟氏北海道記事」の表記には、七月十一日に到着した。七月十二日にはハルシナイにキャンプ、十三日にこのハルシナイから、四十八人のアイヌの人たちが、十一艘の丸木舟を漕ぎ、ライマンを含めて総勢五十六人で上流へ出発する。

ライマンは鴨居吉丹の調査から、「鴨居吉丹ノ説ニ拠テ、高サ五十五尺乃至六十尺ノ堰ヲ築カバ、其直側ニ山アリ、水流二密接スルヲ以テ、其長凡ニシテ足レベシ。蓋シ、其堰ノ上部ニ百碼三遮ギサル位（川幅ハ巻フク一百尺許）ニテ充分ナラン。」と述べている。

その後石狩川の旭川地域で、ライマンは、大雪の上川行幸と、「離宮（Imperial palace）」、「温泉場（Bathing-place）」の建設提案をしている。これは、後の岩村通俊や水山武四郎の北京離宮設定論の嚆矢といえるものなので、神竜頭首工もライマンの鴨居吉丹の堰（堰堤）がヒントだったかも知れないと、思いを馳せた次第である。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第一週号に掲載します

①神竜頭首工―昭和36年完成の頭首工

②神竜頭首工―平成元年完成の頭首工

③平成18年―上流からの冬の頭首工

14/05/06 (76) ハルシナイから上流へ(1)

研究
旭川のアイヌ語地名研究
⑯
高橋 昌

前回は、地図の神楽岡首工の歴史について触れた。丸木舟による交通時代は、丸木舟の往来ができないカムイコタンから上流へは、地図のハルシナイ（春志内川、現・神居の西隣川）の川口から、再び丸木舟に乗り、上川の地に向かうのであった。現在では、ハルシナイの上流約百メートルの所に神楽岡首工があり、往時の石狩川と様相が違うことを念頭に、以下お読みいただきたい。

また、前回は、明治七年七月十三日に、ハルシナイから四十八人のアイヌの人たちが、十一艘の丸木舟を漕ぐ、開拓使御雇外人の地質学者・英鑑山師長のライマン一行が、総勢百十六人で上流へ向かったことも紹介した。

明治十九年六月、十四日に、空知太からの上川仮道路が竣工して、丸木舟時代は終わりを告げた。以下、次号にかけて、幕末から上川仮道路が竣工するまでの丸木舟時代の絵巻物を、ハルシナイから上流へ向かう記述を紹介し、往時に思いを馳せてみよう。

ハルシナイから上流へ①

まず最初は、当連載⑭でも紹介した安政四年（一八五七年）五月二十六日（陽暦六月十七日）の松浦武四郎の『再巡石狩日誌』を再掲する。これは最も古い記録で、しかもアイヌ語を理解していた松浦武四郎が案内のアイヌの人たちから聞いた、鬼神（nitnasamoi）伝説を書き留めた貴重な記録である。その上、巧みなスケッチで、伝説の岩を描いているところが学術資料価値を高めている。

既に見てきたように、まず、地図の右岸に、神（サマイクルカムイ）に切られた、「ニッネカムイサパ（鬼の首）」の岩がある。松浦武四郎は蝦夷への報文日誌の『再巡石狩日誌』で、その由来と義経について、次のように書いている。

「ニッツイカモイ（左註上流に向かって左＝右岸の左岸に、高さ二丈計（約六メートル）の人の首の如き岩有り是を鬼の首なりとなん。アイヌ尊此所へ来臨を聞て来る。ニッツイとは鬼の事也。カモイは神也。昔、鬼此処まで上り神と合戦をして、神に負けて切られ首なりと申し伝えたり。此辺り鬼のまた居の上と申すこまごまの岩有」

写真(1)は、「鬼の首」の現在の姿で、大きさがわかるように筆者が前に座って写したものである。写真(3)は、松浦武四郎がこの調査に同参した野帳（フィールドノート）に『言語』『部』のスケッチで、左側に見える、ニツニカモイシャハ（nitnasamoi sara 鬼の・頭）が「鬼の首」で、実物と酷似している。武四郎のスケッチと比較すると、現在の「鬼の首」の下部が土砂で埋まっている。安政期の石狩川を知る重要な手がかりである。

写真(2)が、左岸の「鬼の鼻」の遠景で、国道十一号線の橋一車で「鬼の鼻」の大岩が破壊されるところを、地図のニッネカムイ岩国を作り、アイヌ伝説の大岩が無残にも崩れたものである。

写真(4)は、「再巡石狩日誌」の挿入画で、写真(3)の野帳のスケッチを基に改めて描いたもの。松浦武四郎の直筆である「鬼の鼻」については、武四郎は、次ように記述している。

「カモイ・ナトバケ（nitnasamoi-nesnake 鬼の・鼻）―山岸に高さ七八丈約二十二、三メートル程の大岩二、三有。是は二ツイカモイの魅の出現ナトバケは現と云事。此処も急流なるが故に、両人共岩の上に乗り、四人にて漕ぎし上る也。」

写真(4)の下部に、丸木舟を記したのは、「鬼の鼻」の上流の激流を、二人が岩の上から綱で丸木舟を引き上げ、四人のアイヌの人たちが棹で突っ張り、丸木舟を上流へ向かい漕いでいる図である。松浦武四郎は、右の文の――線部の通りに忠実に絵に描いている。写真のない時代の優れた資料価値がある。

（アイヌ語地名研究会代表）

※前月号～連載に間違いがあります

14/06/03 (77) ハルシナイから上流へ(2)

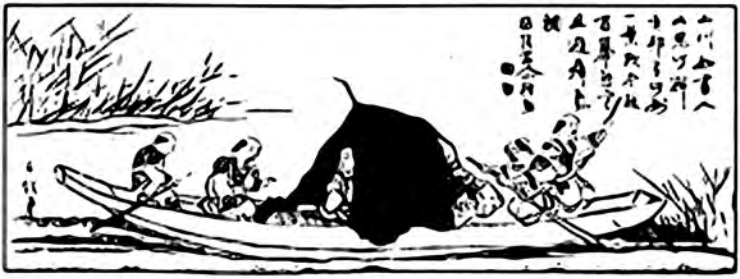
連載
旭川のアイヌ語地名研究 ㊼
高橋 昌

ハルシナイから上流へ②

前回は、安政四年(一八五七年)に、松浦武四郎が持参した野帳(フィールドノート)に描いた「蝦夷地図」の「ニッネカムイサパ(鬼の首)」とカモイチトパケ(鬼の魅)のスケッチを紹介した。また、蝦夷への報文日誌の一部、石狩日誌で、ハルシナイから石の伝説の岩を左右に見て、激流を上る武四郎直筆の絵を見ていただいた。

松浦武四郎は、文久元年(一八六一年)にこの調査のダイジェスト版の『石狩日誌』を刊行した。これは、木版彩色刷の一冊本である。下の丸木舟の絵は、『石狩日誌』の中でも最も有名な絵で、石狩川沿岸の市町村史では、昔は必ず掲載されていた。昭和三十四年発行の『旭川市史第一巻』には、表紙の裏に、カラーで掲載されている。この絵は、石狩川の発源地日高近の武四郎一行の様子で、柳を折って骨組みを作り、一枚の蓆の筵で屋根のように覆ったという。絵は左下隅に写真撮影[illegible]として、残念ながら武四郎ではない。

この『石狩日誌』は、フィクションが多いことと、再版石狩日誌が公刊されたこともあって、その後は、公的資料としては採用されなくなった。その



からは、高畑利宣の出張復命書で見てみよう。

「札幌ヲ発シ、十日目二神威古丹ニ着ス。同日二神威古丹ヨリ大澤二至ル。同所ヨリ上陸尺ソ一里間陸行、字ハルシナイ太二至リ露宿。翌日滞在、携帯品ヲ陸送シ船ハ空船ニシテ、ハルシナイ太二引キ上ゲ、廿七日同所ヨリ乗船、字忠別太二至リ、同所二泊、船ノ艤立小屋ヲ建設シ、之ヲ以テ滞在中ノ宿泊所ニ宛ツ」(句読点は筆者による)

カムイコタンの大澤は、パラモス(pa-ramo-s 広い・淵)のこと。ここからハルシナイ太(ポトゥ(poto 川口)ハルシナイ)が石狩川と合流する所に、携帯品を陸送し、丸木舟、要は空船にしてハルシナイ太まで引き上げたのである。そのためにハルシナイに二日間露宿したのである。六月二十七日に、再び丸木舟で、忠別太(現・旭川市忠和)に向かった。

この復命書は、大正二年に高畑利宣自身の手で筆写されたものであるが、同じ出張復命書でも、松浦武四郎のそれと比較すると、実に事務的である。アイヌの人たちの伝説等に全く関心がなかったのか、これらについては、一切触れていない。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します

14/07/01 (78) ハルシナイから上流へ(3)

―ハルシナイから上流へ③―

前回、松浦武四郎著『石狩日誌』の丸木舟の絵が、昭和二十四年発行の『旭川市史第一巻』の表紙の裏に、カラーで掲載されていることを紹介した。この丸木舟の絵が、旭川市の中学校の教科書『参考ワーク』(社会の自主学習)(新学社発行)旭川地区版に掲載されている。

その上、同書には、前回から紹介している高畑利宣の写真と、明治五年に高畑が十川を三カ月余にわたり調査する、開拓使による十川郡出張命令書(『滝川市郷土館蔵』)も掲載している。また、その本文では、開拓使判官の岩村通俊は、高畑利宣に十川の調査を命じた。彼は一八七二(明治五)年四月三十日(注『細大日誌』による。日誌に札幌を出発し、三カ月余りにわたり、十川地域のアイヌの人たちの生活や地形や風土・産物などの調査を行うとともに、農業の試作を行い、豊かな土地を持つ十川の状況を報告した」と、簡潔に記述している。しかも、(資料ワーク)として、次の問いに答えなさい。問1、高畑利宣が十川調査をした年を西暦で答えなさい。問2、高畑利宣は、十川でどのようなことを調査したか、書きなさい。」と、高度な問もある。全八十五ページの内、旭川地区版には、巻末ではあるが、近藤重蔵から旭川駅新駅舎オープンまで、五ページを費やしていて、内容も充実しているのには驚かされた。

①カモイコタン

②層雲峡付近

さて、先々週の六月二十一日(土)、富岡製糸場が世界文化遺産に登録された。明治五年に群馬県富岡に設立された官営の機械製糸工場である。同じ年の五月十五日に、北海道では高畑利宣が、丸木舟で札幌を出発し、十日目で神威古丹に着き、大函(ハラモイ)から荷物はハルシナイに移送し、大型の丸木舟、後は空舟にして、ハルシナイまで引き上げたので、この作業のために、ハルシナイで、一日間滞在した前回は高畑利宣の(出張)復命書でカムイコタンの部分を紹介した。

高畑利宣は、後年、回顧録(『旭川市史』)では、「高畑利宣伝抄」)で、丸木舟ハ群取アイヌ一名ヲ乗セ、櫂ヲ以テ漕キ上ゲ、ハルシナイニテ一日間滞在調査、六月廿七日昏去内乗船、神居村ナル現今悪別太二到着セリ」と、カムイコタンでの空舟の引き上げ方を明らかにしている。現在の状況から想像しても、大変な作業であったと推測できる。

高畑利宣はじ月一日から戸籍調べをしている。明治五年の十川は、和人は勿論一人もいず、アイヌ戸数六十八戸、総人員二百六人、内男百七十名、女百三十六名と復命する。以下紙幅の関係で、石狩川水源調査についてのみ述べる。

高畑利宣は、七月二十日から、往復十八日間をかけて石狩川水源を調査する。**地図**は、高畑利宣の自筆で、「石狩川ヨリ水源二到ル見取図」(『滝川市郷土館蔵』)の部分図。①のカモイコタンでは、鮭石に注目している。②の現・層雲峡付近では、「温泉」があるが、これは、既に安政四年(一八五七年)に松田市太郎が発見し、松浦武四郎も地図に記載している。

初の記録の「大滝(現・流星・銀河の滝)は、天滝(滝上命名)大ト無双ナリ」としており、また、現在の「大函」は、「滝川と命名ス」と記し、出張復命書では、「右ノ所ハ他国二類似ナキ珍無類の名所ト存ズ」と絶賛した。世界文化遺産となった富岡製糸場が設立された、同じ明治五年に、高畑利宣が、層雲峡の名勝を発見したのである。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※四月号―連載に掲載します

新章 旭川のアイヌ語地名研究 ⑱

高橋 昌

14/08/05 (79) ハルシナイから上流へ(4)

ハルシナイから上流へ④

前回は、明治五年の高畑利宜の記録による、カムイコタンのシキウシバからハルシナイへの丸木舟の空舟の引き上げ方と、高畑の石狩川水源調査を紹介した。

今回は、明治六年五月、開拓使測量長アメリカ人のワッソン(J.Wasson)が、近代的三角測量の基線設置のために、石狩川を遡り、十川の地に入った件を紹介しよう。

同行は、助手の荒井郁之助、訳官井添、開拓少主典平林通恪、アイヌ語通訳一人で、五月二十六日に札幌を出発する。以下は、平林通恪の『北海紀行』の記事によるが、本連載の43の神納橋から神居古潭まで(下)では、神納橋下の左岸の砂原が、平林通恪が記録した、「幻のアイヌ語地名」の「ウタ(オタニ)ヨロ川岸の砂原」和人の記表記・ウタ)であることを明確にした。

さて、ワッソン一行は、六月八日にカムイコタンのワ・ラ・モイに到着した。ワ・ラ・モイは、ハラモイ(ぱら一もえ広い湾)のことで、以下、カタカナ表記の石狩点(ワ・ラ・モイ)は、平林通恪のアイヌ語地名表記である。ここでは、ハルシナイまでの行程を見ておこう。

「六月八日、十町餘ヲ、ウラ・ソン・ナイ(石小川)、十町ワ・ラ・モイ、此処ヨリ両岸絶壁、奇石怪岩ノ間ヲ舟行ス。五町テシオ・マ・ナイ(石小川)アリ、人ハ皆ワラ・モイ、ヨリ上陸シ荷物モ陸ヲ運ブ。道路アリ、岩上ヲ歩ス。此間所ヲカ・モイ・コタント云フ。アイヌ猛キモノ、危キモノ、酋キモノノ極ソ、カモイ」

14/09/02 (80) ハルシナイから上流へ(5)

連載
旭川のアイヌ語地名研究 ㊵
高橋 昌

ハルシナイから上流へ⑤

前回は、明治六年に開拓使測量長アメリカ人のワッソン(Jamez P. Wasson)一行が、近代的三角測量のために、十川の調査をした時の模子を紹介した。

ワッソン一行が、石狩川を愛別まで測る時に丸木舟が、度転覆、愛別からドる時にピビプト(註・比布川の石狩川との合流点)上流、二町の所で、一隻の丸木舟が流木に衝突して転覆、次々下ってきた丸木舟が、転覆した丸木舟に衝突して、残る四隻が転覆した。丸木舟時代の十川紀行の中で、管見では、丸木舟転覆の最多記録である。

明治十七年、内務省地理局の高橋不二雄と札幌県地理課の福士成豊は、石狩川本流の石狩岳に上り測量し、北海道の中央高地の詳細を明確にし、明治二十年に『改正北海道全図』を刊行する。この調査で、明治十七年九月六日、丸木舟で石狩川の上流へ測る時、ワッソン一行と同じピビプト上流のウエンマクンベツで、高橋・福士の乗った丸木舟が転覆する。

高橋不二雄は、この調査で描いたスケッチ集『明治初期画帖』(東京大学史料編纂所蔵)の中に、石のウエンマクンベツでの丸木舟の転覆の彩色画を描いている。白筆キャプションは、ウエンマクンベツニテ乗船転覆ノ図」で、踏査記録の『札幌県巡回日誌』(同前)によると、絵のように丸木舟は船底を上にした状態になり、高橋は溺る丸木舟の舟底によりやっとたどり、もう一隻の丸木舟に助けられる。荷物は福士の弧鉄をはじめ、これも絵のように全てが流されたのである。しかし、高橋の日誌以外は、ゆい全部回収できた。

丸木舟の転覆で最も有名なのが、文化四年(一八〇七年)に、近藤重蔵の乗った丸木舟が、暴流のレーコロフイラで転覆した件である。レーコロフイラ(re-kor-puyra)名を持つ・激流●「有名な激流」の意味は、その名の通り、ハルシナイから上流では、最も危険な場所であった。近藤は十月十四日、チユクベツプト番屋を出発、石狩川をトったが、このレーコロフイラで丸木舟が転覆破船し、一〇〇間(約一八〇m)ほど下流に流され、御朱印(朱印を押した公的文書の敬称)まで流らすという状況であった(『勤書』)。

前回紹介したワッソン一行の平林通恪が記録した、ハルシナイで見た陸に乗り揚げた丸木舟十二、四隻のうち、何かなどに衝突して砕けたのが、二隻あったというのは、近藤重蔵のような目に遭ったものだろう。

近年、旭川のアイヌ語地名で、食料食物を採取できる地名として、神居古潭のハルシナイが記載される例が多い。これは、当連載の㉒でも紹介した、昭和三十五年に発表された知里真志保の『十勝アイヌ語地名解』に起因する。再掲してみよう。

「春・夏・秋(はるしない)。ハルウシナイ(haru-usi-nai 食料・多くある・所)―この沢の奥には、ウバユリやギョウジャニンニクなどの食料植物が群生していたのでこの名がある。」

字義通りに訳すとこの通りである。しかし、近隣の自然界に沢山あったであろうウバユリやギョウジャニンニクを、丸木舟の転覆の意味を冒してまでハルシナイに採りに行くことはありえないのである。

「地名は大地に刻まれた歴史である」―この言葉通り、安政四年(一八五七年)、松浦武四郎が記録した、ハルシナイは丸木舟から荷物を背負い上ドするところなので、「此処え飯料置処なるが故に呼る也」、すなわち、「携帯用食糧=弁当がいつも置いてある川」の意味で、「ハルシナイ(haru-usi-nai 携帯用食糧=弁当がいつも置いてある・川)」との意味だったのである。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します

明治17年「開拓画帖」

14/10/07 (81) ハルシナイから上流へ(6)

旭川のアイヌ語地名研究 (81)

高橋 基

ハルシナイから上流へ ⑥

前回は、鴨居のレーコロフイラ(re-kor-hoyra)名を持つ「激流」「有名な激流」の意味)で、文化四年(一八〇七年)に、近藤重蔵の乗った丸木舟が転覆し、一〇〇間(約一八〇メートル)ほど下流に流され、御朱印(朱印)を押した公的文書の紛失まで誘らずという有名なエピソードなど、ハルシナイから上流での丸木舟の転覆事故を紹介した。しかし、これらは、上川調査の紀行文に掲載された、部で、丸木舟転覆事故の水山の一角であったと推察される。

今回は、当連載初の、ハルシナイと神竜頭首工でも紹介した、アメリカ人で開拓使御雇外人の地質学士兼鉱山師長のライマン(Benjamin Smith Lyman)のカムイコタンの記事を紹介する。ライマンは、ハーバード大学修了後、ドイツの鉱山学校で鉱山学を学び、ペンシルベニア州やインドで石油調査を終えたばかりで、明治六年に開拓使に招聘され、明治九年に内務省に移るまで、全道の地質・鉱物調査を精力的に実施、多くの鉱山技術者を育てた。カムイコタンの記事の一部でも分かるが、その記録は実に詳細で科学的で多岐にわたるものであり、そのスケールの大きさに驚かされる。

さて、ライマン一行は、明治七年六月十七日、札幌の豊平川を出発、石狩川を遡り、その水源から十勝の音更川上流へ山越えし、音更川、十勝川を下って太平洋岸の大津に八月一日に到着している。

明治9年 ライマン作「日本帝国地質要略之図」(部分)

ライマン一行が、途中の支流を調査しながら、鴨居吉丹(采曼氏北海道記事の表記)には、七月十一日に到着した。カムイコタンだけでも長い記事なので、これまでの記事に関連した事項のみ紹介し、他は割愛させていただく。

「七月十一日、土曜日(前略)当鴨居吉丹ハ、急瀬及ビ滝ヲ山迄ヲ以テ、中川ト十川ヲ分断スル所ナリ。然レドモ、一里二足ラサル程ノ間、只緩漫ノ如キ急瀬アルノミニシテ、滝布上ナハ、決シテナシ。(余瀬ハ其急瀬ノト極ヨリ四平英里(註・約四キロ)許上流ナル、ノ平坦ナル高地ニ露ヲ下リ。(後略)

七月十二日、日曜日 当日午後、余蔵露然ヲ鴨居吉丹急瀬ノト端ヲ距ルル四平英里ノ上流ヨリ、其上端ナル、ハルシナイ二移セリ。其ノ距離ハ一英里(一キロ)ニシテ其方向ハ正東ナリ。天幕及ビ旅具ハ、アイヌ二負セテ運搬セリ。彼等ノ荷物総ニ来嘗ハ、医ニ其前ニ送リ置キ、別荷ノ良キモノハ急流ニ向テ曳上セタリ。鴨居吉丹ニハ、一ノ滝布ナク只数ノ断岩起伏セル一大急瀬アルノミ(註・松浦武四郎の『石狩日誌』には、滝の絵と、文中には滝があると書いているそれに対する非難である)(後略)」

ライマン一行は、翌十三日、丸木舟十一艘に四十八人のアイヌの人たちと、ライマン等総勢五十六人で、ハルシナイから上流へ上って行ったのである。

左上写真は、明治九年五月十日に出版されたライマンが作成した『日本帝国地質要略之図』の石狩川の鴨居吉丹より上流の部分図である(縮尺一:三〇〇万分の一)。これは、約八、〇〇〇万分の一の北海道地質図である。日本の地質図としては、最も古いものといわれ、中に北海道開発史上のみならず、近代日本科学史上でも重要な資料の一つとされている。因みに本図発刊日である五月十日は、平成十九年に「地質の日」と制定されたのである。また、図中には色に色分けした「石類種別之図」(TRANSLE SECTION OF THE ROCK GROUP)の住状図があり、そこに、「鴨居吉丹石類(化石ヲ含マサル変形石カ)」が記載されている。平成十九年に、神居古潭が、「神居古潭変成帯」で、日本の地質百選に選出される。その記念すべき出発点を築いた地質図である。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します

14/11/04 (82) ハルシナイから上流へ(7)

―ハルシナイから上流へ⑦―

前回は、アイリカ人で開拓使御雇外人の地質学兼鉱山師長のライマン(Henjamin Smith Lyman)のカムイコタンの記事を紹介した。ライマンは、明治七年に、石狩川水源から十勝国へ山越えした最初の人物であった。

明治九年になって、開拓使のナンバーツーの高官である開拓使大判官の松本十郎が、石狩川水源から山越えして十勝国に出て、音更川から帯広経由で十勝川を下り、大津に到着する。ライマンに続く、第二番目の快挙であった。

松本十郎は、カムイコタンから丸木舟で旭川に入り、チカプニ(近文)で、ライマンに対する無念の思いを、次のように記している。「開拓使ノ設タル後官吏幾百千人、遣レ、人北海ノ水源ヲ研究ノ徒ナキモノ八年、然ルニ一昨年御外萬里来到咫尺一人其源ヲ探得セザル、ハ遺憾ノ至リナリ。」

松本十郎は、元庄内藩士で、文久二年(一八六二年)に、庄内藩から与えられた蝦夷地の開墾、倍前、倍蝦、大塩の各場所の警備・開発に、父に従い、勤務し、地元のアイヌの人たちの生活に接した経験を持つ。戊辰戦争では庄内藩は新政府軍と戦い敗れる。この敗北で藩主は謹慎を命ぜられ、その処分に奔走中に、黒田清隆に人物を認められ、開拓使入りし、明治一年に開拓判官に抜擢され、て根室と反る。根室では、領土開墾を図り、日本人もアイヌも身分・出身問わずに公平に扱い、松本自身もアイヌの住民から慕ったという。アッシ(註・厚司―アットゥシ atuz オヒョウニレの繊維で織った布で作った着物と呼ばれる衣装を大切に身に着けていた。そのためにアイヌの人たちからも「アッシ判官」と称され敬意を払われていたという。

「昔の豊の仮小屋」

明治六年には、岩倉遣欧の後を継いで、大判官になり、北海道開拓行政の事実上の最高責任者たる地位に立ち敏腕をふるった。しかし、明治八年に締結された樺太・千島交換条約に基づき、樺太のアイヌの人たちを札幌近傍に移住させようとする黒田長官と、それに反対する松本十郎とが対立するに至った。松本十郎の石狩十勝両河路査はこのような時期に行われた。

松本十郎はこの踏査の記録として、「石狩十勝両河記行」を遺している。「記行」は、「紀行」が正しいが、引用した『日本庶民生活史料集成 第四巻』では、松本の原本を使用とのことで、これによった。また、アイヌ語地名や人名などは(○○○)と表記されているが、本稿では、《○○○》と表記した。

松本十郎は、高官でありながら、案内のアイヌの人たちの負担にならないように、大鍋(ナントも持参せず、上絵のように、アイヌの人たちが作ってくれた昔の豊の仮小屋に泊まり踏査を続けた。札幌を六月八日に出発、カムイコタンには、六月十五日に到着する。

今回はカムイコタンに到着する場面だけ掲載し、詳細は次回に紹介する。文中①は、神居古潭トンネルの深川側に出た所の神居古潭大橋から下流の石狩川の源流で、当連載の②で紹介したカムイウッカ(kamuy-ukka 神・鍋)を丸木舟で漕ぐ時の様子である。②を参照しても上れずに、岸から綱で曳いて上ったのである。

また、②は、これも当連載の45で紹介した、チョウサメのシャメカムイ伝説で、丸木舟の艇を明き、シャメカムイに挨拶し、航行の安全を祈る儀式であった。踏査による貴重な資料である。

「十五日　晴《カムヰコタン》泊

(前略)―水盤経叫々、全指登ルコトボシ能ルハ往々嗣フ以テ引揚ル。②《ハラモヰ(註・パラモイ para-moi 広い・湾)三至レバ、アイヌ共、艇ヲ叩クコト頻リナリ。何二故ヘト問ヘバ、此ノ深淵二潜龍沙魚(註・チョウザメ)大ナル住居ト古来相伝フ。或ハ大亀ト。(後略)―以下次号―

(アイヌ語地名研究会幹事)

※明月号―海号に掲載します

研究
旭川のアイヌ語地名研究
㉜
高橋 基

14/12/02 (83) ハルシナイから上流へ(8)

ハルシナイから上流へ⑧

前回に続き、北海道第二位の高官であった開拓大判官の松本十郎の明治九年「石狩十勝両河川巡行」から、カムイコタンの踏査記録を見ていきたい。

かつて「厚司判官」とアイヌの人たちから尊敬された松本十郎は、この踏査でも多くのエピソードを残している。六月十一日に（ヒバイ）で、案内のアイヌの人たちの給料（賃銀）を決める時に、「食料ハ現品ニテ渡ス外二米一升ツヽ、一人二被レト度」との申し出を聞き、松本十郎は「愚生是レヲ聞キ驚然タリ。アイヌ亦酋夫ノド一人ノ人民ナリ。和人アイヌノ差別アランヤ。当時測量雇使役人夫、食料外二金弐拾五銭ナリ。右同様二可ニ相渡ト言フアイヌニ達セリ。アイヌ共欣々然タリ」と、慣習を改めて、給料を和人と同一にした。

前回紹介したように、案内のアイヌの人たちの負担にならないように、天幕（テント）も持参せず、アイヌの人たちが作る路の傍の仮小屋に泊まり踏査を続けて、六月十五日にカムイコタンのパラモイ（pa-ra-mo-i 広い・高）に到着する。アイヌの人たちが頼りに丸木舟の艇を頭く理由を尋ねると、「此ノ深淵ニ潜龍沙魚（註・チョウザメ）大ナル住居ト古来相伝ノ説ト」と、伝説を披露してくれた。松浦武四郎をはじめとした踏査記録では、唯一の伝説の記録で、アイヌの人たちの松本十郎への厚い信頼を物語るものである。松本十郎のカムイコタンの記録を続けて見ると、

「三時四拾三分強所着。カムイコタン。荷上場二到ル。山水ノ景奇々妙々、独筆ノ能ク紙上ニ写出テ弁ルトコロナラズ。強テ弁セバ造化ノ巧ヲ尚スノミ。雖レ然聊カ略図（註・粗略な絵）一枚ヲ認ム。愚カ己ニ生（註・前治二年）爾来八ケ年ノ星霜北地ニ送ル、モ、如レ此快然タル美影ヲ不レ見ナリ。

一、本日ハ（カムイコタン）迄無レ滞達。

松本十郎が描いた石狩山（現・旭岳）

一、同処除後着ス。手拭地一筋ツヽ、為レ取酒ヲ十分二与フ。アイヌ直ニ本幣（註・イナウ inaw 木を削って作った幣）ヲ立テ神酒ヲ捧ク。此ノ夜深更マデ愉快二飲ミ貝殻ノ声不レ絶。

《カムイコタン》石狩音ノ太ルコト、舟行凡ソ十日ハ尋常ノ日程ト、里程五拾里ナルベシ。当処甚奇一本アリ、花盛リニ咲キ居ル。如此ノ山中ニ此ノ花アルトハ奇ト謂ベシ。

《カムイコタン》ヨリ上川郡ナリ。明朝ハ《ハルシナイ》迄——但、本流ノ為ニ荷物除送ナリ——一里余除送《ハルシナイ》マデ上川郡アイヌ共ト船ヲ持ツノ郡名依テ熊五郎（註・和人通称の亀吉熊五郎）、（セツカウン）（シタウンケ）（フヤレ）四名ハ十勝越ヘ、其他七人ハ従レ是川下ニ戻ス故、往返ノ賃銀酒肴シテノ。

猟船ノアイヌ使ニ、大山・康蔵・辰野三姓二書状出ス。尤モ是迄無レ遺達セルヲ告グ。夜中寒威甚シク安眠ナラザルナリ。

十六日 晴 《ハルシナイ》泊

寒暖計 四拾度

晴雨計 廿九・七平

一、アイヌ共昨夜牛飲ノ為ニ寝フル、ヤ日高シテ起ル。従レ是本要品ハ総テアイヌ其他二為レ取、札幌迄余分ノ弾薬其他等、山ノ宿迄送ル。

一、《ハルシナイ》迄荷物、米、塩噌両度二運送。八時過同処出立。九時前尊志内二達ス。此処水勢頗ル緩流、昨日愚蔵ル見テ一流ノ《コタン》二着グ。凡四里余、目標レニ達セルラン。アイヌ等トルハ十二時過キナルベシト。若シ遅刻ナラバ当所二一泊、明朝出船ト。小屋ヲ除テ寝二休息」——以下次号——

松本十郎は、六月十五日に丸木舟でカムイコタンに到着、来週八年目で最高の絶景を見て感嘆する。この日は荷上場付近で露宿、手拭地一筋ずつと、お酒を十分にアイヌの人たちに与えた。十勝越えの四人の人夫もする。

翌十六日は、ハルシナイに荷物を陸送する。合わせて、上川からの迎えの丸木舟を待つ。以下、貴重な記録が続くが、次号で紹介させていただく。

研究 旭川のアイヌ語地名研究 ㊸

高橋 基

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第一週目に掲載します

15/01/06 (84) ハルシナイから上流へ(9)

研究
旭川のアイヌ語地名研究
㉔
高橋 基

ハルシナイから上流へ⑨

前回に続き、開拓大判官の松本十郎の明治九年「石狩十勝両河紀行」の三回目なので、紙幅の関係もあり、松本十郎のカムイコタンでの聞き書きの部分は、別の機会に紹介することにし、石狩川水源調査と、松本十郎の開拓大判官の辞職まで見ていきたい。

松本十郎一行は、六月十五日に〈カムイコタン〉に到着、翌日、〈ハルシナイ〉までの荷物を陸送し、この日は、十川からの丸木舟での迎えを待っている。すると、忠別川の乙名(註・コタンの長)の〈シリコフツネ〉が、四人を迎える礼服の陣羽織を着て、他の五人と丸木舟・艘でやってきた。松本十郎の記録では、次のように書いている。

「壮年ノ者七人帰リタル故頗ル盛餞スリ。四方彩アリ。出遊モオシ。帳、水キ日国却フ極ム。午後一時三拾分十川ヨリ船式艘来ル。一同河岸ニ出迎フ。役アイヌ(註・田松前藩が編成した郷乙名、乙名、小使等の役職のあるアイヌ)陣羽織ノ礼服ニテ来ル。〈シリコフツネ〉其外五人ハ〈アヤシ〉〈ヌサチウ〉〈ヤヨウ〉〈トキレ〉〈イケンカ〉ナリ。役アイヌ敬ヤ敬ヤ敷愚盛ノ無レ恐縮フ祝ス。其他八川下アイヌ共久振リニテ逢シ喜ビ逢ル。敬々礼式アリ。

十七日　十川アイヌ共中々篤緒気水ク、朝ノ起ル遅々、性ノ然ラシムルモノ乗舟トモオレ可シ及。故二其意二任カセ、聊カモ遅速ノ催促ヲ致サヽルナリ。午前五時四拾分解纜(註・丸木舟を出す。出発)水勢大紙〈ハルシナイ〉二汐祇タリ。午前九時前二〈ヲサラベツ〉〈ハロ〉(註・オサラッペ川の川口)二至ル。(以下省略)

さて、こうしてチカフニ(現・近文)に到着した松本十郎一行は、一日滞在して、六月十九日に、石狩川の水源を目指して出発する。明治七年、ライマンは、十一艘の丸木舟に四十八人のアイヌの人たちと(ライマン一行の合計五十六人で、石狩川の水源に向かった。しかし、松本十郎は、開拓大判官という高官でありながら、アイヌの人たちの負担にならないように、チカフニからは、丸木舟に乗らずに、石狩川の右岸を徒歩で石狩川水源を目指した。同行のアイヌの人は十八人、それに通訳の亀石熊五郎と松本十郎の合計二十人であった。

持参品は、食料には白米一石四斗平俵、塩、身欠鰊、塩引きだけ。衣帽は持たず、衣類は帷人れ一枚、毛布一枚、雨具のみ。それに望遠鏡、寒暖計、晴雨計、手帳一冊紙入れ一つという実に簡素な状態であった。

松本十郎一行は、チカフニを出発して九日目の六月二十八日に、石狩川の水源の(シノマン山、信濃山の表記もある)に到達する。アイヌ語のシノマン(sinomun 真の、本当の〈sino 本当に o mun 山奥に行っている)の意味である。松浦武四郎やライマンの地図では、十勝岳の位置が濃っているという重要な指摘をしている。

その後、松本十郎は、富良野川から屈足経由で十勝川を下り、七月五日に大津に到着する。

松本十郎は、帰途の七月十日、前々回紹介した樺太アイヌ八百四十一人が、強制移住させられた対雁(現・江別市)で、その後悲惨な運命をたどる樺太アイヌの人たちの実情を見る。翌七月十一日に札幌に帰着、開拓使本庁で帰札届けを出し、辞職を表明し、十三日に辞職書を提出する。「呼司判官」とアイヌの人たちからも尊敬された松本十郎は、その後、故郷の山形県鶴岡に帰り、一農民として生涯を送り、再び官職につくことはなかった。「石狩十勝両河紀行」は、当時の情勢を語る第一級の資料であると共に、為政者のあるべき姿を問う書でもあった。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します

松本十郎が届いた石狩川水源の山

15/02/03 (85) ハルシナイから上流へ(10)

ハルシナイから上流へ⑩

明治十五年二月開拓使が廃止。札幌、函館、根室の三庁が設置されて、上川郡は札幌県の管轄となった。前回まで紹介してきた明治九年の松本十郎の「石狩十勝踏査紀行」は、開拓使時代の最後の貴重な記録となった。

例えば、松浦武四郎が安政四年（一八五七年）に宿泊した大雪原の跡を訪れ、版画一枚がまだ残っていたこと、上川郡ノ名のクウチンコレ（クーチンコロの称）が一般的だが、例で伏し、長崎チャレンミナ、次男モンサヌが孝養を尽くしていること、その病の原因が有名な奇似又市の奸計と断罪するなどである。

特にハルシナイでの聞き書きは、明治初期の上川アイヌ社会を知る重要な資料となっている。聞題は、「石狩並二上川ノ名ニ、小使名ニ分絵支配」で、札幌の関係でここでは上川郡のみを掲載する。アイヌの役名の乙名は、コタン＝集落の長で、小使は乙名の補佐役。総乙名はこれらの乙名・小使を統括する地域の首長を意味している。元来は、松前藩がアイヌ支配を貫徹するために、アイヌ社会の中に統治組織として編成した役アイヌであった。しかし、当時は自治的なものとして、石狩川筋の乙名が協力し、特に明治七年からは石狩川河口域での漁労収益の積み立て資本で「米塩ノ欠乏アルコトナシ」と、松本十郎は称賛している。

松本十郎がハルシナイで記録した上川郡の役アイヌとその集落範囲は次の通りである。

一、上川　乗ノ名ークウチンコレ
小使ーレヌシハ
（旧暦十二月七）
一、ツカプニコリウン、ペツ迄
乙名ーシレアエフ
小使ーカンナノミ
一、アサカリコリピ、迄
乙名ーニホウンア
小使ーモフクテ
一、チウベツコリヘ、ツ迄
乙名ーシリコフツネ
一、ナイホウ　乙名ーイナラナン

さて、三県時代の上川調査の最初は、内田静等の札幌・根室間の道路開削の適地調査である。内田静は、札幌農学校の第一期生で、特にクラークに強い影響を受けた敬虔なクリスチャン。道庁時代には、殖民地撰定士官、また、鹿児島村の松尾農場の管理者になるなど、上川との縁が深い。

内田静は、札幌農学校卒業後は、開拓使に採用され、明治十四年九月に、十勝・北見・釧路の三方面を巡回し、札幌根室間道路開削ルートの調査をした。翌十五年の調査は、同僚の田内静六等が、五月十八日に札幌を出発、カムイコタンを経て、美瑛川から空知川上流へ出て、空知上流から十勝へ山越えして、約八十日を費やして根室に到着している。内田は東京での結婚式のため参加出来なかった。

明治十五年の「札幌県勧業報告」に、「内田十勝釧路根室北見落州巡回復命書」を掲載。上川原野の開拓、また、上川から天塩等への交通路の視点から、十勝への道路をカムイコタン経由を提唱した。

なお、カムイコタンについては、次のように記述している。

「カモイコタンノ間一里許ハ巌石水底ニ突起シテ奔流急ニ、舟ヲ用ヒ難ニ属ヒ陸路ヨリシテ引ク二非サレバ本上三箇ギリク能ハズ、此ヨリ上流数小舟ヲ通ジ得ル凡六日程ナリト云フ。然レドモ上川アイヌノ知キ能ク熟セルモノニ非サレバ如ヲ期ラス能ハズ」

掲載図は、石の復命書に付された「札幌根室間道路踏査略図」（部分で、原版はカラーである。上川の道路線案は、カモイコタンを通り、美瑛川沿いに空知川上流に抜かれていて、復命書通りである。（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第一週に掲載します

明治15年「札幌根室間道路踏査略図」（部分）

断章
旭川のアイヌ語地名研究
⑧
高橋 昌

1/03/03 (86) ハルシナイから上流へ(11)

連載 旭川のアイヌ語地名研究 ㊻

高橋 昌

―ハルシナイから上流へ⑪―

明治十五年二月に、上川郡は札幌県の管轄となり、その札幌県による上川郡の本格的な調査は、明治十五年にカムイコタンから愛別まで、そして美瑛川筋は辺別川まで、福士成豊によって実施された。

福士成豊は福島に生まれ、英語力をつけるために米ターボ校に五年間勤務、帰朝後(一八六四年)に、後に同志社大学の創始者となる新島襄に出会い、彼のアメリカ密航を手助けし、生涯の親交を結ぶのは有名なエピソードである。また、「ブラキストン線」で知られるブラキストンの気象観測を受け継ぎ、明治五年に函館の自宅に気候測量所を設けた。この測量所が、日本最初の気象測候所であった。札幌の開拓使に勤務してからは、測量・気象観測の中心的な役割を果たしていて、札幌県では地形測量の主任となった。

さて、福士成豊の明治十五年の調査は、詳細な「石狩川上流民地探討復命書」(北海道立文書館蔵)として記録され、その冒頭部分に、付録絵図として「蝦夷図の部石狩出図」があり、「石狩本川筋神威古丹人口北岸山尾二於イテ流蔵石ノ現出セルヲ発見ス」として位置が朱色で明記されている。

福士成豊は補助の平井辰治郎を伴い、九月十七日に札幌を出発、石狩川筋を調査しながら、十月十日にカムイコタン(福士の表記は、カモイコタン、漢字表記は神威古丹―一名我思)に到着した。カムイコタンで一泊し、ハルシナイでは一泊して上流へ向かっている。

福士成豊の復命書に添付された「石狩国各郡(原野気象概況対照表)」には、原則的に、①午前七時、②午後二時、③午後九時の三回の温度・天候が現地と札幌と記載されていて、最後に「異表」として特記事項の記載がある。比較対照の札幌は朱筆されている。

明治15年 福士成豊「蝦夷石狩出図」

因みに、ハルシナイの三日目、十月十三日の午前七時の記録は、「晴雨計二九・二九〇・札幌二〇・一五四(異晴計―華氏三二・〇・札幌二四・〇(同水温度四三・〇(風雨雲晴曇陰晴・札幌・微風晴(異表)雲多メテ降ル(札幌ヨリ寒キ一・二〇)」

この気象概況が、九月十八日のホルノタツフから、復路の江別の十二月十二日まで、休みなく克明に記録されているさすがは日本最初の測候所勤務者と感心させられる。

福士成豊はハルシナイに三泊して、十月十四日に上流へ向かい、愛別川口には十月十八日に到着、二日間調査して、石狩川を下り、二十一日には忠別川合流点に宿泊、ここから美瑛川を溯り、辺別川合流点で二十五日まで調査し、二十六日に再び忠別川合流点で宿泊、翌日、カムイコタンには二十七日に一泊して、札幌に向かっている。

福士成豊は、この調査を通して、石狩川の丸木舟の船賃(舟によって物を運ぶこと、舟運)は、春は五月の上旬より、秋は十月下旬までの六カ月とし、航行の難易で石狩川筋を三区分し、丸堀舟(丸木舟)の大きさを次のように報告している。

「①丸堀舟の雛場―カモイコタンヨリアイベツマデ―丸堀舟二本夫二、米二石(註―二石は一斗の一〇倍、一升の一〇〇倍、約一八〇ℓ)乃至二石ノ積ミ(船ヲ溯ルヲ常トス。②丸堀舟ノ平易場・空知太(註―現・滝川市)ヨリカモイコタンマデ―中型ノ丸堀舟二本夫三名、米四石乃至六石ノ積ミ(船二溯ルヲ常トス。③舟船ノ易場・石狩川河口ヨリ空知太マデ―大中型ノ丸堀舟二本夫二人、米六石乃至八石ノ積ミ(船二溯ルヲ常トス。」

なお、上川原野のアイヌの人たちについては、「戸数概シテ三拾戸、人口百三十五名ヲ為サズ随意二密林ノ中二散居ス。全道沿海ノアイヌトハ大イニ其ノ風ヲ異ニスルモノナリ。」と記している。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1・3週目に掲載します

15/04/07 (87) ハルシナイから上流へ(12)

連載
旭川のアイヌ語地名研究 ㊼

高橋 基

―ハルシナイから上流へ⑫―

明治十四年九月に、樺戸郡紋別郡（現・月形町域）に、徒・流刑等に処せられた重罪犯を収容する監獄（現・刑務所）の樺戸集治監（しゅじかん）とも呼ぶ）が設置された。周知のように、十川遺跡（現・国道十二号の開削と改修や、水山電田氏村の家屋建築など、樺戸集治監の囚徒による十川開発の業績は、計り知れないものがある。

石狩から樺戸集治監までは、公的な道路がまだなく、札幌からも石狩川を丸木舟で二日もかかった。そこで、囚徒の護送や物資の輸送のために、明治十七年に蒸気船と言われた神威丸と安心丸が造られた（『北海道行刑史』『月形町史』）。写真は神威丸で（『写真集えべつ風のまちの歴史』所収）、この船の特色は、蒸気機関を備えた外車船（外輪船）で、川の水量が少ない時でも運行できるように吃水（船が静水に浮かんでいる時の水中に沈んでいる部分の高さ）を、三尺（約六〇㌢）と浅くして、従来の川船やはしけ船を引いて航行できるように造られていることである（『石狩川舟運史』）。

このような状況の中、明治十六年九月三日から十四日まで、樺戸集治監の副典獄（現・副所長）の桜木保文ほか四名が、浦臼地方から十川郡までの「水利、地理、検探の命を拝し」（「ウシ、ヘツ」（現・牛朱別川）までの調査をしている。今回は、この調査団の樺戸集治監御用掛の井上敬之輔の出張復命書でその一部を紹介する。

調査団一行は、九月三日樺戸を出発、カムイコタンに到着したのは、九月八日の午後五時三十分であった。調査団一行は、丸木舟ではなく、蒸気船の「樺戸丸」で遡航して来たのである。管見では、カムイコタンの歴史的に従来の出来事である、復命書では、「本監警備の樺戸丸八（日本形定川船ヲ換造シ船脚（前記の吃水に同じ）二尺五寸（約七六㌢）、喫水九寸（以上ヲ搭載ス」と記録している。紙幅の関係で詳述できないが、この樺戸丸は、明治十七年に愛媛県が建造した同名の樺戸丸ではなく、前述の参考文献にも一切登場しない、謎に包まれた船である（『石狩川島重工株式会社一〇八年史』）。

九威神の船気蒸監

さて、調査団一行は、九月八日にカムイコタンに到着したのであるが、樺戸丸が碇泊した場所は、現在の神居大橋の下流のパラモイ（para-moy広い、湾である）。調査団一行は八日と九日は、樺戸丸の船内で一泊し、「モセウ七（現・妹背牛）から水先案内を依頼した和船に通じたアイヌの「ランケク」を十川に派遣し、十川からの丸木舟の到着を待った。

九月十日午前七時に「ハルシナイに従来で移動を開始し、十一時三十分に、「ランケク」と、チカホニ（現・近文）のアイヌ「シウクシ」「イタンキノ」「アンリキン」が、艘の丸木舟で迎えに来た。昼食後にチカホニに向け出発し、午後六時二十五分に到着し、小屋を築き宿泊する。

九月十一日には、チカホニから、ウシ、ヘツ（現・牛朱別川）に到着、その土地を調査して正午過ぎにつくその後は一気に石狩川を下る。地図のレーコロプイラ（re-kor-puyra名を持つ激流（「有名な激流」の意）は、文化四年（一八〇七年）に近藤重蔵の乗った丸木舟が転覆破船したエピソードのある有名な難所水域で、ここを下る復命書の文章は、緊迫感溢れる名文であるが、紙幅の関係でその項で紹介したい。

カムイコタンの樺戸丸に戻った調査団一行は、樺戸丸で一泊し、翌十二日に樺戸に向かいくり、九月十四日に樺戸集治監に帰り着いた。蒸気船樺戸丸という蒸気船によるカムイコタン踏査の唯一の貴重な記録である。

（アイヌ語地名研究会会員）

※旧月刊誌「潮流」に掲載しました

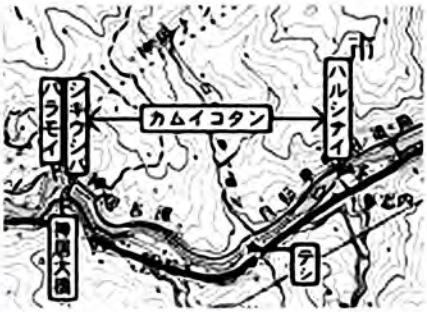
15/05/05 (88) ハルシナイから上流へ(13)

ハルシナイから上流へ⑬

明治十七年、内務省地理局の高橋不二雄は、北海道の中央高地の測量のため、札幌県地理主任の福士成豊と石狩川水源の石狩岳に登頂するなどして、本道の中央高地の詳細を明確にした。このことは、本連載でもしばしば紹介した。

本連載の8では、「神居古潭」の漢字表記は、高橋不二雄が編纂した、明治二十年内務省地理局発行の『改正北海道全図』で、確定したことを紹介した。また、高橋不二雄がこの路程を描いたスケッチ集の『測研画帖』の中から、『地図』のパラモイ(ぱらも・いと・広い・湾)を描いた絵も、紹介したとある。

高橋不二雄は、明治十七年の踏査の記録を『札幌県巡回日誌』として残した。この日誌からカムイコタンに関する部分を中心に紹介する。



高橋・福士一行六人は、八月二十日に丸木舟二艘で江別を出発し、カムイコタンには、八月三十日に到着し、パラモイで露営した。

翌三十一日には、大きい方の丸木舟を陸に上げて、二十町上流のハルシナイまで引き上げさせた。二艘小さい丸木舟の方は、陸に引き揚げて保存した。九月一日には、前日、上川からの迎えの丸木舟二艘でハルシナイに到着していた、アイヌの人たち五人が、ハルシナイから到着翌二日にハルシナイへ荷物を陸送し、ハルシナイで野営。九月三日、八時五分に丸木舟二艘でハルシナイを出発、午後二時五十分に忠別川との合流点に到着、石狩川の左岸で露営した。

九月四日から石狩川水源踏査に丸木舟二艘に乗って出発。高橋・福士一行は、九月二十四日に石狩川水源に到着、石狩川水源の山を初めて石狩岳と命名した。帰途、現・ニセイカウシュッペ山現・旭岳に風雪を冒して登頂し、経緯度・高度を測定し、初めて『改正北海道全図』に記載した。

帰路の十月三十日には、ウエンマクンベツ(旭川市永山町十六丁目)から丸木舟二艘で石狩川を一気に下り、ハルシナイに野営する。ハルシナイからシキウンバの間のカムイコタンは、激流のため丸木舟の往来は不可能と言われていたが、翌三十一日に、同行の四人のアイヌの人たちが、丸木舟で下ったのである。これまで紹介したカムイコタンの踏査録にも、伝承にもない快事が、実行・記録されたのである。

すなわち、同行のイカスケ、イソノスケ、アチキコエス、トツキシの四人が、雑荷のみを丸木舟に積み、ハルシナイからシキウンバの間のカムイコタンと言われた激流を下ったのである。ただし、ハルシナイから一町余下流の「人滝」と言われる大瀑布(?)には、空荷にして丸木舟を下げた。

他方、高橋不二雄と福士成豊は、緊張の物品は、同行の市兵衛、国三郎、イソノスケ、ニカに背負わせ、二人は野帳等を持参して歩行した。高橋不二雄は、掲載地図の★印のテシ(ぱらも・いと・広い・湾)の所で、丸木舟が激流を下ってゆく様子を見て、次のように記述している。

「中途ノ一ノ難場ニテ小休シ、折柄川上ヲ顧ミレバ、遥カニ乗船ノ下ルアリ。瞬間ニシテ余等ガ前ニ来ルヤ否ヤ、大激浪ヲ衝突スル処ニ来リ行スレバ、恰モ該舟ハ本業ノ激浪ニ浮ブニ似テ、今将ニ転覆セントスル形状アリ、傍観モ亦肝冷ヘタリ。其ノ迅速タル如シ、直チニ見取ラナス(註・スケッチを描く)。」

そのスケッチが、『地図』『測研画帖』の原画は彩色である。カムイコタンの唯一無二の貴重な記録である。

その後、パラモイの山腹に保存した丸木舟を下ろして昼食をとり、丸木舟二艘で石狩川を下る。その後も調査を重ねて、十一月十五日に札幌に帰着した。

(アイヌ語地名研究会代表)

「アイヌ往来舟ヲ神シ激流ヲ下ルヲ見ル図」
(上田…丸木舟)高橋不二雄『測研画帖』

※毎月第一週号に掲載します

研究
旭川のアイヌ語地名研究

高橋 基

15/06/02 (89) ハルシナイから上流へ(14)

ハルシナイから上流へ ⑭

明治十八年八月、司法大書記官の次男の岩村通俊は、司法官僚の俊秀、初めて石狩国上川郡を表示することになった。岩村通俊上川紀行（一冊堂保存版原文）によるが、原文は漢文のため「旭川市史第四巻」の村上久吉氏の訳文により紹介する。

岩村通俊は明治十八年八月十五日に札幌に到着し、十九日には現内の検査を開始する。二十日、午後、水山武四郎陸軍少将、平田兵太郎長官、長谷部長官、佐藤孝郎札幌工業事務所長、佐藤孝郎札幌出張所長、佐藤孝郎札幌出張所長、佐藤孝郎札幌出張

―ハルシナイから上流へ⑮―

旭川のアイヌ語地名研究

90

高橋 基

前回までは、安政四年(一八五七年)の松浦武四郎から、明治十八年の岩村通俊まで、カムイコタンを通過、または往復した人物の踏査紀行を通して、カムイコタンに対する個々の感慨や、丸木舟時代のカムイコタンとはどんな所かを紹介してきた。

これまでの記録は、丸木舟が通る春から初冬までのもので、丸木舟が通らない冬の唯一の記録が、安政五年(一八五八年)の松浦武四郎の『戊午加知留宇知之誌』である。そのダイジェスト版が木版刊行された『十勝日誌』である。この記録は、松浦武四郎の蝦夷地行の六回目で最後の踏査であった。武四郎は、蝦夷地新開新道の踏地調査の命を受け、一月二十四日(陽暦三月九日)に箱館を出発、長万部、虻田を通り、中山峠を越えて、札幌を経て石狩に到着した。

松浦武四郎一行は、二月二十四日(陽暦四月七日)に、丸木舟、徒歩で石狩を出発、六泊目のトック(現・新十津川町域)から石狩川は結氷のため丸木舟は使用出来ずに、ここから陸行し、カムイコタンを通り、旭川の忠和の番屋に滞在、各コタンを探訪後、三月九日(陽暦四月二十一日)に十勝に向け出発、美瑛川から富良野川上流へ出て、南富良野の鞍部を越えて空知川上流に出、十勝に山越えして、十勝川を下って、三月二十日(陽暦五月二日)に大津に到着するこの踏査の締め括りへの公的報文日誌が、『戊午加知留宇知之誌』である。

トックからなお、一泊し、内大部川を越えて、北海道指定文化財の神居古潭竪穴住居遺跡前を流れるラウネナイ(rawne nay 低く深く掘れた・沢)の山側の麓の古穴という大きな岩穴の雪を取り除いて、松浦武四郎ら三人が入り、他の八人はその側にキナ(kina ガマの茎で織ったゴザ)で屋根を作り止宿した。但し、右のラウネナイは、松浦武四郎がこの踏査に持参した野帳(フィールドノート)の『午第一番』と『十勝日誌』では、フラノナイ(o-ran-nay 川尻・低い・沢)と記されている。

翌三月二日(陽暦四月十五日)、東雲頃(不明)より出立する。以下、ハルシナイまで、前年の安政四年の『再航石狩日誌』の十一個のアイヌ語地名とその冬景色が記述されている。

旭岳のアイヌ語名…安政5年『午第一番』

前回まで見てきたように、丸木舟の場合は、ハルシナイから再び丸木舟に乗って上川に向かうのであるが、陸行の松浦武四郎一行は、明治地図のアソナイを過ぎて、ペンケアソナイ(pen ke-as-o-nay 川上の・柴木・多い・沢・現・神居沢・陸川)からは、遠回りになる石狩川沿いに歩かないで、この沢から山に入り、山越えして上流に向かったのであった。これがアイヌの人たちの交通路であった。

実は、明治十九年六月二十四日に竣工の上川仮新道(国道十二号の前身)は、明治地図の石狩川沿いの旧国道十二号を通らずに、松浦武四郎一行が通ったアイヌの人たちの通路だった山道を通ったのである。明治二十年十月の初代北海道庁長官の岩村通俊一行、明治二十一年九月の二代北海道庁長官の永山武四郎一行もこの山道を通ったのであった。この通路については、ペンケアソナイの項で詳述したい。

さて、明治地図は、この踏査の野帳に描かれた石狩岳(現・旭岳)のアイヌ語名のノタツカウシベノホリ(ヌタッカウシペヌプリ nutap-ka-us-pe-nupuri 山の上の湿原・の上・にある・もの=山・山田秀三説)である。旭岳のアイヌ語名が初めて記載されたもの。文化四年(一八〇七年)、近藤重蔵は、『蝦夷地図』にオッタテシケ山と書き、前回紹介した福士成豊の『上川原野見取図』では、大雪・十勝連峰をヲプタテシケ山脈(オッタテシケヌプリ(op-ta-teske-nupuri 槍が・そこで・はねかえった・山・山田秀三説)と書いていて、時代・伝承者によりアイヌ語の山名も異なるという典型的な例である。

(アイヌ語地名研究会会員)

※毎月第1週号に掲載します

15/08/04 (91) ハルシナイから上流の地名(1)

断章
旭川のアイヌ語地名研究
91
高橋 基

ハルシナイから上流の地名①

明治十九年六月二十四日に上川仮新道開通式の前夕が挙行し、カムイコタンの丸木舟時代は終わりをつげた。前回は、丸木舟時代の冬季にカムイコタンを踏査した唯一の記録である、安政五年(一八七六年)の松浦武四郎の記録を紹介した。

掲載地図①は、現行の国土地理院の五万分一地形図に、安政五年に松浦武四郎が歩き、記録したアイヌ語の河川名のハルシナイ、アソナイ、ペンケアソナイをゴシック体で入れたものである。アソナイの河川に現在の公式河川名の神居第三線川と見える。ペンケアソナイは掲載地図では見えないが、神居第三線川、ハルシナイは、神居第四線川と掲載部分外に記されている。ハルシナイのように神居古潭の歴史的地名が、現在は、神居第四線川という、実に味気のない番号川になっている。

さて、ペンケから、ハルシナイから上流の石狩川筋のアイヌ語地名を紹介していくその際、アイヌ語地名の意味と、そのアイヌ語地名の現在の河川名や土地名を表示することとする。

掲載地図②は、明治三十年製版の仮製五万分一図を、河川名を見えるようにしたものである。ハルシナイは、アルウシュナイ、アソナイは、ハンケアッウシュナイ、ペンケアソナイは、ペンケアッウシュナイとなっている。これは明治二十三年三月、上川を調査した水田万正が明治二十四年に『北海道蝦夷語地名解』を出版し、掲載地図①のハルシナイ、アソナイ、ペンケアソナイについて、次のように地名解をしている。この水田万正のアイヌ語地名解が、掲載地図②に記されて公式河川名になっていたのである。

—ハルシナイの水田万正の地名解—

アル ウシュ ナイ(aru-usu-nai)—樹—食糧ヲ「アル」ト云フ。大川ノ「ヒリ」(註—石狩川のうずまき)ノ岸ニ丸小屋ヲ作リ、魚ヲ捕リ此ノ「アルウシュナイ」ヨリ陸揚ゲシテ食糧ニ備フ。故ニ此名アリ。存志内トアルハ、上川アイヌノ辞ニアラズ。

—アソナイの水田万正の地名解—

ハンケ アッ ウシュ ナイ(panke-at-usu-nai)—下流—ケノ(アイヌ)「アソナイ」下ニヲハ、ナリ。此川筋樹多シ。故ニ名ク。樹アリ、註(註—「註」は原文の漢字)水樹ト云フ。

—ペンケアソナイの水田万正の地名解—ペンケ アッ ウシュ ナイ(pe-ne-at-usu-nai)—上流—此川筋二樹多シ。樹アリ、要水樹ト云フ。

アイヌ語地名は、採録者によって、大きく異なる典型的な例である。掲載地図③は、文政四年(一八二一年)頃作成の間宮林蔵の(仮称)『北海道全図(河川図)』のハルシナイ。掲載地図④は、松浦武四郎の『東西蝦夷山川地理取調図』のハルシナイとアソナイ。掲載地図⑤は、高橋不二雄の明治二十年刊行の『改正北海道全図』のハルシナイとアソナイである。これらの信頼できる地図からも、石の三川のアイヌの人たちの呼称は、ハルシナイ、(ハンケ)アソナイ、ペンケアソナイが正しいものと判断できる。

次回は、ペンケアソナイの山道を紹介する。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※前月号一週間に掲載します

15/09/01 (92) ハルシナイから上流の地名(2)

連載
旭川のアイヌ語地名研究
92
高橋 昌

ハルシナイから上流の地名②

安政五年(一八五八年)、松浦武四郎は、上川から十勝への山越えのために、三月二日(陽暦四月十五日)にカムイコタンを徒歩で通過した。地図のハルシナイを通って、ペンケアソナイ(penke-a-so-nay 川上の・奥・ある・沢)から、川沿いに上流に歩いて左側の山に登り、そこから峠を越えて、石狩川の上流方面に山越えしたのであるこのように、降雪の頃に山越えする道がマタル(anta-ru 冬・の・道)と言われていた。石狩川の上流側には、前年に松浦武四郎も『再撰石狩日誌』で記録した地図のルチンポコマナイ(rusi-pok-ma-nay 峠・下・に入って行く・沢)がある。丸木舟の通らない冬季は、アイヌの人たちは、近道のこの間を山越えしたのであった。

明治十九年六月二十四日に、樺戸集治監の囚徒によって造工した上川仮新道(国道十二号の前身)は、このアイヌの人たちが利用した山道を活用した道路であった。

明治二十一年九月二十二日、上川巡察の第二代北海道長官の永山武四郎一行は、この山道を通り上川に赴いた。同行した北海道毎日新聞記者の野中樵泉は、次のように報告した。

「(存志内)三室ル、河源アリ、石狩川ニ合スル所、丸木舟、三ヲ繋ケリ。是第二章小屋アリ。(中略)字武甲社会領内、及ビ、辺武甲安領内ヲ過キ、石狩川ヲ辞シテ、山ノ平間二通セル羊腸タル小径ヲ登ル。山頂二程標アリ、(距空知川十一里)下書ス。此山嶺中腹ヨリ以上樹松繁茂シ、風致甚タ佳。山径ヲ下リ、字達磨似二室ル、既ニシテ坂路アリ、之ヲ下ル。右ノ方ヲ見レバ、十勝ノ連山樹林ノ間ニ隠見ス。字伊野二室ル(註―この項は、新聞マイクロ欠号のため、明治三十五年刊行の林顕三『北海道紀行』からの転載)

右の新聞記事の(達磨似は、地図のラ=マニウンナイ(rar-mani-un-nay オンコ=イチイの木・群生する・沢)の和人語である。なお、当連載92で、右の上川仮新道の山道と、松浦武四郎が通った通路が同一としたが、パンケアソナイ経由は同一であるが、ルートは別であるので、訂正させていただく。

明治二十二年に、再び樺戸集治監の囚徒の労役によって、上川仮新道の改修工事が行われた。地図の旧国道十二号が石狩川沿いに造工事の末に開削されたのである。アイヌ古道とは全く別の道路が作られたのである。

平成二十一年三月二日、地図の「存志内トンネル(八〇五m)」が開通する。旧国道十二号の石狩川沿いの道路は、「存志内の大曲り」と言われた交通上の難所であり、また、石狩川の増水による国道の冠水、崩れなどが頻発した。このため旭川開発建設部が、防災対策として、昭和五十九年から工事に着手していたものである。国道十二号が、最初はアイヌ古道に付けられ、次は石狩川沿いの道になり、最後は存志内トンネルとなるという歴史が展開されたのである。

前回紹介したように、「ハルシナイ」という、由緒あるアイヌ語地名が、明治二十四年の永田方正の『北海道蝦夷語地名解』によって、「存志内トアルハ、上川アイヌノ辞ニアラズ」として、「アルウシュナイニシテ」明治三十年の『北海道仮製五万分一図』からは、「アルウシュナイ」と記された。さらに、昭和になって、公式河川名は「神居第四線川」という味気のない番号川になってしまった。

しかし、地図に見えるように、ハルシナイのアイヌ語河川名の上部に、字名として「存志内」が残り、ラ=マニウンナイの右に、(神居町字)存志内の字名も残れ、それに加えて、新たに「存志内トンネル」として、歴史的地名のハルシナイの名前が残されたのは、幸いであった。

※毎月第一週目に掲載します

15/10/06 (93) ハルシナイから上流の地名(3)

連載
旭川のアイヌ語地名研究 ㉝

高橋 基

―ハルシナイから上流の地名③―

前回は、ハルシナイから上流の国道12号の歴史を見てきた。今回は、今年の四月十一日に八十八歳でしてなられた秋葉實氏の書かれた『松浦武四郎 上川紀行』(平成十五年刊行、旭川叢書第二十八巻)から、『**開拓地図**』の「ハルシナイ」と「アソナイ」の地名解の検討をさせていただく。

周知のように、秋葉實氏は、松浦武四郎の著作を解読・紹介し、松浦武四郎の業績の評価を高め、その著作を通して北海道の近世後期のアイヌ史解明に多大の貢献をされた。昭和五十九年から平成二十一年まで、松浦武四郎研究会会長を務められ、平成九年のアイヌ語地名研究会の立ち上げにも参画され、晩年までアイヌ語地名研究会顧問もされていた。

写真①②は、それぞれ松浦武四郎の自筆であるが、秋葉實氏の解読がなければ、一般的には読解できなかった。アイヌ語地名研究では、秋葉實氏の解読がなければ、松浦武四郎関係の正確な地名解はできなかった。

『松浦武四郎 上川紀行』は、本稿でも取り上げている、松浦の『西蝦夷日誌』や『登加智留知之誌』の紀行内容を、簡潔で分かりやすく、かつ、内容深く紹介している。その中から今回は、ハルシナイとアソナイの地名解を実例に沿って検討させていただく。

写真①は、松浦武四郎が、安政四年(一八五七年)に持参した野帳(フィールドノート)の『巻第二番』のハルシナイからペンケアソナイまでのシイピラサ(五十二歳からの聞き書きの部分である。(以下、解説は全て秋葉實氏によるものである)

「ハルシナイ 石
飯料の事也。此処上下より来るもの

写真②　写真①

皆負荷にて飯料置より云り
ニツニカモイ　左岩　魔の頭知也有
アソナイ　石
ペンケアソナイ　石」

この野帳を元に、『西蝦夷日誌』では、次のように解説されている。

「ハルシナイ―石の岸小川、幅六間計急流也。ハルは食物の事也。此処上るものも上るものも、此処又飯料置処なるが故に呼ぶ也(以下略)」

この部分は、『松浦武四郎 上川紀行』では、「ハルシナイとは食べ物の多い沢という意で、トレプ(大蛇)石(ト)とかフクサ(行者蒜)などの食草が豊富で、(以下略)」と、知里真志保の地名解を書いている。

丸木舟時代は、シキウシベとハルシナイ間は、激流のために丸木舟が通れず、上りも下りも荷物を背負い運搬したので、ハルシナイに携帯食料をいつも置いていたので、ハルシナイ(ha-ru-nay 携帯食料・いつも置いてある沢)と名付けられた―との伝承は、『上川紀行』では、残念ながら省かれている。

写真②は、『西蝦夷日誌』のペンケアソナイの前半部分である。秋葉實氏の解読文では、次のようになっている。

「石の方滝一すじ有。則是を云也。矢勿峡敷して四人の名は甚辛す。(以下略)」

秋葉實氏は、石の文の「石の方滝一すじ有。則是を云也」から、アソナイは、間宮林蔵のデータによる、「校の地図」にある、「ヲショナイ(o-so-nay 川口・滝ある沢)であると指摘をされた。

しかし、秋葉實氏が読まれたヲソナイは、武本の市立図書館本の謄写で、松浦武四郎の記録は、**写真①②**を含めて全てアソナイである。したがって、当時の呼称はアソナイで、アソナイ(a-so-nay 柴木・多い・沢)と推量される。

秋葉實氏の松浦武四郎文書の解読と、『松浦武四郎 上川紀行』の名著刊行に、深甚の感謝を表して、結びとさせていただく。(アイヌ語地名研究会顧問)

※毎月第一週号に掲載します

15/11/03 (94) ハルシナイから上流の地名(4)

―ハルシナイから上流の地名④―

今回は、新しい説者から地獄地図のニッネカムイサパ(鬼の首)と、ニッネカムイ閥道の説明をしてほしいと要望もあり、ハルシナイ上流の地名の意味からも、再度の説明と、アソナイフィラについて解説をさせていただく。

安政四年(一八五七年)五月二十六日(陽暦六月十七日)に松浦武四郎はこの地に来てアイヌの人たちから、鬼神と言われたニッネカムイ(nitne-kamuy)伝説を聞き、見聞した野帳(フィールドノート)『日誌』第二番目に、その伝説の岩をスケッチした。写真①がそれで、地獄地図の左岸のニッネカムイの大岩になった二ツニカモイが描かれ、右岸には神(サマイクルカムイ)に切られて飛んで行った、二ツニモイシャパ(鬼の目)の岩が描かれている。この伝説を松浦武四郎は、幕末日誌の『豊羅石狩日誌』に次のように記述した。

「二ツツイカモイ―左注・上流に向かって左=右岸の方角に、高さ二丈計(約六㍍)の人の首の如き岩有り是を鬼の首なりと云ふ。アイヌ尊此前へ不幣を捧て奉る。二ツツイと云ふは鬼の事也。カモイは神也。昔、鬼此処まで上り神と合戦をして、神に負けて切られし首なりと申し伝えたり」

写真②は、「鬼の首」の現在の姿である。他方、左岸の「鬼の眼」について、松浦武四郎は、次のように記録している。

「カモイ・ポトパケ(nitne-kamuy-potpake鬼の・眼)―山岸に高さ七八丈(約二十一～二十四㍍)の大岩二ツ有り是は二ツツイカモイの眼の出也。子トパケは母と云事。此処も急流なるが故に、両人岩の上を乗り、四人に捕さし申す上る也」

松浦武四郎が見た「鬼の眼」の大岩は、国道十一号線の拡張工事で、破壊されるところを、地獄地図の二ッネカムイ閥道を作り、アイヌ伝説の大岩が幸うして保存された。写真③は下流から見た「鬼の眼」の遠景。写真④は、上流側から見たもので、下の道路が旧道である。写真⑤は、対岸から見たもので、二ッネカムイ閥道によって「鬼の眼」の大岩の姿が残されたことがよく分かる。(この項は、当連載の65・67・76を参照下さい)

さて、次に、「アソナイフィラ」については、松浦武四郎は次のように述べている。

「アソナイフィラ―アソナイの二十間(約五十五㍍)計前に大岩突出し居るに、水打殷設立会、フィラは設立事也」

松浦が記述したように、フィラ(nuye)は設立つことで、丸木舟の艤装である。知里真志保は、『地名アイヌ語小辞典』で、「nuye-ta フィラ・渦巻の群在する水面・渦巻(うずしお)・激渦(ぬさたん)」と説明している。海は、潮の満ち干で、激渦―激流の意味である。

右の松浦の書いたアソナイフィラと前述のカモイ・ポトパケは、ペンケアソナイの後に書かれていて前後が異っているが、松浦の野帳のスケッチと現状から地獄地図のように位置を特定した。

なお、ハルシナイ(現・神居第四橋川)から上流のオンネナイ(現・神居第一橋川)までの約七㌔の石狩川の流れに、松浦武四郎の記録を見ると、アソナイフィラのように名前のついたフィラ(設立・激流)が、地獄地図の二カ所の他、合計五カ所ある。カムイコタンの上流は、上川のアイヌの人たちでなければ丸木舟を操船できないと言われた所以である。次回はそのフィラ(設立・激流)の代表のレーコロフィラ(re-koro-nuye)名前を持つ・激流・有名な激流)を紹介する。アイヌ語地名研究(高橋基)

※毎月第一週目に掲載します

①「鬼の首」

②鬼の首　③鬼の眼

④鬼の眼　⑤鬼の眼

連載 旭川のアイヌ語地名研究 ㊹

高橋 基

15/12/01 (95) ハルシナイから上流の地名(5)

ハルシナイから上流の地名⑤

ハルシナイから上流で、丸木舟でカムイコタンまで下る時の最大の難所が、**蝦夷地図**のレーコロフィラ（ra-kor-puyra 名前を持つ激流）と有名な激流の意味であった。

文化四年（一八〇七年）十月十四日、近藤重蔵が乗っていた丸木舟が転覆破船し、一〇〇間（約一八〇メートル）程下流に流され、御朱印まで濡らしたという有名なエピソードがあるが、その転覆した場所がこのレーコロフィラであった。昔は、近藤重蔵が丸木舟で転覆の難にあったのは、カムイコタンとだけ知られていたが、近藤重蔵日筆の「金銀遺佚帳」（『近藤重蔵蝦夷地関係史料』）で、「レイコルフエラニテ破船」との記述から、転覆破船した場所がこのレーコロフィラと判明した。近藤の表記は、レイコルフエラであったことも明確になった。

なお、近藤重蔵は、十月一日に天塩から天塩川を溯り、上流のノカナンから比布のタナシに山越えし、比布の番屋に宿泊、十月十二日に旭川のチユクベツフト（現・忠別川川口）の番屋に宿泊した。近藤はこの間の川筋図を、約十六㌢×㌢の巻紙に記録し残した（当連載②参照）。この川筋図は、現存する当地方最古の記録であるが、レーコロフィラでの丸木舟の転覆によって、用紙や矢立などの流失等で、旭川以降の記録は残されなかった。文化期の石狩川流域の地誌を知る貴重な記録が中断したのは、誠に残念なことであった。

①近藤重蔵「蝦夷地図」（部分）

②レーコロフィラを下る

写真①は、文化四年に近藤重蔵が作成した「蝦夷地図」の写図（高木崇世芳氏旧蔵）のカムイコタンの部分である。「〇テン五リ半」とあるのは、「〇テシ」の誤写で、「五リ半」とあるのは、旭川のチユクベツフトの番屋からの距離を表わしたものである。十月十四日、チユクベツフトの番屋を出発した近藤重蔵一行は、レーコロフィラで丸木舟が転覆し、ハルシナイで露宿したと、一般的に思われていたが、「蝦夷地図」によって、カムイコタンのテシ（nisi 岩壁）で露宿したことが判明した。

「テシ」の下部の書き入れは、「カムイコタン前後一里程之間川岸ヨリ山際エ険岨ニテ其外一同平地林シ」とあり、これは近藤重蔵のカムイコタンの所見である。

さて、当連載②で、明治十六年九月十一日、職工兼測量の調査団一行が、「ウシ、ヘツ（現・牛朱別川）からの舟途、このレーコロフィラの危険水域を下る際の調査復命書の要項感溢れる文章を紹介する旨を約した。左がその復命書の当該部分で、転覆の危機感溢る文章である。

午後四時頃、**ケイコロフイラン**（註―レーコロフィラの表記）ノ岩瀬ヲ渡スニ臨ミ、激浪凄河ノ気勢ヲ帯ビタル如キアイヌ提琴ノ色ヲ顧シ、船頭二祭ル「イナウ」（註―イナウ inau 木幣）ヲ献キ、**ハクカ、モイ**（註―ワッカウシカムイ sakkausi-kamuy 水に住む神・水の神・行狩川の神）ヲ祈リ水中ニ投シ、舵ヲ叩キ激浪ヲ潜ル間、四四、一繋医ニ水溢レ殆ニ沈没セントス、其危険実ニ名状スベカラズ、漸クニシテ岸ニ達スルヲ得、一行ハ眉ヲ開キ偉安神ノ色ヲナセリ。実ニ此行最大一ノ危険ナリキ。午後五時頃「ハルシナイ」ニ着ス（以下省略）

写真②は、昭和六十三年七月二十五日に、四人乗りのゴムボートで、レーコロフィラを下った時のものである。季節・水量により状況が異なるが、ここの大渡にはやはり緊張を感じた。

次回は、**蝦夷地図**のトッレフサラニアと、その位置関係からレーコロフィラの場所も再検証する。（**アイヌ語地名研究会**）

※毎月第1週号に掲載します

断章

旭川のアイヌ語地名研究

㊤

高橋 基

16/01/05 (96) ハルシナイから上流の地名(6)

研究
旭川のアイヌ語地名研究
㊿
高橋 基

―ハルシナイから上流の地名⑥―

前回は、ハルシナイから上流の最奥所である[illegible]のレーコロプィラ（re-kor-puyra 名前・を持つ・激流・「有名な激流」の意味）を紹介した。安政四年（一八五七年）、松浦武四郎は『丙寅日誌』で、このレーコロプィラから四ー（約四・六キロ）上流に、[illegible]の伝説の大岩のトゥレッサラニプ（turesp sarunip ガオウバユリの鱗茎・―を入れた―さけ（籠）があると記録している。

トゥレッサラニプは、カムイコタンのニッネカムイ（nitnekamuy 鬼神・魔神）伝説では、石狩川最上流の伝説の大岩である。既に、当連載68、69で紹介したが、その時は地図上の位置を明示できなかったこともあり、ここで改めて説明をさせていただく。また、この大岩の四ー下流にレーコロプィラがあったとのことで、次回にかけてその位置を検証したい。

写真①が、トゥレッサラニプの伝説の大岩で、[illegible]のように、石狩川の左岸の崖近くにある。松浦武四郎は、トゥレッサラニプは、ニッネカムイ（松浦の表記ではニツイカモイ）が、落命する時に捨てたサラニプ（さけ籠）で、それが石化したものと聞き、「丙寅日誌」に次のように伝説を書きとめた。

「トレッサラプ一大岩一ツ石（註―上流に向かって石―左岸）の川岸に突出す。トレプは鹿、熊、狐、貂、松前方言ウバユリと云。京都辺の山にてはガウユリ、また二名鹿かくれ百合と云もの也。蕗（註―アイヌ語）足をトレプと云、山中の霧雨の喚料に大低是を当るもの也。むかし其トレプをサラプと云ものに入れて、此処迄ニイツイカモイ持ち来り、此処にて命終りて捨てたるが石に化せしと云処也。サラプは次に図する如し（**写真②**）。アイヌ等山に行く、また川に行く時、喚料其外の具等を入れて持ち行くもの也。本邦にてコダシ（註―小出し）ウゴ（註―俗）等云もの也。熊皮（註―熊の本の皮で作った袋）にて編みて用ゆ。」

②「サラ子プの図」

①トゥレッサラニプ

写真①の大岩は、武四郎が描いた**写真②**の「サラ子プ（さけ籠）の図」に酷似していて、実はこれはニイツイカモイ（nitnekamuy 鬼神）が、捨てたものが、石化したものだという。

松浦武四郎が書いた、ダイジェスト版の『石狩日誌』の記述は次の通りであるが、この中で鬼神ニイツイカモイの伝説を口外することは禁忌、タブーであったと明らかにしたのは、当時のアイヌの人たちの慣習を知る上で、貴重な記録となっている。

「トレッサラプと云、彼鬼神の携へ居たりし熊、狐、貂（トレプ）―和名鹿かくれ百合という―を入れし籠（サラ子プ）の化石なりと。聞くに此鬼神には種種の秘法も有りしが、アイヌ等他に語ることを禁せりとかや。」

さて、石のような重要な伝説の大岩であるが、明治二十三年にこの地を調査した永田方正の『北海道蝦夷地名解』には、全く記述がなく、脱落している。

昭和六年発行の近江正一著『伝説の旭川及其附近』では、松浦武四郎の記録と同様の伝説が、簡潔に記述されているので、最後の部分のみ紹介する。

「…そしてニチエネカムイの首は岩となり、ニチエネシキパ（鬼の首）となり、胴体は立岩ニチエネとなり、持ってたラプ（籠）は化石となってドレップサルネップとなった。ドレップはつば百合、サルネップはラプの意である。」

次回は、トゥレッサラニプの異説の紹介と、レーコロプィラの位置の検証をする。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

16/02/02 (97) ハルシナイから上流の地名(7)

研究
旭川のアイヌ語地名研究
97
高橋 昌

ハルシナイから上流の地名⑦

前回は、**地図**のトゥレプサラニプ（turep-sarani オオウバユリの鍋茎）を入れた（手さげ籠）の大岩＝**写真①**＝は、安政四年（一八五七年）に松浦武四郎は、ニッネカムイ（nitne-kamuy 魔神・魔神。松浦の表記はニイツイカモイ）が、落命する時に捨てたサラニプ（手さげ籠）が岩と化したものと記録したことを紹介した。また、昭和六年、近江正一も伝説の旭川及其附近で、松浦武四郎の伝承を踏襲したとも記した。

ところが、昭和二十年に更科源蔵は、『北海道伝説集・アイヌ篇』で、仲沢クラさんの母の川村ムイサシマツ氏伝として、この大岩は、ニッネカムイではなく、文化神のサマイクルカムイの忘れた籠であるという伝承を次のように書いている。

①トゥレプサラニプ

「サマイクルカムイの漁をする小舟が、今も伊能（註―伊納）の駅の辺りに岩になっている。それから蛇白合を入れた籠は、魔神のものではなく、サマイクルカムイのもので、その籠を忘れて行ったので、その附近には今も蛇白合が沢山とれるのだという。」

伝承者によって伝説も変わるという典型の一つである。同じように昭和三十五年に、知里真志保も『上川郡アイヌ語地名解』において、伝承者は明記していないが、**写真①**の大岩はサマイクルの手さげ籠として、次のように地名解を書いている。

「サマイクル・トゥレプ・タ・サラニプ（sapeykur-turep-ta-sarani サマイクルが・ウバユリを・掘った・手さげ籠）―これも岩と化してから間に近い河中に立っている。」

このように、トゥレプサラニプの大岩は、伝承は変化しても、その特色ある姿から、後世までその場所も特定されている。

ところが、ハルシナイから上流の最難所である、**地図**のレーコロフィラ（re-kor-pewra 名前・を持つ・激流）（有名な激流の意味）は、上川郡殖初の五万分一地形図である、明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』の位置の誤りもあって、その位置の比定がされていなかった以下、次号にかけて、場所の特定と地名解を検討する。

松浦武四郎は、安政四年の調査に携行した**写真②**の野帳（フィールドノート）の「巳第二番」では、レーコロフィラとトゥレプサラニプについて、次のように書いている。

②「巳第二番」

「レーコロフイラ　三ツ有り岩角を行也。

四丁

トレプサラニ（註―プが脱落）神霊のよし。鬼此処へムハイ火（註―ウバユリをコタン（註―コタス）籠の一種）へ入れしと云」

また、松浦武四郎は幕府に提出した『蝦文日誌』の『再為石狩日誌』では、次のように記録している。

「レイコロフイラ―大岩川中に三ツ有其の左右向い浪立よりけること也。また少し上り、四丁、此処も角岩を引く（註―岩角を見がかりとして、丸木舟に綱をつけて引き上げる）。トレプサラ子ノ」

松浦武四郎は、レイコロフィラは、川中に大岩が三個あり、それに川水が当たり浪が立つので、レイコロフィラ（re-kor-pewra 大岩・三つ・持つ・激流）と名付けられたとしている。また、そこから四丁上ると、**写真①**のトゥレプサラニプの大岩があると記している。

松浦武四郎のこれらの記録と、後世の記録と見比べ検討し、次号でレーコロフィラの位置と地名解を明確にしたい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第一週号に掲載します

16/03/01 (98) ハルシナイから上流の地名(8)

―ハルシナイから上流の地名⑧―

明治二十年五月に、十川仮新道の忠別太～新太間の改修工事が着手、十二年九月に竣工する。**地図**①現行図の山国道十一号は、この時初めて開削されたのである。

明治二十三年、水田万正は十川を調査し、明治二十四年に『北海道蝦夷語地名解』を刊行し、**地図**①のレーコロフィラについて、次のように書いた。

「レイ コロ フィラ(rei-koro-pira 有名ノ激湍―此庭ニ後道アリ、名御ノ後ト名クルモ可ナルベシ。(前は、川御の意味)

後道とは、「切り立った山腹や崖などに沿って、ボルで棚のように張り出して設けた道」(『大辞林』)である。明治二十二年に水田万正が調査したレーコロフィラの左岸は、このように後道もある状況だったのである。

ところが、松浦武四郎がレーコロフィラの四―十滝にあると書いた**写真**③のトウレツサラニ(tureci-zaraniピオウバユリの鱗茎―を入れた―手さげ籠)は、水田の右の書には、脱落していて記載されていないのである。

さて、明治二十年に当地方初の五万分一の地形図の北海道仮製五万分一図が製版された**地図**②「仮製五万分一図」が、カムイコタンとその上流部分図である。この地図の河川名は、基本的には水田万正の『北海道蝦夷語地名解』の河川名が記載されている。

しかし、水田万正が書いたレーコロフィラ(**写真**①を見ず)が、カムイコタンの下流のカムイウッカ(kamuy-ukaカミ・道)の所に誤って記されその上、現在の神居古潭大橋の位置に、「名御後」と誤って書かれている。明らかに、水田万正の地名解のレイコロフィラが、誤って、ここに書かれたのである。

他方、本来のレイコロフィラの位置には、「チノ子ハッタラ」(山国道十一号の開道の所には、「前渕後道」と書いてある。これは、『北海道蝦夷語地名解』のレイコロフィラの次項の上流の地名解がこの位置に書かれたもので、明確な誤りである。

さて、昭和三十五年に、知里真志保は、『十川郡アイヌ語地名解』で、「レーコロ・フィラ(re-kor-pira)名をもつ・激湍」と地名解するが、その位置を、誤って**地図**①のトウレツサラニの一流としている。また、当連載②で

写真④のようにボートで調査をしても、松浦武四郎が書いた「大岩二ツ」は、実在していなかった。これは、松浦武四郎が、自己のアイヌ語の知識で、「レイコロフィラ(re-kor-pira 三ツ持つ・激湍)と解釈したが、レ(re三つの)は、連体詞なので、修飾詞のコロ(kor を持つ)に続くことは不可で、文法的に誤用なので、「大岩二ツ」が実在しないのは当然であったのである。

結論として、地名解は、レーコロフィラ(re-kor-pira 名前を持つ・激流・「有名な激流の意味」)その位置は、**地図**①現行図の当該位置が正しいと判定した。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一・四週に掲載します

も指摘したが、**地図**②のカムイコタンド流の誤った位置のレーコロフィラを見て、右と同一の地名解を記した下で、「前渕カムイ・ウッカ」と同じものか。と解説をしている。以上の二点からも、知里真志保が情報収集した古老たちも、このレーコロフィラについては、その場所はもはや忘れ去られていたことが判明する。

最後に、安政四年(一八五七年)に松浦武四郎が書いた、「レイコロフィラ―大岩川中に三ツ有、其左右向渡立よりゆること曲」の一文について検討する。

新章 旭川のアイヌ語地名研究 ㊿

高橋 基

16/04/05 (99) ハルシナイから上流の地名(9)

旭川のアイヌ語地名研究 ㊾

高橋 基

―ハルシナイから上流の地名⑨―

今日からは、明治地図のトウレフサラニ(tureh-sarani オオウバユリの鱗茎)を入れた一連の伝説の大岩から上流のアイヌ語地名を紹介する。

この伝説の大岩の対岸(右岸)の小さな沢のアイヌ語名が、シネウシナイである。この川は、『北海道河川一覧』や、現行の一万五千や五万分・地形図には河川名の記載がない。前号で紹介した、明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』に掲載された『アイヌ語の河川名』は、シュ子ウシュナイである。

これも前号で解説したところであるが、石の『北海道仮製五万分一図』は、明治二十四年発行の水田万正『北海道蝦夷語地名解』に記載のアイヌ語の河川名等を地図上に落としたものである。

周知のように『北海道蝦夷語地名解』のアイヌ語地名は、原則的には河川毎に、例えば、上川郡であれば、「石狩川右岸」「石狩川ノ左」、石狩川の川中は、「本川」などとアイヌ語地名の位置を表示している。ただし、地図上の表示がないので、前号で紹介したように、『北海道仮製五万分・図』では、レーコロフィラ(re-kor-pera 名前・を持つ・激流)「有名な激流」の意味)が、実際よりも、パ(pa)下流のパラモフ(para-mo 広い・淵)の下流にあるカムイウッカ(kamuy-ukka 神・の・出・の位置に誤って記載された例もある。

さて、シ子ウシュナイについて、水田万正は、「本川の右(註―石狩川の右岸)とした上で、次のように地名解をしている。

「シ子ウシュナイ(shine-ush-nai 神火酒エタル川)―鮭ヲ捕ルトキ松明ヲ消ルト云フ」

②松浦図

①『北海道二編』

この小さな沢で、篝に鮭を捕っている時に、松明が消えたのでこの川の名称となったというのである。

他方、知里真志保は、昭和三十五年の「上川郡アイヌ語地名解」で、次のように書いた。

「シュネウシナイ(ushne-ush-nai 松明・多くつく・沢)―「シュネ」は樺皮の束に火を点じて鮭をとる時に用いるもの。この沢で鮭の夜漁が篝に行われたのであろう。」

水田万正も知里真志保も、調査時に古老から情報収集したのであろうが、この小さな沢での漁が、水田は鮭漁、知里は鮭漁と聞き、水田は松明が消えた(ush-i 消える)と訳し、知里は松明が篝に対されていると解している。伝承によってこのように違ったのであろう。

安政四年(一八五七年)に、丸木舟に乗ってここを上流に上った松浦武四郎は、幕府への報文日誌の「西蝦夷日誌」では、この川のことは一切触れていない。しかし詳細に調べてみると、聞き書きとしては記録されながら、理由は不明であるが、右の報文日誌には、記述されなかったことが判明した。

写真①は、この調査に携行した野帳(フィールドノート)の「百景・番」の記録である。ハルシナイで鮭漁をしていた五十二歳のシピラサが述べた聞き書き部分で、下流から順に、「①シ子ウシナイフイラ 大岩ノ流 ②レーコロフイラ 大岩ノ流ノ淵 ③トレフサラニ 神岩也と ④ヲ、コツナイ 左」と書かれている。

写真②は、松浦武四郎が安政六年(一八五九年)に作成した『東西蝦夷山川地理取調図』の部分で、右岸の下流から、①シ子ウシナイ ②レイコロフイラ ③ヲ、コツナイ と記載され、左岸には、「トレフサラ子」の記載がある。

松浦武四郎のこれらの記録は、レイコロフイラの位置は誤っているが、シネウシナイやシ子ウシナイフイラが実在していたことが証明された。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※四月号―四号に掲載します

16/05/03 (100) ハルシナイから上流の地名(10)

連載 旭川のアイヌ語地名研究 ⑩

高橋 基

ハルシナイから上流の地名⑩

地図は、安政四年(一八五七年)、松浦武四郎がアイヌの人たちが漕ぐ丸木舟に乗り、ハルシナイから上流へ上りながら、地名を記録し、幕府への報文日誌の『丑寅日誌』に記載したものを、現行の五万分一の地形図に落としたものである。ただし、表記は解説文のものである。また、前号で見たように、シネウンナイは、松浦武四郎がこの踏査に携行した野帳(フィールドノート)の『巳第二番』の記録や、安政六年(一八五九年)に作成した『東西蝦夷山川地理取調図』には掲載されながら、『丑寅日誌』では、脱落していたものである。

今回は**地図**のポロと示ンが付いたオウコッナイを中心に見ていきたい。オウコッナイは、全道各地に見られるアイヌ語地名で、昭和三十一年に刊行された知里真志保の『地名アイヌ語小辞典』では、次のように解説されている。

o-ukot-nay オウコッナイ 二つの川が川尻で合流しているものを云う。(o(隙間)がni(おたがい)koi(くっついている)nay(川))

興部町の紀源になった、興部川のオウコッペ(o-ukot-pe川尻がお互いにくっついているもの=川)が、最もよりである。

さて、**写真**は『巳第二番』に記載されたオウコッナイの松浦武四郎の解説である。

ヲ、コツナイは山の両方より水が落来り、すじと成て落るが故に、其さま犬がつるみし如くによって云

『巳第二番』

也ヲ、コツはつるむ事を云。

『丑寅日誌』では、トウレアサラニ(turesi-zarunip)オウバユリの鱗茎一を入れた一壺を浮船から三丁(約三七〇)上流に、フ、コツナイの小さい川のポン(pon 小さい)、その一丁(一〇九)上流に大きい川のポロ(oro 大きい)ヲ、コツナイがそれぞれ次のように記述されている。

ホンヲ、コツナイ

小滝左りの方に有。前に二ツの岩有。一ル上りて

ホロヲ、コツナイ

左りの方少しの滝也。川巾はふかく前に大岩二ツ有。其また両方流有。ヲ、コツナイフイラと云ヲ、コツと云は犬の交合の形を云。此沢両山より細流一すじ落来り、其二筋合して一流と成。其流を遠くより見るに、犬の交合のごとしと云よし。

松浦武四郎は、ポンと示ロの付いた完璧な形のオウコッナイを採録した。しかし、両川の川口(知里のいう川尻)は、松浦が書いているように、現在も一丁離れていて、川口が合流していない。他方、松浦がポロヲ、コツナイで書いた「其二筋合して一流と成」という状況もこの川の川口には全く、語意は判然としているが、問題の残る地名である。

明治二十三年に調査した永田方正は、「オウコッナイ(oukot-nai合川)—川末の合流スルヲ云フ」と書き、ポン・ポロの採録はない。

昭和三十五年に知里真志保は、「オウコッナイ(o-ukon nai 川尻がつながりあっている川)。或は、オオコッナイ(oo-kot-nai 深谷川)の転訛か。」という転訛を書いている。

アイヌ語地名の意味は明確だが、先に書いた問題が残り、その解明を今後の研究課題としたい。

地図のポロオウコッナイの沢を見ていただくと、JR函館本線の伊納第一トンネルと、神居トンネルがこの沢で、わずかな区間が開いていることがわかる。昭和四十四年に滝川～旭川間が電化・複線化された時、この沢と国道十二号の間に、工事用の「神光橋」が架設され、この沢の沢口には、工事関係者の宿舎など多くの建造物が建っていた歴史がある。松浦武四郎がこの沢を見た約百十年後のことであった。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します

16/06/07 (101) ―連載百回記念・神居古潭回想―

―連載百回記念…神居古潭回想―

本紙五月十日付で当連載百回記念として、筆者のインタビュー記事を掲載いただいた。その上、ありがたいことに、本紙事務局として述べた、連載十三回から百回までのインターネット掲載が決定したと、掲載者から連絡があったことを、まず報告させていただく。

さて、今回は百回記念として、山田秀三氏と神居古潭の思い出、そして神居古潭のジオパーク運動の二点について述べさせていただく。

写真①は、実証的なアイヌ語地名研究を確立された山田秀三氏が、平成三年に北海道新聞文化賞を受賞された時に、記念撮影をさせていただいたものである。山田先生は九十一歳でした。その山田先生が、八十八歳の米寿の祝いと『アイヌ語地名を歩く』(北海道新聞社刊)の出版記念の会が札幌で開催され、山田先生は久しぶりに北海道に来られた。翌日の会の翌日には、初山別の地名由来調査のために羽幌に宿泊されたのであった。

写真① 山田秀三氏と記念撮影

初山別は、松浦武四郎の『西蝦夷日誌』では、「シユサンベツ、本名はソウサンベツとそよし。薄落ちる川の表なり」とあり、ショサンベツ(ｘｏｒｏｋｏｍｅｔｓｕｎｐｅｔｓｕ 滝が流れ出る川)の確認が、調査目的であった。幸いにもこの調査に同行させていただき、後日現地調査して初山別川支流の冷水沢に六つの滝があり、松浦の聞き書きが正しいことを報告させていただいた。

この初山別調査の帰途、霧立峠を越えて雨竜川のポン・カムイコタンで休憩中に、山田先生が、「高橋君、数年前に神居古潭のテシ(ｔｅｓｉ 岩壁、壁柵)を見たが、昔の迫力がないように思ったのだが、どうかね」と仰られた。私は慌てて、「先生が知里先生に提供されたテシの写真は、昭和三十年代に国道十二号から川側に降りられて撮影されたはずです。今回、先生がご覧になられたのは、新しい岩見大橋の高い位置からご覧になったので、迫力が感じられなかったのだと思います」とお答えしたのだった。

写真②は、山田先生撮影のテシの写真。**写真③**は、対岸の石屋から撮影したもので、昭和五十七年に完成の岩見大橋の高さがよく分かる映像にした。これで石の事情が判然とする。

山田先生一行は、旭川市近文の荒井源次郎古老の家に寄られて、即日札幌に帰られた。

当連載449でも紹介したが、知里真志保が、昭和三十五年に発表した『上川郡アイヌ語地名解』(『旭川市史』第四巻『年史』)に掲載の写真七点は、知里の調査に同行された山田先生が撮影したものである。

山田先生と知里の神居古潭の調査は、前日、荒井源次郎宅で、近文の古老から概略を聞き、翌日、神居古潭の案内は、石山アツムヤシク長老と西野ネンクアイヌ長老、いずれも山田先生の表記のお二人。山田先生は、「いずれも尊敬すべき長老方で、我々は無心に一つ一つの地名を教わっていった」と思信に書かれている。しかし、残念ながら知里への協力は、写真の提供だけで終わってしまった。

終わりに、再度、神居古潭のジオパーク構想に、ご支援をお願いしたく、連載する次第。

神居古潭には、多くの財産がある。再掲すると、昭和三十二年の北海道指定文化財の『神居古潭竪穴住居遺跡』、昭和四十一年指定の旭川市指定文化財の『神居古潭おう穴群』、平成二年指定の『旧神居古潭駅舎』がある。平成九年には、『旭川八景』に選定される。平成十三年には、『北海道遺産』として、石狩川とアイヌ語地名が選定され、これまで見てきたように、神居古潭はその一つの象徴、あるいは代表でもある。加えて、平成十九年には、『日本の地質百選』に選定されている。

これだけの財産をもって、「あさひかわジオパークの会」と、官民あげて、神居古潭渓谷を起点としたジオパークに加盟認定を働きかければ、実現の可能性は高いと信じてやまない。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します

研究 旭川のアイヌ語地名研究 (101)

高橋 昌

写真② 山田氏撮影のテシ

写真③ 岩見大橋とテシ

16/07/05 (102) ハルシナイから上流の地名(11)

断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑫
高橋 昭

ハルシナイから上流の地名⑪

地図の石狩川右岸は、旭川サイクリングロード(通称・神居古潭サイクリングロード)となっていて、五万分一地形図には、「自転車専用道路」と記載されている。

新緑の深閑とした神居古潭サイクリングロードを走り、ホロオウコッナイの橋を通過した時、一秒にも満たない汽車と列車の通過音。驚かされたことがある。**地図**のように、伊納第一トンネルと神居トンネルが、この沢で百メートルにも満たない距離ではあるが、列車が地上に姿を見せる。丸木舟時代と、神居古潭の鉄道建設当時を研究している者にとっては、感慨深い発見であった。

さて、安政四年(一八五七年)に、アイヌの人たちが漕ぐ丸木舟でここを上流に向かった松浦武四郎は、携行した野帳(フィールドノート)の「巳第一番」に、**写真①**のように記録している。

川中大岩一ツ。厚かし。
ホロラ、コッナイフイラ　左
引川中大岩

文中に、「引」とあるのは、丸木舟を綱で引く意味で、急流のために、櫂や棹だけでは上れず、舟を綱で引く意味を表している。

松浦武四郎は、「巳第一番」ではこの急流を、ホロラ、コッナイフイラ」と記しているが、幕府への報文目録の「再巡石狩日誌」では、「ラ、コッナイフイラ」と表記しているので、**地図**では、こちらを採用した。

写真②は、オウコッナイフイラの大岩二つ。なお、ポンオウコッナイの下流にも、大岩が六個乱立している。

②大岩3つ

今回、ここでは丸木舟時代の「プイラ(puyra)」についてまとめておきたい。昭和三十一年に、知里真志保は、『地名アイヌ語小辞典』には、「puyraプイラ・渦巻の群在する水面。潮汐(うしお)。激湍(げきたん)」と記している。

当連載94の「アソナイフイラ」で見たところであるが、松浦武四郎は、このアソナイフイラについて、「大岩突出し居る。水打ち岩浪立つを云。フイラは波立つ事也」と書いている。プイラ(puyra)は、単に波が立つだけでなく、大岩が川中にあって、激流がその大岩に当たって波が立つ状況としている。それ故、丸木舟時代には、転覆・破船の可能性のある危険な水域であることが分かる。

文化四年(一八〇七年)、近藤重蔵が、**地図**のレーコプイラ(rekopuyra)名前を持つ、激流・渦巻な激流の意味で、乗っていた丸木舟が転覆・破船し、一〇〇間(約一八〇メートル)ほど流され、御朱印まで濡らしたというエピソードを前に紹介した。

旭川市文化財保護委員(民族学)の杉村ギナラアックさんの夫君の杉村コキサンクルさんは、昭和十年八月五日、若い同族二人と丸舟に乗り三十里の石材を積み、増水した石狩川を下った。**地図**のポンコッナイフイラ付近で大岩に激突して破船。若い二人は助かったが、杉村コキサンクルさんは、八日後にカムイコタンの下流で遺体で発見された。近文コタンの悲しい水難事故記録であった。

プイラ(puyra)は、石のように岩場の多い危険水域を表し、明治三十五年生まれの石山長次郎さんは、**地図**のルシ上流で、チプナタプイラ(cipnatapuyra)「舟頭が砕くので、これより神居古潭の方へ舟ではいけない」と報告している(『昭和五十七年度アイヌ民族調査II』)。カムイコタンのプイラ(puyra)は、岩場の波立つ危険水域を示す言葉であった。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します

16/08/02 (103) ハルシナイから上流の地名(12)

旭川のアイヌ語地名研究 (103)

高橋基

ハルシナイから上流の地名⑫

前回は、カムイコタン流域のプィラ(puyra)は、岩場の険しつ急峻水域を示す言葉であると結びをした。その際、明治二十五年生まれの石山長次郎さんの「チャナタプィラ(cinatarpuyra)=早瀬が続くので、これより神居古潭の方へ舟では行けない」という言葉を紹介させていただいたその位置は、**地図**のペンケチピナタラの下流と推定される。

今回、**地図**の「パンケチピナタラ」の解説にも有益な情報と、紹介させていただいた面もある。安政四年(一八五七年)、松浦武四郎は、丸木舟に揺られながら、持参した野帳(フィールドノート)の「日誌」、番に、**写真①**のように、「パンケチピナタラ=チピナタラは深き事を云也」と書き、幕府への報文日誌の「日高石狩日誌」でも、パンケチピナタラ=チピナタラは深き事を云也」(註=上流のペンケチピナタラに対し、「パンケ」=川下の「下」の意味)の深き淵と云爲」と記述している。

前記の石山長次郎さんのご尊父の石山アツミヤシクルさんは、門野ナンケアイヌさんと共に、知里真志保や山田秀三とカムイコタンまで同行して、アイヌ語地名を伝授した近文の方であった。その情報を得た知里真志保は、まず、明治二十三年に上川を調査した永田方正の地名解を紹介、その上で、新説も次のように加えた。

チプネハッタル(cip-ne-hattara 舟淵=此処ヨリ上流ハ激流ナク水深静ニシテ舟ニ乗ルヲ得ベシ。故ニ名ク。此処第二十五号ノ径道あり「ふなぶちのかははし」トモ名クベシ。

さて、松浦武四郎の探録したチピナタラは、前述の石山長次郎さんの「チャナタプィラ(cinatarpuyra)」としてその音が伝えられているし、松浦、永田、知里の三者とも「ハッタラ(hattara 淵)地名」であることは共通している。ただ、チプネ(cip-ne-舟形をしたか、チプニ(cip-ni-舟)か、はたまた、別な解釈が出来るのかは、今後の検討課題である。

明治二十一年九月に上川道路の改修工事が竣工し、翌年にこの地名調査した永田方正は、次のように地名解を残した。

チプニハッタラ(cip-ni-hattara 舟淵=此処ヨリ上流ハ激流ナク水深静ニシテ舟ニ乗ルヲ得ベシ。故ニ名ク。此処第二十五号ノ径道あり「ふなぶちのかははし」トモ名クベシ。

地図のパンケチピナタラとペンケチピナタラの位置は、「日高石狩日誌」によってポした。他方、永田方正のチプニハッタラは、当時故意でも指摘したが、**地図②**の明治三十年製版の「北海道仮製五万分一図」(②明治五万図)と表記では、**地図**のレーコロプィラの位置に誤って書かれていた。永田方正のチプニハッタラは、「径道」という文字から判断すると、**地図**の★印の位置が想定される。ただ、明治二十三年頃の上川道路地図が発見されて、永田方正が書いた第三十五号ノ径道」が判明すれば、永田が記録したチプニハッタラの位置が確定できるが、現況では地図の発見は望むべくもない。

松浦と永田のパンケチピナタラの位置がかなり違うが、松浦武四郎は、アイヌの人たちが漕ぐ丸木舟に乗り、フィールドノートの「日誌」番にスモを取りながら上流へ向かっている。この事実から、少なくとも当時のアイヌの人たちが理解していた場所が、**地図**のパンケチピナタラの位置と信頼できる。伝説や伝承が古いものがより原形に近いものであるという論理と同じで、**地図**の位置が正しいものと考える次第である。(アイヌ語地名研究会)

※前月号一部誤に訂正しました

16/09/06 (104) ハルシナイから上流の地名(13)

断章

旭川のアイヌ語地名研究 (104)

高橋 基

ハルシナイから上流の地名 (13)

今回は、[illegible]地図のポロシラっとモシリについて述べる。実は、この二つのアイヌ語地名は、松浦武四郎の『西蝦夷日誌』にしか記されていない、松浦武四郎の記録としても、珍しい例なのである。

写真①は、『西蝦夷日誌』の松浦自筆の『ポロシラリ』と『モシリ』で、本文部分は紙幅の関係で割愛した、前述のように、この二つのアイヌ語地名は、安政四年(一八五七年)に、松浦武四郎が調査に持参した『野帳』(フィールドノート)の『第一番』では、当該箇所が文章では表現されているが、アイヌ語地名の表記がなく、『西蝦夷日誌』に清書する段階で、『ポロシラリ』と『モシリ』のアイヌ語地名表記が与えられたものと推測される。

しかし、公刊された『西蝦夷日誌』や、『東西蝦夷山川地理取調図』に記載されなかったこともあり、永田方正の『北海道蝦夷地名解』や、知里真志保の『上川郡アイヌ語地名解』にも登場せず、したがって明治三十一年製版の『北海道仮製五万分一図』にも記載がないのであった。

まず、松浦武四郎が書いた『ポロシラリ』は、ポロシラっ(poro-sirar)大きい川中の岩)だが、知里真志保は『地名アイヌ語小辞典』で、『シラルsirar、一一岩(〇〇川)…④』『チカプミ』川の中の岩」と『チカプミ』=近文で採録したのが、『川の中の岩』である。松浦が記録したポロシラリも、正に、『川中の岩』で、『西蝦夷日誌』の『第二番』では、『二丁』(註=[illegible]大岩二ツ川中に有」と記録、『西蝦夷日誌』に清書する段階で、『ポロシラリ=大岩二ツ川中に有、其両方フイラ(註=フイラpuyra岩場の白波立つ水面)に成る也』とアイヌ語の『ポロシラリ』が初めて記述されたのである。

写真②下流からモシリの左岸側を写す

さてモシリ(moshir)川中の島=中州)は、[illegible]地図の現行五万分一の地形図にも、石狩川の中州、川中の島が描かれている。実際に有名な[illegible]加内町の母子里(モシリ・ウン・ナイ moshir-un-nay 川中の島がある・川)、また、赤平市の茂尻駅や旧・茂尻炭鉱の茂尻(モシリ・ケン・オマ・ナイ moshir-ken-oma-nai 川中の島・の下手・にある川)などで、モシリは比較的知られたアイヌ語地名である。

松浦武四郎は、『野帳』『第一番』では、このモシリについて『中洲出来る。是より石の方に入六分山迫』と簡潔に記しているが、『復文日誌』の『西蝦夷日誌』では、アイヌ語表記も加えて、次のように記している。

モシリ=中洲一ツ有、其石の方(註=上流に向かって右側ち左岸側)大川にて左りは枝川と成、凡其洲六十間(註=約一〇九メ)計有、両岸急流フイラ(註=フイラpuyra岩場の白波立つ水面)多し、又此処も二人は舟を見かす也。

写真②は、現在のモシリの左岸側を下流から写したもの。松浦武四郎が調査した安政四年時点では、左岸側が本流で、右岸側が支流としているが、現在は逆である。現在の右岸側はカムイコタンの入口のカムイウッカ(kamuy-utka 神・瀬)と同じように、本流が右岸に打ち付ける急流・本流となっている。左岸側は、写真でも分かるが、岩の多い水路で、松浦武四郎が乗った丸木舟を、二人で舟で引き上げたという状況を思い起こさせる。

『モシリ』は、『西蝦夷日誌』にしか記載がないアイヌ語地名であるが、その中州が現在も実在するのは、感慨深いものがある。(アイヌ語地名研究会会員)

※旭川第一週毎に掲載します

16/10/04 (105) ハルシナイから上流の地名(14)

連載
旭川のアイヌ語地名研究
(105)
高橋 基

ハルシナイから上流の地名⑭

今回は、[illegible]図のアヌトゥラシナイ(現公式河川名・[illegible]取川)について述べる。

安政四年(一八五七年)、松浦武四郎は、幕府への報文日誌の『再巡石狩日誌』に、この[illegible]取川について、アノトラシ―左りの方小滝有り川中小岩多し」と書いた。「(石狩川の上流に向かって)左にアノトラがあり、その川口には、小さな滝が見える。この川は小石が多い、ということである」―との意味である。残念ながら、アノトラシの意味は書かれていない。

明治二十三年に調査した永田方正は、『北海道蝦夷語地名解』に、「アヌトラシ(ann-turasi)―[illegible]を捕りに登る川」と記述した。この川は、アイヌの人たちが、[illegible]を捕るために、登る川であると、当時の伝承を記録したのである。「ド」は、日本語にはないアイヌ語の発音「tu」を「ド」と表記したもの。後述する知里真志保は、「tu」を「トゥ」と表記、[illegible]図のアヌトゥラシナイは、知里のこの表記によったものである。

上川地方初の五万分一の地形図の明治三十一年製版、北海道仮製五万分一図では、「アヌトラシナイ」と「ナイ」が付き、「ラ」である。遡って、明治四十三年改版と、大正五年調図五万分一地形図には、河川名は記載されていない。昭和二十八年発行の五万分一地形図に、初めて「[illegible]取川」が記載された。勿論これは、前述の永田方正の「[illegible]を捕りに登る川」の意訳で、漢字でいえば河川名となった。

昭和三十五年になって知里真志保は、『上川郡アイヌ語地名解』で、次のように永田とは全く異なる伝承を書いた。

アヌトゥラシナイ(ann-turasi-nay〈an-an-turasi-nay 我等・よく・登って行く・水〉―雨竜郡の多度志駅名―Ian-ri-nay 神・酒生する・水)へ遡って行くのにこの水を登って行った。

「トゥラシ(turasi)」は、「川や水に沿ってある意味で、川を交通路として利用していたアイヌ時代の交通路をポ川名に使用された。この[illegible]取川から山越えして、現在の主要道道九十八号、旭川多度志線と同じように、多度志川沿いに多度志へ抜けたのである。知里真志保は、アイヌ時代の交通路の貴重な伝承を記録しておくれたのである。

さて、写真の[illegible]取川の看板は、旭川サイクリングロード(別称・神居古潭サイクリングロード)に取り付けられたものである。看板の右の舗装道路がサイクリングロードで、手前の鉄柵が[illegible]取川に接する橋である。

旭川サイクリングロードは、昭和四十四年に、旭川～蘭川間の廃線が電化・複線化された時に、伊納駅～納内駅間は大部分がトンネル化して、神居古潭駅は廃止駅となり、石狩川沿いの鉄路は撤去されることになった。旭川市は、その鉄路の跡を舗装して、旭川サイクリングロードとして活用した。当時、これは鉄路の再活用として夢と評価された。

写真 「[illegible]取川」の看板

ところが、平成二十一年八月四日に、[illegible]図のハンケチピタラの交差表示箇所周辺から落石があり、管理する旭川市土木部土木管理課では、全線を調査したところ、他に落石の可能性のある危険箇所が見つかった。そのため、平成二十一年から現在まで、伊納ゲートから、神居古潭ゲート間を通行止めとしている。

旭川市アイヌ語地名表記推進懇談会では、石狩川右岸の「[illegible]取川」にも、「アイヌ語地名表示板」を設置する計画(他に、箇所であったが、この通行止めで実現していない。現況では予算の関係で、完全な落石防止工事が出来ないので、神居古潭サイクリングロードの再開の見通しが立たないとのことである。旭川の文化遺産の観光や、神居古潭ジオパークの観光資源の面からも大きなマイナスであり、誠に遺憾なことである。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※[illegible]月[illegible]日掲載

16/11/01 (106) ハルシナイから上流の地名(15)

旭川のアイヌ語地名研究 ⑮

高橋 昌

ハルシナイから上流の地名⑮

前回は[illegible]のアメトラシナイ(ame-tura-si-nai)と[illegible](長寿よくゆって行く沢)を紹介した。明治二十三年に調査した永田方正は、その目的は「[illegible]を通りにくい川」としたので[illegible]川と名づけられた。

他方、昭和三十五年に、知里真志保は、この川から山越えして、[illegible]の多寡表へ行く交通路としての川であると伝承を記録した。

今回と次回は、[illegible]の石狩川方面のアイヌの交通路と[illegible]二号の歴史を追跡していきたい。安政四年(一八五七年)、アイヌの人たちが通る丸木舟で上流に向かった松浦武四郎は、アメトラシナイから二十二つ上流に向かって左岸のルチシホコマナイ([illegible])に上って行く沢)について、次のように書いた。

残念ながら、アイヌ語の意味には触れていない。

ルウチシホカラマナイ(ru-chi-shi-kara-mai-nai)右の方ホ川、流域廣く、いまく多く、岩は石なり。樹木密生して実に究竟の獣道。

明治二十三年に、[illegible]の[illegible]を通り、調査した永田方正は、次のように記録した。

ルチシホコマナイ([illegible])山脈に[illegible]への峠あり、故に名づく。[illegible]に二水源あり、故に水源多くして、[illegible]なり。

また、ララマニウシナイについては、次のように地名解をしている。

ララマニウシナイ(ra-ra-ma-ni-u-si-nai)水源川。此川の源は水多し、故に名づく。[illegible]

ララマニ(ra-ra-ma-ni)はアララギ、別名イチイのこと。オンコ(水源)は方言。

当連載の第一回で紹介したが、丸木舟の通らない多くはアイヌの人たちは、[illegible]のペンケアソナイ(pe-ke-a-so-nai)川(ペ=水、ソ=多い沢)、公式には石狩川を神居古潭、[illegible]川から山越えして、石狩川上流へ往来していたのである。山越えの峠が、ルチシホコマナイの上流にあったのである。

安政五年(一八五八年)三月二日(陽暦四月十五日)に、松浦武四郎はアイヌの人たちの案内でこのマタ沢(ma-ta-sa-wa)を通り、旭川の番屋に入った。

明治十九年六月二十四日に、神戸集治監の囚徒によって造成された上川仮新道(国道二号の前身)はこのアイヌの人たちが石狩川と山越を利用した通路であった。明治二十一年九月二十二日、上川

[illegible]の第一代北海道長官の永山武四郎一行がこの山越を通った事は、当連載の第一回で紹介したので、[illegible]インターネットで「旭川のアイヌ地名研究」で検索すると[illegible]可能。

右の永山武四郎一行は馬車で、辺渡(辺谷)内から山越し、山頂に[illegible]知川十一里の[illegible]があり、山麓を下り[illegible]収(註=ララマニウシナイのことである。

永山武四郎以前の二人の偉い山越紀行も紹介しておこう。上川仮新道の開削を高橋直治に命じた初代北海道長官の岩村通俊も上川巡察で、明治二十年十月十二日、山行でこの山越を通り、次のように[illegible]に記した。

春若内、[illegible]、[illegible]、[illegible]を経て[illegible]野付峠を越す。

次は、明治二十一年七月三十一日、陸軍次官[illegible]中将一行が、山田長政の[illegible]巡察で、この山越を通過することも[illegible]で、次のように伝えている。

神居古潭ヲ過キテ春若内ヲ過リ、右折シテペンケアソナイノ峰ヲ登リ三ツ山ヲ過ギテ行クコト約定里ヲ[illegible]ルマニ川ノ辺ニ下リ行程河畔二出テ[illegible]ノ川二出ツ

これらの記録から想定したのが、[illegible]図の[illegible]線のルートである。次回も、春若内の大曲りの国道二号地図へと続く。(アイヌ地名研究会代表)

※[illegible]に掲載します

16/11/01 (107) ハルシナイから上流の地名(16)

ハルシナイから上流の地名⑮

前回は明治地図のアメトラシナイ(ame-tura-si-nai)から(ni-ni-ka-ru)を経て行く沢を紹介した。明治二十二年に調査した水田方正は、その目的は「鹿を追いに登る川」としたので「鹿沢川」と名づけられた。

地元昭和三十五年に、知里真志保は、この川から山越えして、樺太側の多蘭志へ行く交通路としての川である、と伝承を記録した。

今回と次回は、明治地図の石狩川左岸のアイヌの交通路を国道二号の歴史を追跡していきたい。安政四年(一八五七年)アイヌの人たちが幕吏五人を伴って下流に向かった松浦武四郎は、アメトラシナイから三十二キロ上流に向かって石狩のルチンポコアナイ(ru-tin-po-ko-a-nai)を下って入って行く沢について、次のように書いた。

また、ウラマニウシナイについては、次のように説明をしている。

ウラマニウシナイ(ura-ma-ni-u-si-nai 水流)—此川の沿岸水多し、故に名づく。鹿に多し。蝦夷、今は掛谷と云ふ。

ウラマニ(ura-ma-ni)は、アララギ、別名ウチイのことオンコ(水松)にたとえる。

当連載の冒頭で紹介したが、丸木舟の通らない多くはアイヌの人たちは、明治地図のペンケソナイ(pen-ke-so-nai)川—の奥に多い。公式前川名・神居古潭・樺川から山越えして、石狩川上流へ住居していたのである。山越えの峠がルチンポコアナイの上流にあったのである。

安政五年、(一八五八年)三月、日(陽暦四月十五日)に、松浦武四郎はアイヌの人たちの案内でこのマタ丸(mata-ni)を通り旭川の番屋に入った。

明治十九年六月二十四日に、神戸集治監の囚徒によって造工した上川道(新道国道二号の前身)はこのアイヌの人たちが利用した山道を活用した道路であった。明治二十一年九月二十二日—山

越えの道、代正道長官の水山武四郎一行がこの山道を通った記事は、山道数の数で紹介したので参照いただきたい。インターネットで「旭川のアイヌ語地名研究」で検索すると連載目録。

右の水山武四郎一行は馬行で近代北海道内から山越えし、山道に、神居古潭(旭川十一里)の市街があり、山道を上り道路以上ラマニウシナイのことになった。

水山武四郎以前の、人の知らない山道紀行も紹介したが、上川改新道の開削を高畑佳官に命じた初代北海道長官の岩村通俊も、上山越えで、明治二十年十月十一日に、馬行でこの山道を通り、次のように説明した。

春志内、多蘭内、芽登内、蘭留以等を経て蘭野川越を経る。

次は、明治二十一年七月三十一日、陸軍大将・山中都一行が、山田長官の随行で、この山道を通過する。これも馬行で、次のように伝えている。

神居古潭ヲ過キテ春内ヲ過ギ、右沿シテ字ペンケソナイノ峠ヲ越ヘ、字ペンケソナイノ峠ヲ下リ、字ウラマニウシナイノ川ニ出ツ。

二人の記録から選択したのが、明治地図の……線のルートである。次回も、春志内の大曲りの国道二号地図へと続く。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一土曜日に掲載します

連載 旭川のアイヌ語地名研究 ⑮

高橋 昌